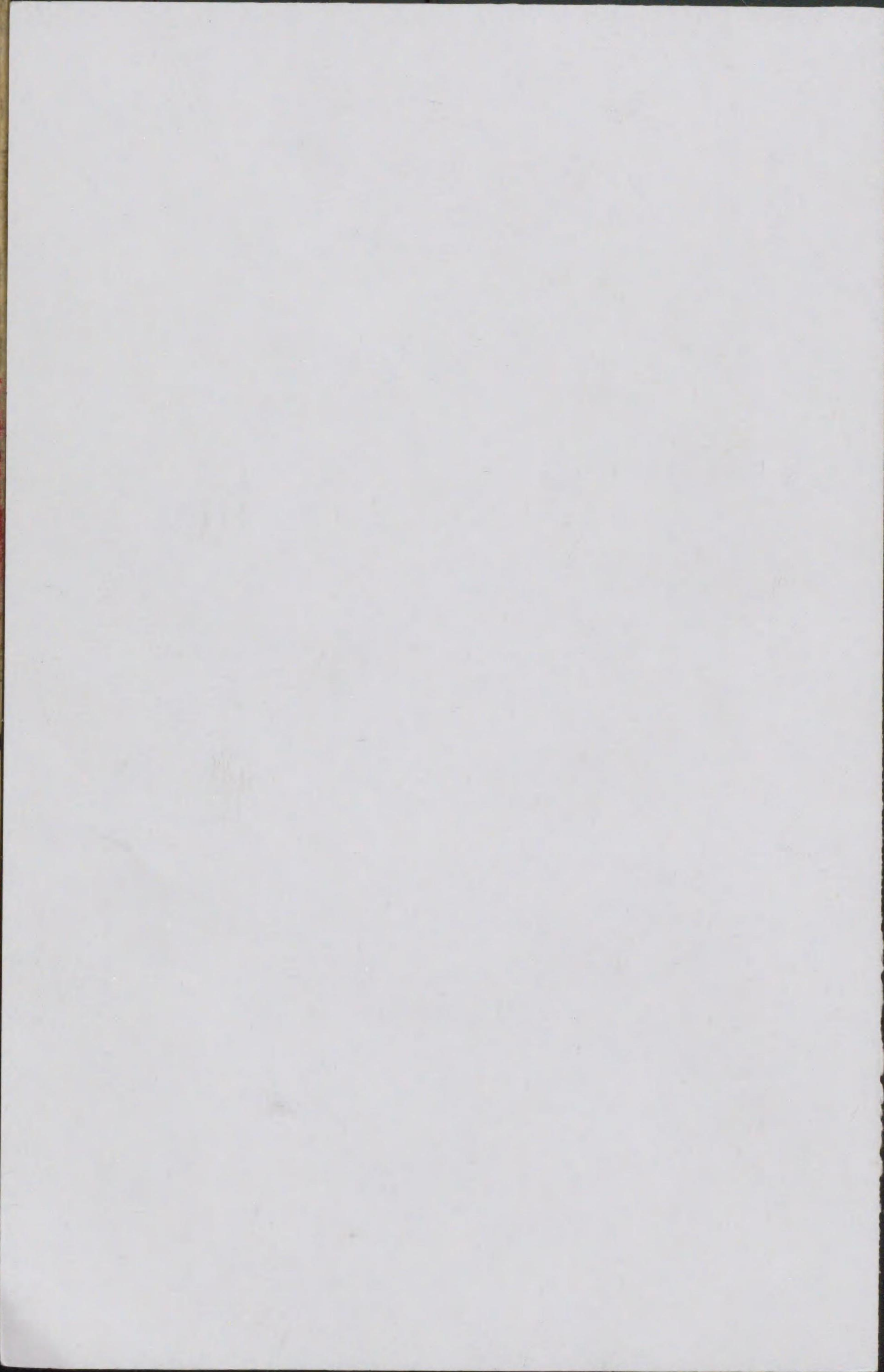


720
13

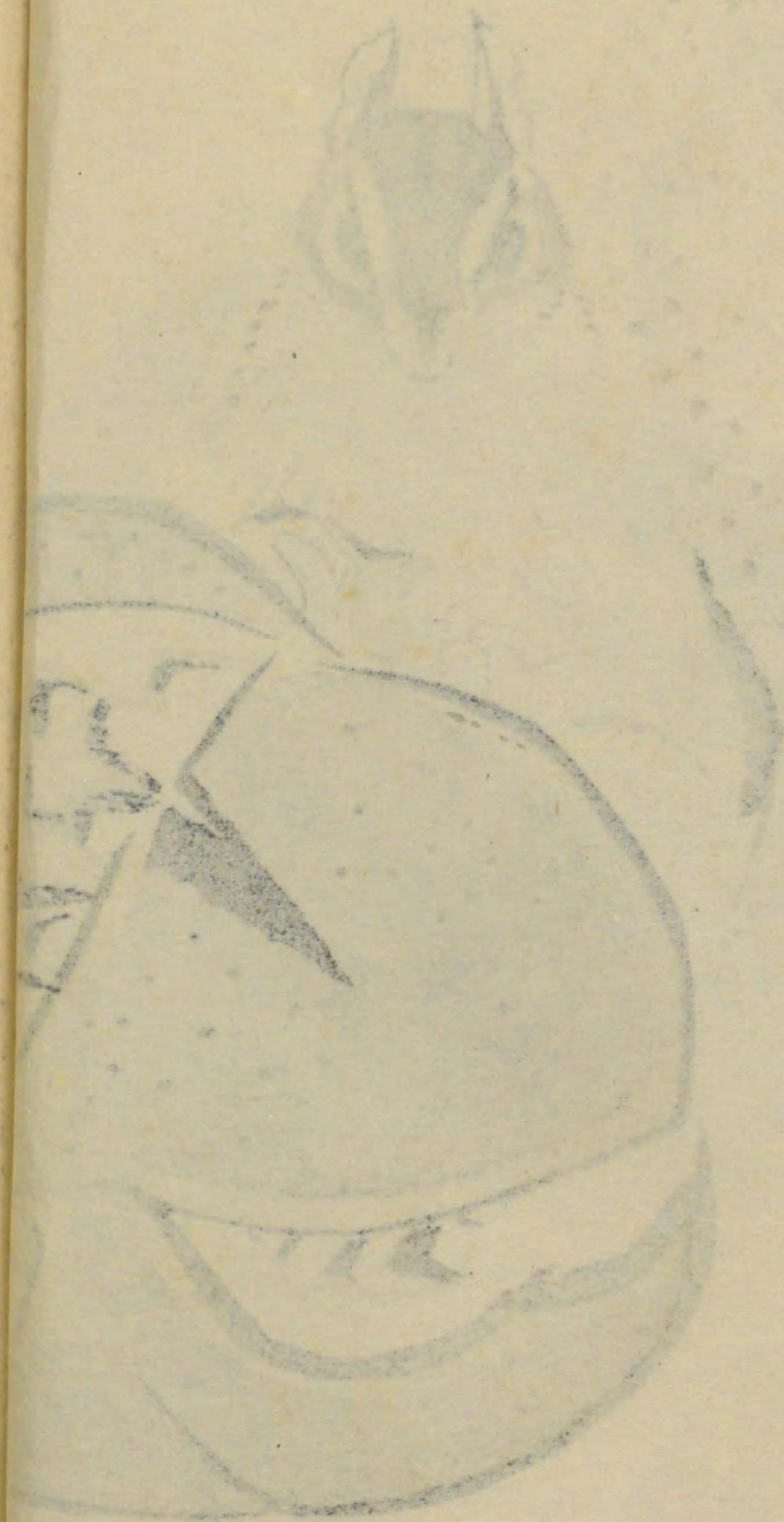
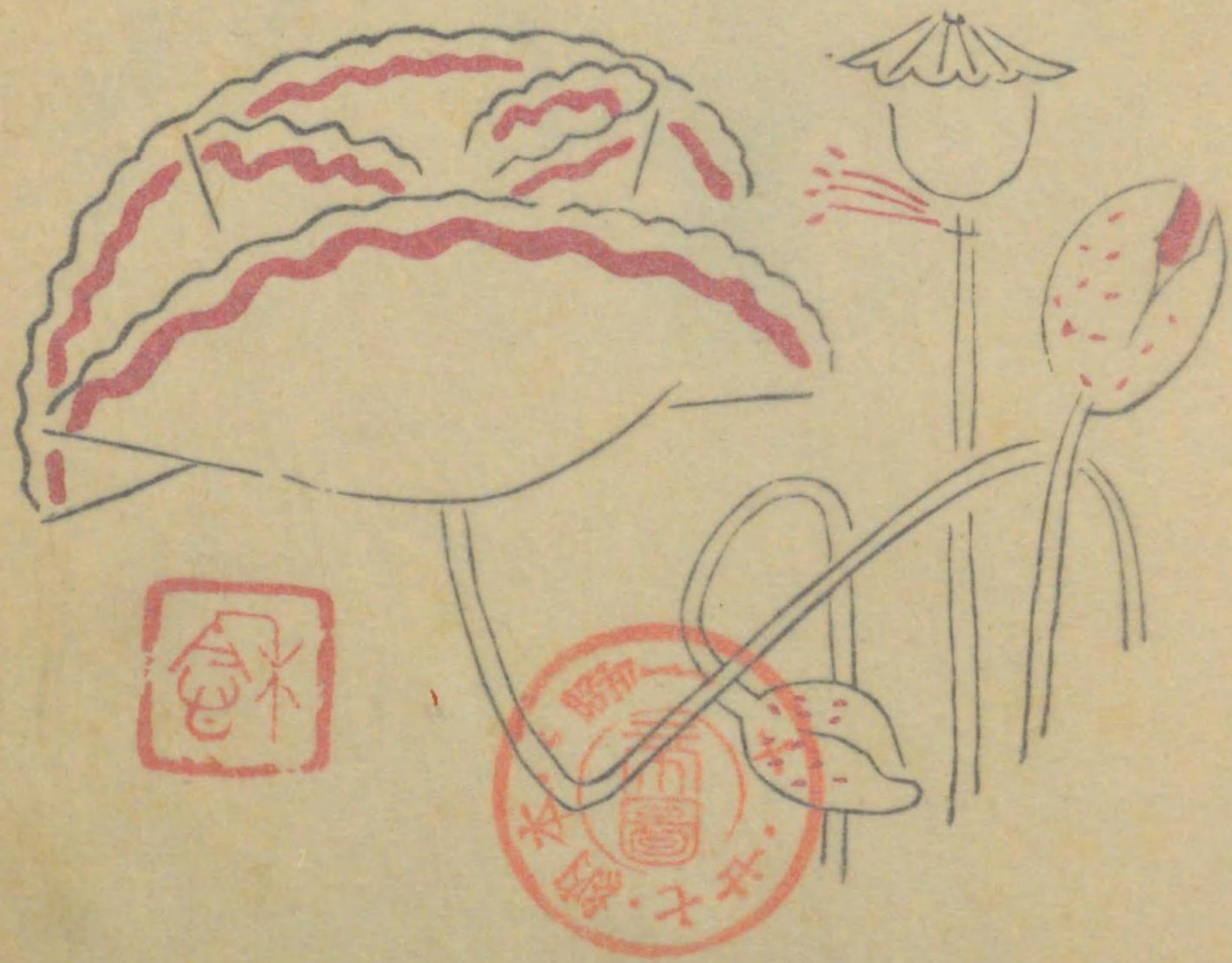
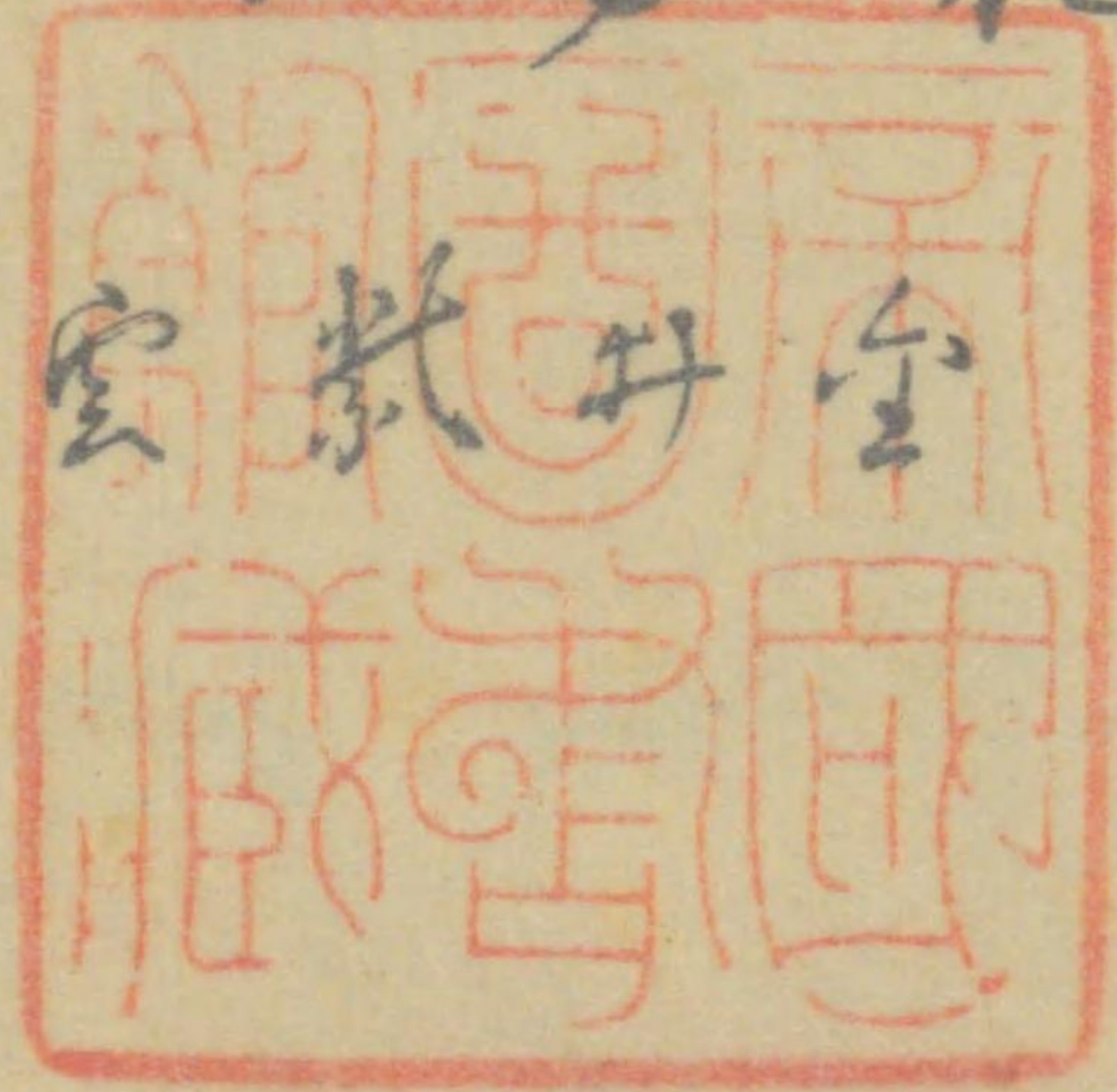
720-43
1200501587035





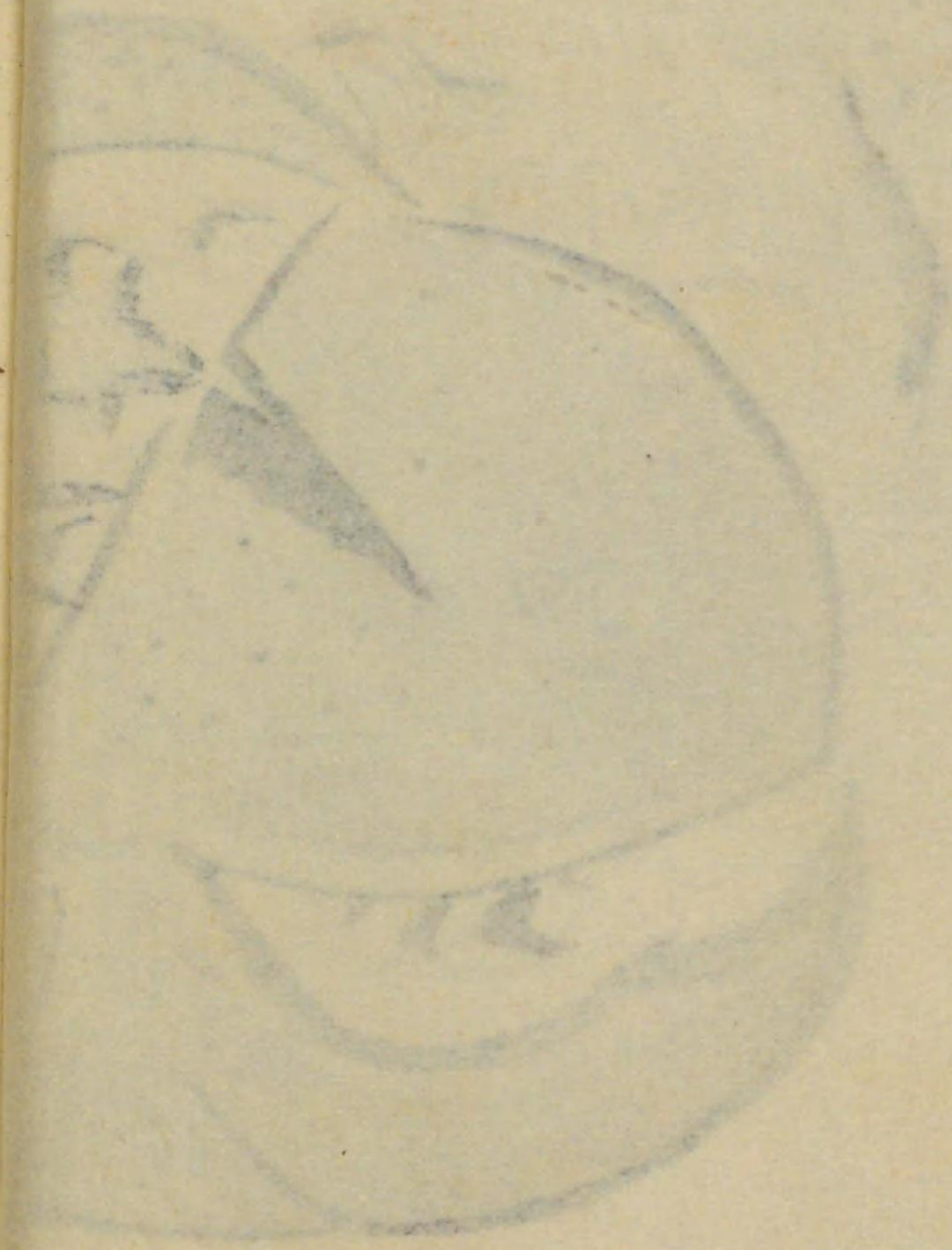
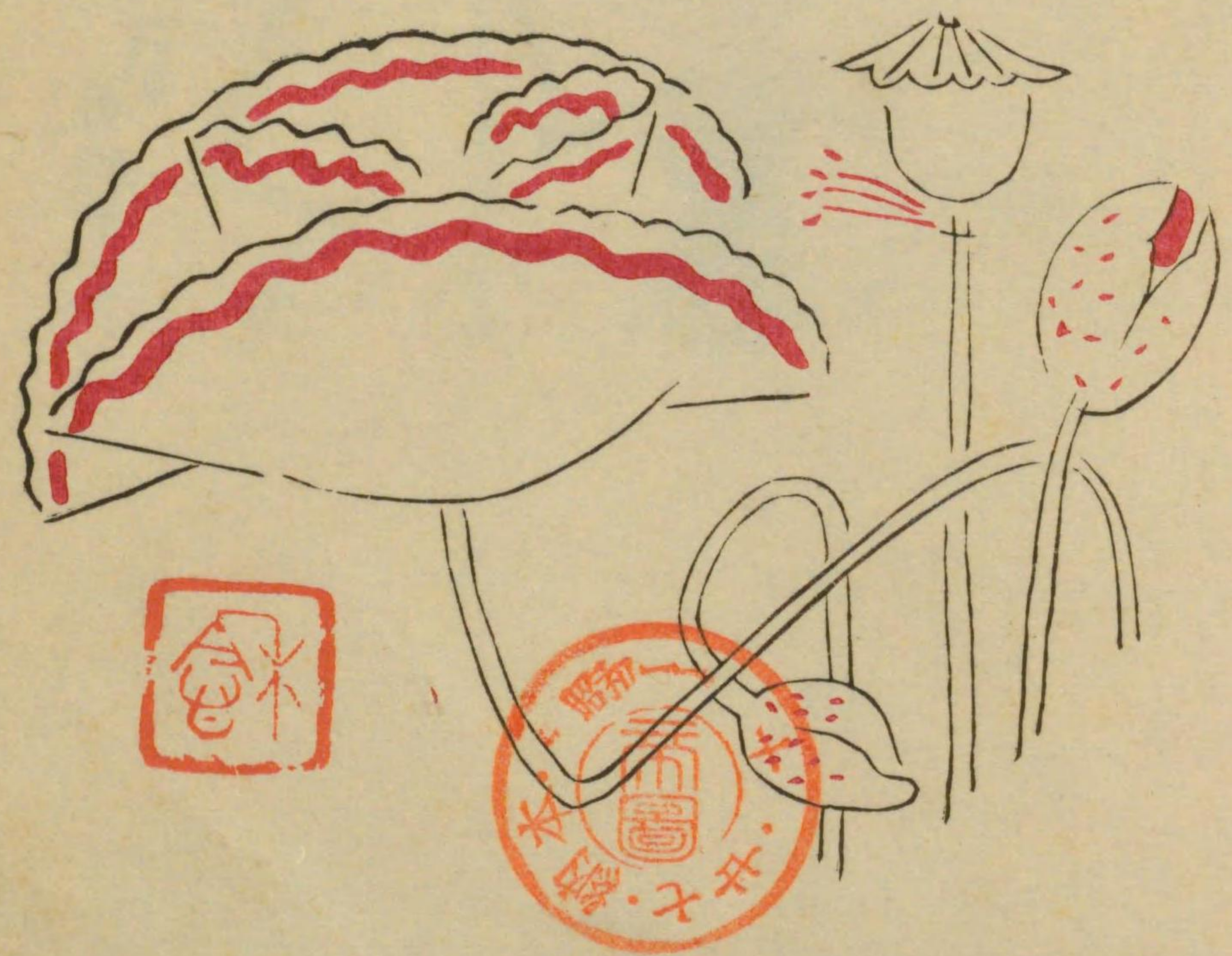
花 多 研 究

著



花 多 研 究

著

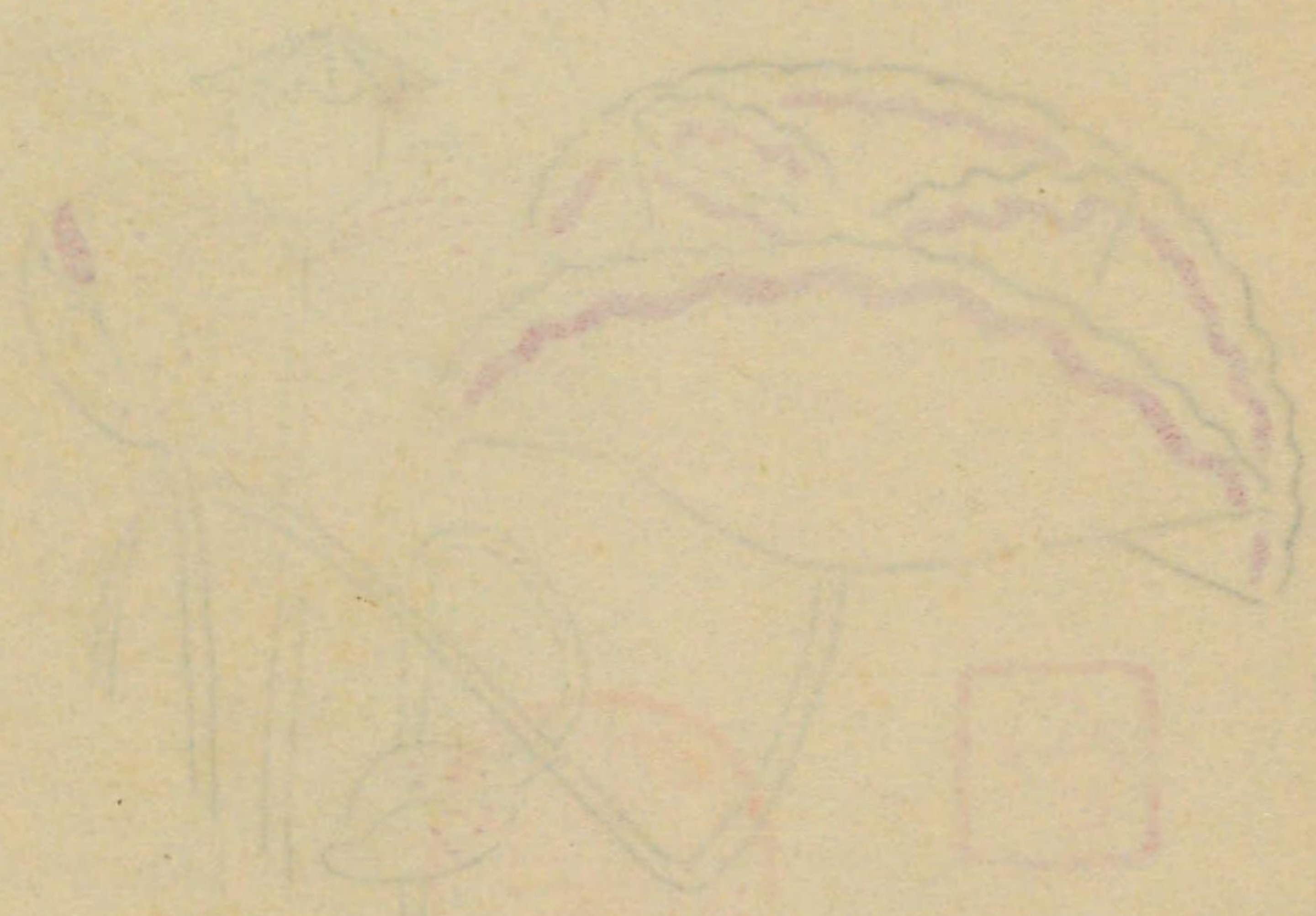




考
林雪之无醒一祭
善作生書

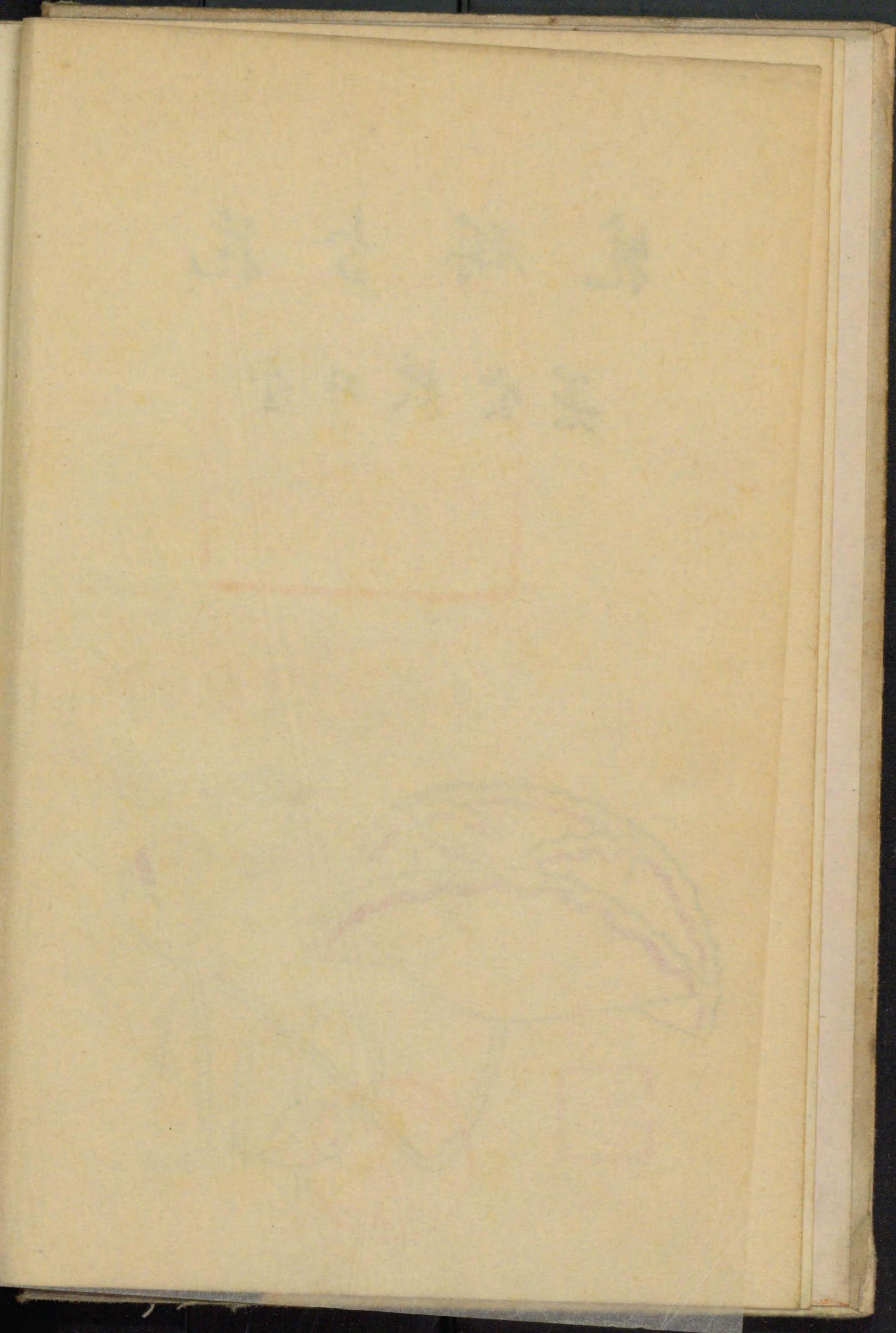


林雪之无醒一祭





考
林雪之九
一錄
善作生書



自序

この集には私がこれまで新聞や雑誌に発表しました、藝術に關する隨筆や感想の中から三十餘篇を擇んで收めました。

花鳥を主としたものが多いので、此の題名を附けましたが、中には、装幀、挿繪に關するものや、服飾藝術の一部、挿花に關するものも二三あります。それから卷末の「謎の畫家春日光親」は、これまで紹介されたことのなかつたもので、私に取つては、いろいろ思ひ出の種になるものが多いので採録しました。特に此の篇に就いては、故人になつた湯田玉水氏が思ひ出されてなりません。この書の成るの日氏の靈前に報告したいと思つてゐます。兎も角もかねて大方から、今まで書いた隨筆を集めてはといふ御希望に、漸く副ひ得たわけであります。

隨筆は、たとへば鏡に映つた自分の姿のやうなもので、その時の氣分に依つて筆にしたものゝ感じも違つて來ます。唯私は、花に依つて慰められ、鳥に依つて娛しむ

ことの出来た自分自身の姿を見て、その幸福を感じずには居られません。

花や鳥は、かうして終生私の師であり伴侶であります。花鳥研究と題した所以のもの、またこゝにあるのであります。

なほ本巻には、記念のため和田英作先生が、著者のために書いて下さった、肖像を掲げることになりました。身に餘る光榮です。

また装幀には、京都の西山翠嶂畫伯と福田翠光畫伯を煩はしました。かうして此の書も美しい晴衣を着て世に出すことの出来ましたことを、心の底から御禮申し上げます。

昭和十一年初秋

金井紫雲

花鳥研究

目次

花鳥畫漫談……………一

花鳥畫時代

花鳥畫の題材

慾の深い構圖

二品當朝の珍

繪そらごと

鶯の羽、目白の羽

應舉の寫生熱

秋の樹に初夏の鳥

蓮池群鶯圖

足利時代に明治の草

同じ年の頬白の群

東洋の静物畫

南畫の花鳥

浮世繪に現はれた植物

廣重の花鳥畫

奇異な花鳥動物畫

色彩から見た果實と蔬菜

繪畫と嫌はれる蟲

蟲曼荼羅

黄筌の蜥蜴

蠶螂の殘虐性

蠅の名畫

三
一九
二六
三七
四
五
六〇

蚊の畫賛

虱

繪畫に現はれた鳥

春菜畫趣

蔬菜と果實の藝術

花鳥と意匠

畫梅雜筆

墨 梅

畫かれた梅

紅梅の趣き

綠 萼 梅

紅筆青軸

梅に來る鳥

七
六
八
九
一〇
一一

雑草と藝術

..... 一〇八

六

服飾と藝術

..... 一〇六

金唐草の話

..... 一〇六

春の小鳥

..... 一三五

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯

野鳥をたづねて

..... 一四八

緑の翼

..... 一五七

佛法僧の飛翔

法隆寺の斑鳩

小鳥づくし

鳥

..... 一六三

◇

雲 雑 筆

..... 一六九

雨の畫趣

..... 一七七

水車、井戸、垣

..... 一八三

◇

装幀藝術のおもひで

..... 一九五

挿繪今昔

..... 二〇三

七

洋畫系の新聞挿繪家……………二〇九

畫集、圖録、目錄……………二一九



旅情畫趣……………二二六

男鹿半島

象 湯

厚 岸

白 老

中津 峽……………二二八

金 鑽 へ……………二四八

飛驒の笹魚……………二五四

式 根 島……………二五九

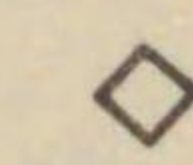
お花畑に立ちて……………二六五

落葉を語る……………二六八

鐵線花と風ぐるま……………二七七

玉 蟲 の 色……………二八二

卵……………二八六



鋏 の 音……………三六九

挿された華……………二九四



斷雲居雜筆……………二九九

鶴

鷺鳥擒獸

嘴 の 蟲

金 砂 子

渡邊 華山筆 秋草双鶯圖	一九
椿 椿山筆 春庭香艷圖	一九
田能村竹田筆 梅花双鶴圖	一九
高橋 草坪筆 蓮鷺圖	二六
鈴木 春信筆 蓮池美人圖	二六
窪 俊滿筆 山吹の玉川	二六
一立齋 廣重筆 鴛鴦圖	二七
黄 筌筆 蜥蜴圖	二六
徽宗 皇帝筆 水仙鶉圖	二七
傳 徐熙筆 雪中白鷺圖	二七
百合手 金唐草	二四
綠地 巢草 鏡草	二四

春の小鳥の放送を聞いて(南薰造氏から)	一三五
葛飾 北齋筆 凱風快晴	一六二
淀の 水車	一六二
傳 山樂筆 朝顔の垣	一六二
鐵線花を模様として	二七七
春日 光親筆 漁樵問答	三〇七

表紙題簽

西山翠嶂氏

裝幀意匠

福田翠光氏



蟹蝦圖 錢舜舉筆

(東洋の静物畫參照)

表紙題簽	西山翠嶂氏
裝幀意匠	福田翠光氏



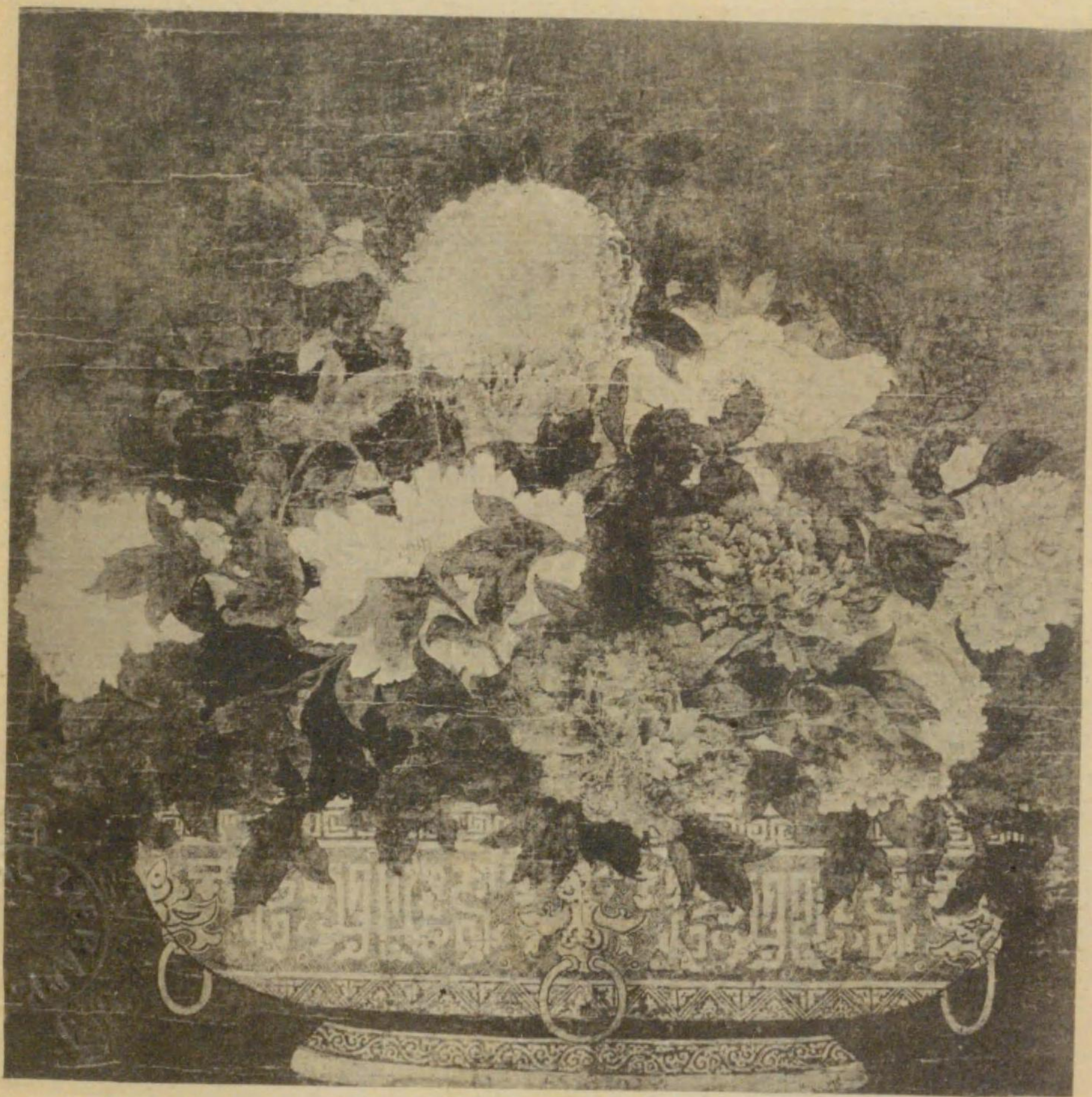
筆舉舜錢 圖蝦笹
 (照參畫物靜の洋東)

裝
 幀
 意
 匠

福
 田
 翠
 光
 氏

表
 紙
 題
 簽

西
 山
 翠
 嶂
 氏

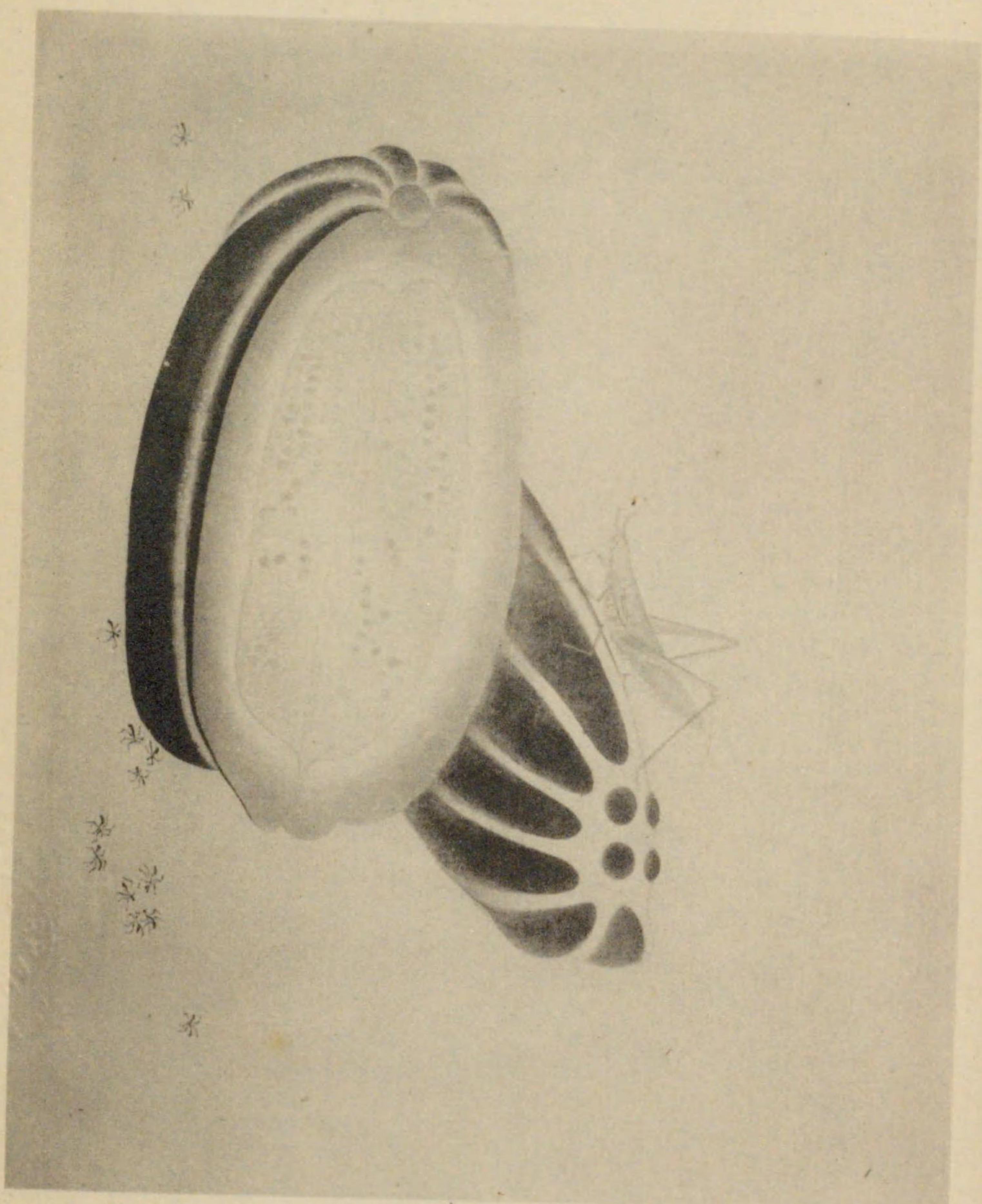


錢
舜
舉
牡丹圖
(東洋の靜物畫參照)



探幽筆
標

探幽筆 盆裡果實圖
(照參畫物靜の洋東)



瓜 蟲 圖
(照參畫物靜の洋東)
無 落 歟

花鳥畫漫談

花鳥畫時代

近頃の日本畫展覽會を拜見しますと、花鳥畫の數が非常に殖えて來ました。これは一つには時代の風潮にもよるのでせうが、一つには、花鳥畫は誰れにも向くといふ特徴をもつてゐるからであります。たとへば人物畫ですと、その畫かれた人物に好き嫌ひがあつたり、扱はれた材料にも、向き不向きがあつたりしますが、花鳥畫にはそれがありません。よく／＼縁喜でも擔ぐ人でないと、細かい詮索もしませんし、美しく、そして情味があり、詩趣の深い作品であれば、如何なる人にも喜ばれます。これが自然、展覽會などに花鳥畫が多くなつたわけで、前には、歴史畫や人物畫ばかり畫いてゐた人が、近頃では全く花鳥家になつてしまつた例なども澤山ありますし、現に展覽會に於ける花鳥畫の數は、平均全出品の十分の六乃至七を占めてゐる有様であります。

元來此の花鳥畫といふものは、東洋畫獨特のものでありまして、東洋人が自然を愛する性情の現はれの

一つでありませう。そこへ行きますと、西洋人の花や鳥に對する態度は、東洋人とはまるで變つてゐます。唯形や色にのみ興を繋いでゐるやうに見受けられます。然るに東洋人は、一草一木たりとも、これを十分に凝視して何かそこから一つのを生み出さねば承知の出来ないといふ熱があります。花鳥畫も、此の熱意が生んだ、藝術上の一つの形式に外ならぬのであります。

花鳥畫の題材

さて花鳥畫と申しますと、その文字の示す通り、花や鳥を畫いたものであります、むづかしい文字で、今日までその範圍を定められてゐる所では、「花卉翎毛蟲魚」となつてゐます。即ち、植物の外に、鳥類、獸類、蟲、魚介などがありますが、此の中獸類は哺乳動物は、鼠とか、栗鼠とか、犬猫、兎、猿、鼯、蝙蝠といふやうな小動物が主となつてゐまして、牛とか、馬とか、鹿、熊、象、獅子、麒麟などといふ大きな動物になりますと別に動物畫と稱へて區別してゐます。併しもとく花鳥畫と姉妹關係にありまことは申すまでもありません。

かうした動物畫の中で、何が一番多く畫かれてゐるか申しますと、それは矢張り花と鳥とが一番多く、次が小さい獸と蟲魚介といふ順序でせう。植物の中では、何といつても「歲寒三友」といふ松竹梅、蘭竹

梅菊の「四君子」などが王様で、此の外では春の櫻、藤、牡丹、夏の燕子花、蓮、秋の菊、紅葉、冬の水仙など凡そ何處の家へ出かけても、床の間の花鳥畫幅にはかうしたものが現はれてゐます。そして、それに鳥や蟲などが添へられ、時に小さい獸が配されます。例へば松には鶴、梅には鶯、柳には燕、櫻に雉子、竹に雀、蓮に鶯、若しくは柳に鶯、粟穂に鶉、蘆に雁、天文に關したものに月に杜鵑、日の出に鶴、雨に燕、雪に鴛鴦、蟲では菜の花に蝶、梧桐に蟬、秋草に蟋蟀、地文の方では波に千鳥、谷間に鶉鴒、岩上の鶉といふやうな種類であります。これは昔から紋切型の構圖であります、併し色彩といひ、形といひ、その配合が實によく出来てゐますので今日までそのまゝ傳へられて來てゐるわけであります。

慾の深い構圖

これらの對照物は、その一面に自然を觀察した現はれから來てゐるのであります、時にはその文字や名稱から、甲の物と乙のものとを取合せたり、字音の類似を求めたり、これを附會して行つた構圖なども出て來ます。譬へば、現代の人々はあまり畫きませんが「海鶴蟠桃」といふのがあります。波に日の出、片一方に岩を見せ、これに老木の桃が根を張り枝を伸ばし、累累たる果實を結び、波の上には丹頂が舞つてゐるのであります。随分妙な取合せであります、昔はこの圖がお目出度いものとして、大名などから、

澤山注文が出たものであります。どうして此の繪が目出度いかと申しますと、日の出と波は申すまでもなく瑞祥ですが、その上に千年の齡を保つといふ鶴と、西王母や東方朔の故事から、一つ食べれば三千年の齡を延ぶるといふ桃を添へたのですから、慾の深いこと此の上はありません。鶴に關したものは、まだ「松鶴退齡」といふのもあります。こんなむづかしい題ですが、畫は至つて簡單で、松に鶴があるだけです。鶴は千歳の齡を保ち、松は常磐の色かへぬといふわけで、時には更に日の出を畫いたりします。昔から初春用の掛物には澤山あります。

四

二品當朝の珍畫

この松に鶴では、又更に「一品當朝」だの、「一品太夫」だのといふ目出度づくめのものがあります。一品といふのは、その昔、唐の時代に一品の位に昇りますと、その式服の模様に鶴が現はされたものであります。松は又、秦始皇雨やどりの故事から太夫の位を授けられた樹となつてゐるので、目出度い松に鶴を添へたのであります。

「一品當朝」は、海の潮の上に鶴の飛んでゐる繪です。人に依ると岩の上に鶴を立たせたり致します。その一品といふのは唯今申しました通り、鶴の模様が一品の式服にあるので鶴は一品の位を現はすものと

し、潮は朝で、朝廷の朝に字音相通じてゐる處から、出世を願ふといふ、これも慾の深い話です。處がある畫家が波の上に二羽の鶴を畫き、「二品當朝」といふ題をつけました。或る人が笑つて「二品とは何だ」と聞きましたら「二羽だから二品だらう」というて、飛んだお笑話となつたといふ例もあります。

繪そらごと

此のやうな目出度い場合に必らず畫かれる鶴は多く丹頂で、時には松の枝の間に巢を營み、澤山の雛を育てゝゐるのがあります。これは昔からよく見かける處ですが、丹頂は決して、こんな松の高い枝の間などに巢を營むものではありません。これは但馬の鶴山が、鶴ではなく鶴、こうのとり)であり、それを鶴と見過つて畫にしたことなどから、間違はれたものと思ひます。北海道釧路の北方にある、我が國唯一の丹頂棲息地に就いて、農林省の方々が調査されました處によると、丹頂は決してそんな高い松の梢などに巢は營まず、泥深い人の往けさうもない濕池の地に、周圍の草などを折り曲げて碗形に編み、中に柔かい枯草などを敷き、これに二個の卵を生むわけなのです。あのやうに一つの巢の中に澤山の雛の居ることも不合理であります。

五

鶯の羽目白の羽

六

松に鶴は、こんな不合理なのですが、梅に鶯は、自然観察の一部の現はれです。鶯は夏、深山の奥で繁殖を営みますが、初冬から早春にかけて、餌を求めながら人里近くにやつて來ます。鶯は梅の幹の皮の間に潜む蟲を好みますので、自然梅の木に鶯が關係深く思はれ、それが切つても切れぬやうな縁になつてしまつたのであります。その鶯の繪を見ますと、實物に比較して、遙かに美しい色をして居り、所謂鶯色を呈し、形も實物よりは、ほつそりしてゐます、どうして、こんなに色が違ふのかといひますと、丁度鶯が梅の木を訪れて來る頃は、目白が同じやうに深山を出て、人里近くにやつて來ます。姿もよく似てゐる處から、此の目白の色が幾分鶯に移つて、あのやうな色に畫かれるやうになつたものと思ひます。併し現代の畫家の畫く鶯は餘程寫實になつて、あのやうな美しい色彩も持たなければ、姿もほつそりして居りません。

こゝで、一寸自然観察といふことを申し上げますが、花鳥畫も今日では昔のやうに梅に鶯、松に鶴といったやうな極り切つた材料では満足しません。出来るだけ忠實に自然を見つめて、その自然の一角を繪にするといふやうな傾向が生じて來ました。ですから一生懸命に寫生をします。動物園へ參りましても、植物

園を歩きましても、スケッチ帖を出しては頻りに動物や植物の姿を寫生してゐる人が澤山あります。此の寫生といふことは、一つの基礎學問ですから、大切なこと今更申すまでもありません。

應擧の寫生畫

自然の姿を寫す、それには形や色ばかりでなく、その周圍の現象や雰囲気といふやうなものまでも十分に見る必要があります。かうした研究は、昔の人もよくやつたことで、渡邊華山などは、蟲一匹、花一輪でもそれを丹念に寫生し、更にそれを如何に筆の力で活かして行くかを研究し、その寫生帖にはちゃんと寫生した月日の入つてゐるのを見ます。又圓山應擧には、有名な雞の話や、猪の話があります。よく知られてゐる話ですが、序に一寸述べますと、應擧が雞の繪を畫いて、京都の祇園の人通り多い處へかけ、見てゆく人の批評も聞いてゐますと、ある農夫らしい人がその作を見て、雞が實によく出來てゐる、殊に地上に草も畫かない處がうまいといひました。應擧が不思議に思ひながら、その人のあとをつけ、その批評のわけを聞きますと、その農夫のいふには、雞は四季その羽色の變るものである。その繪は冬の羽色だから、草はない、それを貴下が草を添へなかつたのが偉いといひました。猪の話といふのは、應擧が猪を寫生しやうとして、圖らずも病氣の猪を寫生したといふ話で、『名家書畫談』に載せられてあります。

七

今日から見れば、相當に宣傳の好きな應擧のことでもありますから、この話も拵らへものか、それとも事實談かわかりませんが、兎に角應擧が寫生といふことに如何に忠實であつたかは、かうした話が逸話として傳へられてゐることでもわかりますし、その寫生した卷物などを見ましても、實に忠實を極めたものであります。

八

これによく似た話が近頃の人にもあります。虎を畫いて近頃の名人といはれた、ある畫家がライオンの大作を畫いて、初期の日本美術院に出品しました。そこへ故人になられた渡瀬庄三郎博士が見物に來られて、さて申されますには、此の獅子は非常によく寫生してゐるが、どうしても動物園の獅子ですといはれるのです、傍の人が博士にそのわけを聞きましたら、ライオンが山野にある時は、森林や叢をかけ歩いてゐますから、こんなに襟毛が立派になつてゐません。皆摺り切れてしまつてゐます、動物園の獅子は運動不足で、食も十分あり、草原などを駆けずり廻ることがありませんから、襟毛も立派になつてゐるのだと答へられたさうです。

物を寫生するのには、その目的物ばかりでなく、周圍の事情をも思ひ起さるやう、その寫生した場所とか寫生した年月などを記して置くことは大切で、その用意がないと時々妙な繪が出来上ります。

秋の樹に初夏の鳥

現に昭和十年の秋開かれた、ある日本畫展覽會に、今賣り出しの京都の畫家の描いた「朝陽」といふ作と「深秋」といふのがありました。「朝陽」といふ方は黄ばんだ公孫樹の木に小瑠璃が一羽とまつた朝の氣分を見せた作であり、「深秋」は葉團扇楓の美しく紅葉した枝に、大瑠璃がとまつてゐる繪です。

流石に色彩の配合の上手な京都の作家のことゝて、中々よく出来て居り、色彩も實に美しいのですが、此の鳥が妙なのです。何故かと申しますと、大瑠璃も小瑠璃もいはゞ春から夏へかけての鳥で、秋も末の樹々の葉が色づく頃は、とうに日本を去つて、遠く南洋の常夏の國の森や林で晝寢でもしてゐる時分だからです。これは唯、紅葉の美しさに瑠璃といふ色彩の配合から思ひついて、季節の違ひなどは氣がつかず畫かれたものでせう。若し、その寫生帖に季節の説明がありましたら、こんな間違ひはせずに済んだことと思ひます。

昭和九年の帝展にも、梅の花に小瑠璃を畫いた人がありますが、梅の咲く頃には、まだ小瑠璃は南洋から歸つて來てゐないのであります。

九

蓮池群鴛圖

一〇

かうした例は決して珍らしいことではありません。先年も京都の上村松篁さんが、帝展に『蓮池群鴛』といふ作を出して特選を取りました。行儀よく並んで咲いた蓮の花の下に、鴛鴦が思ひ羽を並べつゝ、打揃つて泳いでゐる極めて美しい作でした。構圖も中々面白く、見た眼の感じが如何にも面白いのですが、これも残念ながら季節が違つてゐます。蓮の花の咲く頃は、鴛鴦の雄はあの美しい思ひ羽もぬけて、色彩も全く褪せてしまひ、見すばらしい雌と同じ姿になつてしまつてゐるのです。單に裝飾的意味で、蓮と鴛鴦を對照せしめたといふならば知らず、さうでないとするれば、夏の花に冬の姿の鳥を添へた随分妙なものになつてゐるのであります。昔はよく一双の屏風の中、一幅の畫の中に、四季の植物や動物を一つに描き込んだものがありますが、それは四季花鳥畫として別の意圖から見たもので、これとは全く性質が變つてゐるわけです。

足利時代に明治草

古いものにも時々かうした妙なものが出て來ます。北齋に有名な『隅田川』といふ作があります。構圖

は簡單で、墨流しのやうな技巧の波の上に、都鳥が一羽、それに西瓜の食べ残りの皮ばかりになつたのが、その傍を流れてゐます。隅田川と畫題をつけたのは、此の都鳥からで、食べかけの西瓜などは如何にも北齋らしい氣の利いた趣向ですが、残念ながら西瓜の皮の流れる頃は都鳥は居りません。尤も都鳥にはいろ／＼と説があり、その本態は『ゆりかもめ』といふことになつて居り、北齋の畫いてゐるのも、正にそれでありますが、此の『ゆりかもめ』が飛ぶ頃の隅田川には、チラ／＼と小雪が散る頃で、西瓜など流れて來るわけではないのです。

植物の關係についても注意しないと思はぬ失敗をすることがあります。これは花鳥畫ではありませんが、ある大和繪を畫く人が、足利時代の公卿の衰微した有様を畫いた繪卷風の作が、ある展覽會に陳列されました。柱は傾き軒は落ち、庭は雜草の生ふるがまゝにまかせた寂しい所を畫いたのですが、その庭の雜草の中には、明治草又は御維新草、鐵道草、又カツトリング草と呼ばれる『姫昔蓬』が描かれてゐました。カツトリングといふのは、紀州徳川家が、明治初年、歐洲から招聘した技師の名であります。

こんな繪も見ることがあります。唐人お吉とでもいひさうな女が、しよんぼり立つてゐます。空には月がかゝつてゐます、時代は幕末には違ひありませんが、その傍に咲いてゐるのは、嘉永年間に初めて日本に渡來したといふ月見草、即ちおほまつよひ草です。そんな頃に、野生の月見草も妙ではありませんか。

更に少し古い話に遡りますが、既に十數年前、光琳派大展覽會といふのが、ある場所に開かれました。各方面から素晴らしい名作が集つて来て私共の眼を喜ばせてくれましたが、その中の屏風に、光琳が没した享保元年よりずつと後に日本に渡來した草が描かれてゐました。だが此の屏風は、幸か不幸か、大震災で焼けてしまつたやうです。

同じ年の頬白群

次には自然といふ方から見た滑稽な例を一つ二つ擧げて見ませう。たしか木村武山さんのお話だつたと思ひます。ある人の作に、頬白が十五六羽、樹の枝にとまつてゐる處が書いてありました、處がそのとまつてゐる頬白が悉く同年同月同日の生れの頬白だつたといふのです。それは何でもない、一羽の頬白の剝製を此方むけたり、あつち向けたりして書いたものだつたのです。

朝顔はその蔓が左巻きの代表として名高いものです。左巻きといふのは、つまり支柱から斜に表側を右へ裏側を左に巻いて行くのです。處がある作家の朝顔の繪に、右巻の蔓が書いてありました。私が注意しますとその人は寫眞を見て畫いたのだといつて聞きません。だん／＼調べたら、その寫眞は構圖が面白くなるやうにと、裏返しに焼いた寫眞でありました。

ですから、忠實に自然を見るといふことは、花鳥畫家の第一義で、これを怠ると、とんだものを畫いてしまふやうになります、それ故、畫家が畫材を得るために寫生したものは、必らずその時と、場所と、周囲の状態等を書き添へて置く必要があるのです。

かうして拾つて參りますと、まだ／＼いろいろのお話がありますが、それは何れ他の機會にお話したことと致します。(昭和十年十二月九日AKより放送)

東洋の静物畫

曾て果實や蔬菜の藝術資料を探してゐる中、不圖、李のことに關し、「西京雜記」に、

武帝初修上林苑、群臣遠方各獻名果、樹有朱李、黃李、紫李、青李、綺李、青房李、車下李、顏回李、羌李、燕李、猴李。

とあるのを見、あの光澤の美しい李に、こんなに澤山の種類があるのかと驚き、上林苑に植ゑたのはその苗木であるが、これが成長しそれ／＼に結實したのを、美しい鉢に盛つたなら、どんなにそれが美事であらうかと想像して見た。同時に唐詩選の「葡萄美酒夜光杯」でも添へたなら、將に東洋獨特の瑰麗極まりない一種の静物畫になりはすまいかと思つたりした。

静物畫といふ文字は、例の Still life の譯語であり、西洋では果實、蔬菜、器物、動物なら死んだものなどの、大小や色調をよく配置して、適當なバツクの前に纏めるといふことになるのであらうが、この種の構圖の配り方は、東洋畫にもあり、かうした纏め方も、随分古くから行はれて來てゐる。若し東洋に於ける静物畫といふ文字を以て呼ぶことを許されるならば、茲に極めて面白い類例を擧ぐる事が出来るであらう。

あらう。

但し東洋畫に於ける静物畫に於いては、歐洲繪畫に於ける静物畫と、著しく異なる特長のあることを先づ認めなければならない、その一つは西洋の静物畫に於いては、極めて重要な役割を演じつとめてゐる背景のないことである。

由來、畫面の上に餘白を存置するといふことは、東洋畫に於て、極めて必要な要素となつてゐるのであるが、静物畫の場合、殊にそれが際立つて注意される。西洋畫の静物に於ては、配合した各種の物象と、背景、バツクの色調の調和が大切なのであるが、東洋畫の静物には、唯、布帛紙箋そのまま、別に何等の不調和をも見出すことのない點も注意しなければならぬ。

今一つは、各種の集められた物象を、色彩を以て現はさず、唯に墨の濃淡丈で現はしてゐるものゝ存することである。然もその配合が、唯同じ種類のもの一二個でとどむるものもあれば、種類を異にする多くのものを集める場合もあり、時に水墨のみでなく、淡彩を加へることもある。

更に、動物をこれに配する場合、歐米の静物畫にあつては、死せるもの、たとへば銃獵によつて獲た鳥や兎のやうなものを、そのまゝ卓上に横へるとか、或は剥製の鳥類を配するとかいふことがある。だが東

洋にあつては、かうした類例は少く、動物といへば、多く魚介の類である。従つて死物といふことは出来ぬが、殆んど静止の状態に於て見られるのである。例へば植物の葉に載せた魚類の如き、生きてゐるものであつても、繪になる瞬間は静止の状態にある。蟲でもさうである。

次に表現の形式であるが、歐洲に於ける靜物畫では、多くの場合、卓上とか、マントルピースの上とか、窓際とかいふ場所が擇ばれるが、東洋に於ける靜物畫には、その所在が明示されてゐない。時に鉢、皿、植物の葉、籠、水盤といふやうな器物は置かれてゐても、その置かれた所は明示されない。時には唯、果物ならそれだけ、蕨ならそのまゝ、然もはつきりと、その置かれた場所まで、暗示せしめるだけの力を有してゐる。

◇

東洋の靜物畫としての例に、私は先づ錢舜舉の『筐海老』を擧げる。これはもと鳥津公爵家の傳來で、いまは京都の岡崎桃乞氏の所藏である。僅かに八寸四方位の小點で、一葉の笹の葉の上に、六個の蝦が載せられてゐる。蝦は明かに死せるものではない、然もその配置の巧みさ、全畫面に於ける餘白と物象との關係、それがよく結合されて、些の弛緩をも認めることが出来ない。然も配せられたるものは、筐の葉と、海老のそれに過ぎないのである。

舜舉はよくかうした技巧を用ゐてゐる。井上侯爵家にあつた『芋葉貝』の如きもその例で、一葉の芋の葉の上に、田螺數個を載せた處を描き、その眼光はこの細かい自然物を透徹して不朽の生命を賦與してゐる。又、時とすると、かうした技巧に依らず蕨の葉の如きものだけを描いて、立派にその眞を擲んでゐるものがある。東山御物として有名な『蕨』の如き將にその好通例で、葉のついた蕨に畫一根を添へたばかりで、立派な繪が出来上つてゐる。時に茄子三四個でかうした緊張した畫面を構成せしめてゐる。

舜舉の作としては、まだ知恩院の『牡丹圖』をも逸することは出来ない。七寶のやうな水盤に牡丹數輪を盛り込んだもので、如何にも絢爛を極むるもの、これは今日の盛花の根元をなす點にも興があるが、靜物畫としても將に面白い、但し此の作、舜舉とは傳へられてゐるもの、それより後世の作ではないかといふ異説もある。

以上のやうな靜物畫の構圖は、後にもよく行はれてゐる。殊に植物の葉の上に、物象を盛るといふ型は面白いので、今日でも鮎など描かれる場合よく應用される處である。

◇

錢舜舉が、果蕨魚貝を描いて、東洋靜物畫に獨特の位置を保つてゐると、よい對照になるのが趙昌の作品である。この人は『君臺觀左右帳記』にも、特に『花草木折枝彩』と記されてゐるやうに、花卉を多

く書いてある。その「折枝彩」といふのは、此の静物畫風の構圖を指すやうに思はれる。

東山御物といはれる『花籠の圖』はその好適例で、特に折枝花であるが、これが花籠の中に美しく盛られてある所、一寸知恩陀の牡丹圖と一脈の相關聯があるやうに思はれる。此の『花籠圖』には松浦伯爵家舊藏のものにも、これと同巧のものがあり、位置が非常に面白く、盛花の型としても研究の價值がある。

日本の畫人で、かうした花物の畫き方をするのは柳里恭であり、柳里恭の作には、形こそ違へ立派な静物畫と見られるやうな幾多の作品を見出すことが出来る。

なほ趙昌や、舜學のやうな畫風は狩野家や土佐派の人々がこれに倣ひ、筍二本を丹念に畫いて見たり、一輪の蓮の花を克明に描いて盆に載せたりするやうな構圖のものが今日でも往々眼に觸れるのである。その一例として帝室博物館所藏、探幽の『荔枝圖』を挙げる。木瓜形の鉢に朱果を累累と盛つた丈けの構圖であるが、それでゐて些の間然する處なき逸品である。

◇

次には水墨畫の靜物である。先づこれが適例として挙げるのは、京都龍光院の所藏にかゝる傳牧谿の「栗柿圖」である。栗は枝栗であるが、柿の方は大小五個を墨の濃淡丈けで現はしたもので、凡そ略畫法として、此の位の略畫はないと思ふ程大膽に畫かれ、そしてよくその眞を擷んでゐる。東山名物として、また

秋草双鶩圖



渡邊華山筆

(南畫の花鳥參照)



春庭香艶圖

椿
椿
山
筆

(南畫の花鳥参照)

梅花双鶴圖

此林鶴野正源枝鳥結在陸柱と雄底陸
鶴伴去区湖雪春の影迹
壬辰仲春題山岳以文和泉圖



田能村竹田筆

(南畫の花鳥参照)

利休の愛好したものと、後世茶人の間に喜ばれたのも無理はない、かうした影響は、松花堂などにも傳へられて、あちらこちらに残つてゐるし、牧谿には、此の筆致でなほ茄子を描いた傑作がある。茄子といへば、雪舟にも水墨一式で數個の茄子を畫いた立派な静物畫がある。

これとやゝ趣きを異にしてゐるが、日觀の葡萄の如きも、時には一つの静物畫と見るやうな場合がある。日觀の葡萄といへば、全く手に入つたもので、いろ／＼の形式で畫いてゐるが、特に折枝にして横物に畫いた作の如き、將に立派な静物畫であり、破墨に近い粗い描き方の葉がぐれに、濃淡の墨で葡萄の房など描き現はしてゐるのは、心憎い位よく出来てゐる。

なほ、王若水、胡庭暉などの作品には、面白い静物畫を見ることが出来る。

◇

南畫の方に入ると、また別の世界が展開されて来る。これは先づ畫題に依つて物を配するといふ行き方である、百合根と柿と、橘とを合せ、その字音を取つて「百事大吉」とするとか、鯰二尾に大橘を添へて、「年々大吉」に通はせるとか、一本の枝に數個の石榴を描いて「連蒂百子」と呼んだり、百合に柿を添へ、如意を加へて「百事如意」としたり、蓮根に蘭菊、何れも根を現はして「風月三昆」とするとか、燕を一つ描き、「來客一味」として禪意を表はしたり、これは配合される風物丈け見ても中々興味がある。華山

も描けば椿山も畫く、竹田も畫にして得意の贅をするといふ風、楽しんで筆の赴くまゝに繪にしてゐるのである。畢山にはわけて筍の畫の面白いものがあり、椿山は取材も廣く、その「花卉蟲魚帖」の如き、縦横にこれを畫き盡し、竹田も、その「蓬窓帖」の中に、栗や茄子を畫いた面白いものもあるが、彼が天保甲午、攝州吹田邨の代官井内經雨の家で畫いたといふ「野餐横物」の如きは、瓜、荔枝、大袖などを笹葉にのせ、これに一匹の蟋蟀を配した面白い作である。

◇

こんな風で、東洋畫の靜物には、どうも果實や、蔬菜類が多い。次に魚貝が加へられる。筍、茄子、瓜、蓮根、茸、葡萄、蕪、佛手柑、桃、橙、白菜、蘿蔔、慈姑、石榴など、その中でも多い。かうしたものを一圖の中に描き込んだものに柴田是眞の名作があり、先年帝展に松林桂月氏が出品した蔬菜圖や故森田恒友氏が春陽會に出した蔬菜帖などもこれに屬し、更に津田青楓氏も近來頻りに此の種の作を試みてる。

純粹の靜物畫とはいへないが、説田鶴翁舊藏の畢山の「仙桃圖」の如きは、根のある桃の木であるが、觀方に依つては一種の靜物畫であり、これと同じやうな意味合で、島津家の「瓜蟲圖」の如きも、亦單なる花鳥畫として見るより、風の變つた靜物畫として眺める方に興味がある。

近頃の作としては、下村觀山氏の絶筆となつた筍の圖の如きは、誰か何というとも立派な東洋の靜物畫であり、先年故土田麥僊氏が、何處かの展覽會に出品した「死せる鶉」の如き、私はこれを靜物畫として眺めたい。麥僊氏の遺作の中には、かうした型の作が、まだいくらかもある筈である。更に村上華岳氏のおく描く蔬菜、北大路魯卿氏が曾てその個展に出品した水墨の「西瓜圖」、故湯田玉水氏が「符瑞志」の傳説によつて畫いた「一蒂六實」の石榴子の如きも、忘るゝことの出来ぬ東洋靜物畫の一つである。

なほ近頃の若い作家などには玩具や陶器のもうなものを、西洋畫の靜物のやうに、畫いた作などよく現はれる、これも一つの畫材であるから、進んで研究したら、面白いものが現はるゝに至るであらう。

南 畫 の 花 鳥

二二

南畫の花鳥が、四君子を以て基本としてゐたことは、今更いふまでもない。蘭に於いて曲線の運用を自由にし、竹に於いて直線の雄勁暢達を味ひ、菊や、梅に於て弧線や、圓の連續を學ぶ。そしてこれを補ふに樹式、生枝法、花鬚、蕊蒂、或は點墨や、鈎勒の葉式を以てする。南畫が王維によつて創始されたといふものゝ、かうした技法は、そも何人に依つて工夫せられ、幾百千人の筆によつて練達完成されたものであらう。我々はいま、單なる四君子の構成や運筆の法を見てさへも、唯感嘆これ久しうするばかりである。

だから南畫の花鳥に接し、これを味ふに當つては、いつも先づ四君子の技法が目に見え、そしてその筆の氣韻、その構圖の生動に思ひ及ぼすのである。

◇

曾て小室翠雲氏の邸で、氏が秘藏するところの華山の花卉蟲魚の寫生帖を見たことがある。それは美濃紙を二三十枚ばかり、無雜作に紙縋りで綴つたばかりのもので、華山が平常座右に置いて揮毫の參考にし

て居たものらしかつたが、一匹の蜻蛉、一羽の雀を畫くにしても、先づ最初には、極く鄭重に、細密描寫で、實物大にこれを畫き、第二に於ては、その側面とか部分とかいふ方面を畫き、更にやゝ簡單な方法でこれを試み、第四に至つて全く筆意によつて、生動せしめる南畫本然の姿に歸せしめてゐる。私は此の一冊子を見て唯々巨匠の周到なる用意と、苦心とを知り得たばかりでなく、今日の南畫の花鳥が如何にして生れ、如何にして現代のやうに發達して來たかを明らかに知り得たやうな氣がしたのであつた。

遠く支那歴代の南宗花鳥畫家は姑らく措き、日本の南畫家の中にも、花鳥を能くする人は決して少くはなかつた。大雅堂にも立派な花鳥畫があり、蕪村にも時にこれを見、文晁に至つては全く才氣縱横、畫くところの花鳥の數も少くなかつたが、これらの人々は花鳥よりは、寧ろ山水の方により多くの本領を見る。

そこへ行くと華山は流石に取材の範圍が廣い、山水に於ける手腕はいふまでもない、人物も巧ければ、花鳥も素晴らしい。その人物と山水と、花鳥との綜合藝術とも見るべき作に、彼れが自又前一日に筆を執つたといふ「盧生邯鄲夢裡圖」の如きものがある。全畫面の措置構圖に於て山水に於ける造詣を十分に示して居るばかりでなく、屋内の盧生外一人の人物には、小いながらも人物畫家としての片鱗を見せ、駒を繫いだ老樹の技法に至つては、筆致雄大、將に花鳥畫の神髓に觸れて居るが如き感じを起させる。

その局部局部の精緻なる観察と、暢達した筆意を味ふには、いま本山幽篁氏が秘藏する處の、「花卉蟲魚帖」一冊で事足りやう。畫くところ十二圖、松、芍藥、桃花、鰍魚、荷花、仙桃、荳花、芙蓉、薺花、雁來紅、南天燭、水仙等、巧みに四季の風物を畫き、筆々全く神に入る。殊に第五圖の荷花の如き、水面を躍る風に揺らいで、將に露を落さんとする情景の如き、これを凝視する中に、その風聲をさへ聞く思ひせしめる。それは半面に記した五言律の中の「水面獨搖風、淨利如金湧」の句を待つまでもない。

更に精密なる畢山の自然觀に觸れやうとするならば、その大作「谿澗野雉圖」を見るがよい。いま溪澗に降りて水を飲まんとする野雉、その水に遊ぶ小魚、岩の一角には躑躅笑ひ、上には琅玕の色鮮かなる竹に、これに紫の綬を投げかける山藤、その藤の蔓には雀遊び、竹は二三筍を生んで暮春の情趣更に深く、右端には僅かに姿を見せてゐる笹の撞木根にまで笹魚を黜じて行届いた自然觀察を立派に表現せしめてゐる。かうして自然の懷に深く潜入しながらも、その一劃一線には生動の氣、滿ち充ちてゐるのは、流石に畢山の作であると驚嘆するばかりである。

此の作と拮抗する花鳥畫の傑作「睡猫驚雀圖」を見ると、前のやうな緊張味から、また別の天地に入つて悠々たる詩の世界に遊んでゐる、一見怪奇に見える大湖石を中心として、その上には嬉々として戯る、

雀三羽、その長閑かな囀りから、不圖下に眼を移すと、そこには恐るべき白猫が眠つてゐる、然も白猫の夢はいと安らかで、三羽の雀を恐怖せしめてゐるのも知らぬ長閑な情景を寫し、その和やかな氣分を増す爲めには、睡猫の周圍に一二の蒲公英をさへ黜出して居る。賛に曰く、

碧眼鳥圖禽有魚、仰看驚雀生階、春風漾々吹花影、一任東郊風化鴛除。

と、此の作は「溪澗野雉圖」を畫いた翌年、即ち天保九年の作で、實に自双前三年、彼の爛熟期の作である。

畢山は平素、惲南田や張秋谷の筆意に私淑し、寫生に基礎を置き、然も寫生に擒はれず、よく一家の風をなしたが、その半面には洋風の寫生をも研究して、これを南畫の上に活用してゐたのは偉大である。

畢山の後、その遺鉢を傳へ、更に一家を成したものに椿山がある。畢山曾て椿山を評して曰く、

徐家寫生南田氏有起衰之切、而得其善筆之法者爲秋谷張氏、椿子能學之、片花雙葉無所不取、法二家、所謂獅子投象以全力赴之者矣、過觀者不察也。

と、畢山が寫生を基礎として、その作を爲したのに比すると、椿山は一層馬力のかゝつた寫生である。「片花雙葉も法二家に取らざる所なし」といふのも穿つた言葉である。だから人に依ると、椿山と梅逸と

を比較し、梅逸は徐灝で南畫であるが、椿山は黄筌で、寧ろ北畫に屬すべきものであるといふ、確か崑山もかうした意味の事をいつて居たと覺えて居る。併し、椿山は自から、

畫學の要は北畫に有之候、申さば、寫意は南なり、寫生は北なり、如何で寫生を辨せずして寫意の本旨に至ることあらむや

というてゐる。椿山が果して寫生から寫意にまで進んで居るかどうか、それはその作品を仔細に觀察すればわかることで、その理想の寫意にあつたことは十分に知れる、唯崑山に比較し、梅逸と較べて見る時、初めて北畫に近い點の存することがわかるのである。

◇

椿山の花鳥をよく代表して、雄辯にその作風を傳へてゐるのは、矢張り彼れが會心の作といはれる「花卉蟲魚帖」十二枚で、これには椿山自から「學北宋徐氏沒骨寫意法」と記してゐる。圖は、梨花、柳葉、梨花に飛燕、芍藥に蝶、松に栗鼠、游魚、荷花、龍腦菊に岩、枯草に鶉、荳と稻穗、石榴と葡萄、松茸、蓮根、南天燭等で、崑山の作に比較すると、兩者の相違が極めて明白に解る。筆の潤ひ、設色の精緻、これは崑山に比すとも敢へて劣らず、併し如何にも説明が勝ち過ぎて居る、餘情詩趣に於て、崑山に一步を輸らねばならない。さはいへ、椿山には椿山獨特の妙所がある。その綠青と群青との驅馳を自由にし、點

蓮鷺圖(一部)

高橋草坪筆



(南畫の花鳥參照)



筆 信 春 木 鈴

(照 參 物 植 る た れ は 現 に 繪 世 浮)

人 美 池 蓮



山吹の玉川

窪俊満筆

(浮世繪に現はれたる植物参照)

墨の筆意をこれに活用して畫く處の葉の如きは、如何にも柔かみがあつて、一寸他に企及するものはあるまいとさへ思はれる。『牡丹小禽』『菊花螭螂』双幅など見る時は、這般の消息がよくわかる。

◇

椿山の作をかうしてだん／＼に見て來ると、勢ひ梅逸と比較して見なくなる。梅逸が思ひを深く南畫の奥に潜めながら、徒らに氣韻生動の文字に惑溺して、自然の本態を無視する當時の畫流をしりぞけ、寫生を基礎として居たことには、椿山と一脈相通する點がある。然もなほ風韻に富み雅致の豊かであつたことは、友に竹洞あつて、知らず知らずの間にその感化を受けたことにも依らう。大久保詩佛なども交り进行深入して詩囊を豊かにしたにも依るであらう。彼が一代の傑作たる『松竹梅群鳥圖』は見ないからいふことは出来ないが、もと片岡直溫氏の藏品であつた『雪中花鳥』の如きを見れば、よくその筆力を説明し得て餘りある。歳寒三清に雪を蔽ひ、上に喜雀、下に鴛鴦を配したなど構圖は月並みであるが、筆は躍動してゐる。

椿山と同門の花鳥畫家としては、秋暉も擧げなければならない。併し筆は達者でも、畫品に於ては、遠く椿山に及ばず、殊に彼の畫く所の鳥の如きは、徒らに鋭くして、小禽の可憐な情が掬み取れない。時には、この鳥の種類さへ判別し兼ねることがある。

これらの華山一門や梅逸などの畠から別座に柳里恭が居る、その『枯柯壽帶鳥』は、明治天皇の勅覽を忝うした傑作といはれてゐるが、里恭にはまた別の味がある。流石に人の師たるに足りる至藝十六を備へてゐたといふ人であり、一代の巨匠池大雅すらこれに師事したといふほどであるから、その作に品のあることも略わかる。

『枯柯壽帶鳥』は、里恭一代の傑作で、その枯柯を中心に、雄勁なる筆先づ人を魅し、之れに五羽の壽帶鳥を配し、下に鮮紅の雞頭で畫面を引締めて居り、一筆一點も苟もせぬ努力の作で、その手腕を想見するに餘りある。

◇

竹田には『亦復一樂帖』があつて、花鳥畫家としての竹田を遺憾なく見せてゐる。一樂帖の内容は、山水あり、花鳥あり、人物あり、往く所佳ならざるなく、頼山陽をして三嘆措く能はざらしめたほどのものに周知のことであるから、こゝには贅しない、併しその奥底に深い深い寫生と彼が滿腹の詩趣を藏してゐることは、否むことが出来ない。

次に南畫として描かれる花鳥の範圍を見ると、その扱はれてゐる種類は大抵定まつてゐる。例へば、歳寒三友とか、古木竹石とか、高風清節とか、闔家全慶とかいふやうな畫題に捉はれてゐることが、主な原

因であらう。だから、その題材の規模から見たら、四條派などの方が遙かに多く、狩野派などでもかなり廣い範圍に亘つてゐる。併し南畫として、花鳥にその範圍を擴大したのは何というても華山や椿山であり、その寫生を基礎として寫意に到達するといふ理想に向つて進んだことが、大なる力を爲して居る。然らばその範圍は如何なる風に擴大されて來たか、これを検討して見るのも興味の問題である。

以上は主として、我が南畫の主流と目すべき一派のものに就いて、その花鳥畫の作を瞥見したのみで、廣く南畫の花鳥を説くには、元明の諸家から、更に清代の人々にまで及ぼして、その作を見なければならぬのであるが、これは更に他日の機會に譲り、こゝには華山を中心として、その前後の諸家の作二三に及ぼした丈けである。

浮世繪に現はれた植物

三〇

浮世繪の花鳥といふものは、いはゞ刺身のつまのやうなものである。浮世繪師の中には時に花鳥畫も畫いて上梓したものもあるが、それは多くは美人畫なり、風景畫なりを製作した隙にやるといふ、ほんの餘技的のもので、これを専門にやつたといふ人はいやうである。従つて浮世繪の花鳥として、これを論じたり、觀察したりすることは、或は浮世繪師に取つては迷惑に感ずるところがないでもあるまいと思ふ。併し花鳥といはず、單に浮世繪の中に現はれた樹木花卉といふ方から觀て行くと、中々興味があり、研究の價値もあり、且つ畫家自身の趣味性なども窺はれて面白い。先づ樹木といふ方面から見ると、矢張り廣重が、あの風景版畫に扱つてゐる樹木を一わたり檢索する必要があらう。

廣重は、『東海道五十三次』『東都名所』その他數ある風景畫の中で、随分いろ／＼の樹木を畫いてゐる。松、杉、竹、梅、櫻、柳、かうした種類のものは、その風景を構成する主要なる材料として、随分澤山に扱はれてゐる。時に、これは何の樹であらうと、判斷に苦しむやうな物もないではないが、大部分は忠實な寫生を基礎として、堅實なる筆を揮つてゐる。そして松なら松を畫くにしても、同一の筆法、同型

の表現法を取らず、出来るだけその手法をかへてゐる。殊に廣重の畫いた樹木の中でも、いつも敬服感嘆してしまふのは『近江八景』の中、『唐崎の夜雨』である、畫面の大部分は、あの雄大な松に占有されてゐるのであるが、その松の描法などは、思ひ切つた簡略法である。即ち夜の氣分を表現する爲めに、松の外廓内部一様に墨一色として、僅かに濃淡をつけ、その枝の下に向ふに従つて細かく葉の細線を描き、その上から雨の線が垂直に幾百千條となく畫き下されてゐる。

かうした一方を墨一色にして、だん／＼と細かく枝條なり、葉なりを畫き現はす筆致は、四條圓山派などには珍らしくないのであるが、版畫の上に試みて、その上に大膽なる垂直の雨を降してゐるなどは、如何にその構圖に苦心したか、窺はれる。野口米次郎氏は、此の作を激賞して、

淡墨の上に雲母で描いた直線の豪雨は、木版畫界前代未聞の壯麗である。この豪雨は畫面の中央に跨る巨大な老松に突撃してゐる……あゝふきばかしの見事な裝飾美だ、老樹の下には濃藍の湖水が流れる、然しかかる傑作を廣重に與へた老松は『山櫻咲けばかつ散る世の中に昔ながらの志賀の浦松』と歌はれた老松は、數年前枯死してしまつて、今では廣重の作のみが不老の記念として残つてゐる。併し『唐崎夜雨』の存在する限り、其名聲は海外海内、何處へ行つても永久に稱へられるであらう。

というてゐるが、此の一文苟くも廣重の「唐崎夜雨」を知るもの皆同じ感ぜであらうと思ふ。

この「唐崎夜雨」を見て、直ちに聯想されるのは、同じ雨の風景畫であるが、「東海道五十三次」庄野の竹林の描寫である。「唐崎夜雨」が廣重の松の傑作とするならば、竹に於ては此の圖が代表的のものであらう。此の作に於ては竹林が三段に扱はれてゐる。即ち最も近い部分はかなり細かい描法で、竿を伸ばし、葉を點じ、枝を配つてゐるが、その中には唯外廓丈けを濃い墨色一つで現はし、更に遠くの竹林は、同じ形で唯墨を淡くしてゐるのみである。

そして唐崎に於て垂直に降らした雨の葉はこゝでは斜に、横なぐりに叩きつけて、その間に雨に惱む駕籠屋や、家路に急ぐ農夫を點出してゐる。その計劃としては「唐崎夜雨」と同一の型に屬すべきものでありながら、まるで變つた畫面を構成してゐる。この點を見ても、彼が如何に周到なる注意を、畫の構成に注いでゐるかが知られる。

廣重で、いま一つ感心するのは、柳である。柳は、彼が最も好んで描くところのものであつたと見え、單に風景畫の上のみでなく、風俗畫の中にも極めて手際よく描いてゐる。廣重としては珍らしい美人畫の「兩國夕すずみ」三枚續きを見ると、大川端の風に吹かる、柳が實によく畫けてゐる。枝の配置も、點出された美人のそれごとくにしつくり合つて、些の間然する處もない、同じ「東都名所」の「吉原見返り柳」

を見てもこれが中々活躍してゐる。

更に彼が得意とする風景版畫に於ける柳はどうか、面白いことには、人物のあるものの場合と、風景の時、柳の描法を全くかへてゐることである。例へば「兩國夕すずみ」や「見返り柳」の如きは、葉の如きも細長い線を用ゐてゐるが、風景畫になると、多くの場合點描で、枝に物を言はせ、枝に自然の韻を含めてゐる、「木曾街道六十九次」の洗馬、「江戸近郊」の玉川秋月の柳を見ても、よく二つの方法の區別がわかる。

廣重には、このやうな用意の周到な一面があると共に、一面には極めて大膽な仕事もしてゐる。例へば同じ木曾街道の中、「宮の越」の背景の如きは、切抜きの影畫を見るやうである。此の場合、その畫かれたる樹木が何であるかは詮索する必要はない。模糊たる中に何ものをか表現してゐる並々ならぬ手腕を思ふ。

私は十數年前、我が新興の劇壇の上に、クレীগの舞臺裝置が紹介されて、一種印象的なシーンを表現せしめたことを覚えてゐる。此の「宮の越」に接すると、いつもそれが聯想されて來るのである。

廣重には、別に花鳥畫がある。その數も少くないが、これに就いては項を改めて書くことにする。美人を表現するのが目的でありながら、その背景に、添景に、一筆一劃も忽がせにしないのは、數ある

浮世繪畫家の中、窪俊満の右に出づるものはあるまいと私丈はさう思つてゐる。俊満は間接に建部凌俗あたりの感化を受けて、詩文に通じてゐた上、花鳥畫なども非常に巧みであつたから、それが自然に版畫の上にも現はれて來たのであらう。俊満の作中で、最も有名な『六玉川』の中、『山吹の玉川』などは、兩岸の山吹から、中央の流れなど、如何にもよく描かれてゐるし、『萩の玉川』の遠景の如きは、將に背景丈けで、感じのよい花鳥畫になつてゐる。

更に敬服するのは『千鳥の玉川』である。遠景に茅葺の邸宅を見せ、霞に千鳥を飛ばせてゐるが、筆は實にしつかりしてゐるし、更に前方に眼を轉じて前景の禾本科の草を見ると、觀察の精緻に加ふるに筆の雄勁を以つてし、畫品も極めて高い。此の作の右方に楓の幹が一寸現はれてゐるが、この幹に用ひた筆致の如きは、その蘊蓄をよく説明してゐるし、これが『碓の玉川』に來ると、左方の松の木になつて現はれて來る。

此の山吹や、萩や、松の木や、水邊の草や、これらは歌麿や清長が、たとへ浮世繪の巨匠であつても、一寸眞似られぬ立派な仕事であると思ふ。

歌麿の如きは、時に美人畫を離れて『蟲多らみ』や『汐干のつと』のやうな寫生を主としたものも出してはゐるが、これは植物が主でないからこゝには言及せぬ。春信も時に背景に面白いものがあり、『蓮池

美人』の蓮の如き優れたものがあるが、どちらかといへば、人物とその添景配物とは随分隔りのあることを感じしめる。殊に花鳥畫となると、美人畫の濃艶さに似合はず、何處かゴチなくなつて、生硬な線が目につく、背景の衝立や、襖繪などに描かれてゐるものを見ても、人物ほどに感心出來ない。清長になると。これはまた賢明で、殆んどさうした方面に及んでゐないといつてよく、飽くまで人物のみに終始してゐる。

更に遡つて菱川一派のものをを見ると、師宣はじめ、唯 繪卷もの―大和繪の―一部をそつくり借り來つて、人物を添へたやうな感じである。簡素な筆に時には何ともいへぬ興味を感じることがあるが、要するに人物に壓せられてしまつて、その植物が十分に特長を發揮してゐないといふことになる。その中で、『伽羅まぐら』の中の、垣を隔て、相逢ふ男女の圖とか『美人盡し』三冊本の中の業平の如きは、その特長がよく現はれてゐて、線が如何にもよく働いてゐる。

清長以外の鳥居派のものには、特にこれという擧げるほどのものはなく、春章の作では風俗十二ヶ月あたりに現はれてゐる柳や矢竹や、瓶に挿された燕子花や牡丹などに、その一斑は窺はれるが、これとも人物に比較すれば非常に格が違つてゐる。

北齋は例の縦横無盡の筆が、植物に對しても遺憾なく發揮され、時に面白いものがある。英泉は風景畫

で並々ならぬ技倆を揮つてゐる丈けに注目すべきものが少くない。ぐつと新しくなつて清親は風景畫にも靜物畫にも、歐洲畫の影響を受け、その花鳥畫には純寫實風の作があつて評判を博したのだが、さう調子の高いものといふことは出来ない。

たとへば水彩畫風に畫いた「朝顔圖」とか「柿に目白」などは、清親としては全くありふれた作であるが、歐風を取入れた手腕は當時にあつては異色とせなければならぬ。それから風景畫の中に畫く植物にも、それ／＼自家の工夫は積まれてゐる。「今戸の月」あかりに見せた柳の枝、玉川布晒しの中景となつてゐる立木と叢などは、廣重にも北齋にも見られなかつたものである。此の方からも、清親の作などは再検討の要があらうと思ふ。

鴛鴦圖



一立齋廣重筆

(廣重の花鳥畫參照)

廣重の花鳥畫

一立齋廣重の藝術は、何といつても風景畫が第一である。その『東海道五十三次』は、彼の名をして九鼎大呂の重きをなさしめてゐることいふまでもなく、『木曾街道六十九次』にせよ、『金澤八景』『江戸名所百景』その他、彼の風景畫には、彼れ獨特の妙味があつて、鬼才北齋と雖も、一寸企及すべからざる妙趣をもつてゐる。

然も廣重は、その風景畫に専念する一方、時々花鳥畫をものしては、その得意の筆を縦横に揮つてゐる。だが花鳥は矢張り第二義で風景畫に比ぶべきものではないが、それでも奇才往く處佳ならざるなく、よく動植物の眞を擷んで、これを畫面に躍動させてゐる。唯彼れが『東海道歌重』と名乗つて狂歌を好んだりした處から、折角の花鳥版畫の上に、かうした狂歌や狂句を題して、畫面の美を損じてゐるものもあるが、その稚氣や時に愛すべきものもある。

その畫く處の花鳥畫を、筆致や構圖の上から見ると、四條圓山系統に屬するものが矢張り多い。時に南畫風のものもあるが、それは前者に比べれば極めて少數である。然らば彼れは、四條圓山の畫風を學んだ

かという、決して規則的に學んだやうな跡はない。いはゞ獨學で、當時流行した書風であるから、つひこれに釣り込まれたといふのが至當であらう。併し時には、筆の力を見せる雲谷派や狩野派あたりの作風を見せたものもないではない。

末つひに雲井の龍となりぬべし川瀬をのぼる鯉の勢ひ

と賛のある横物の「鯉」など見ると、應學の影響が如何に深く潜んでゐるかよくわかるであらうし、

花下忘歸因美景、樽前勸醉是春風。

と題した櫻花小禽大短冊などを見ると、まるで、景文の筆である。さうかと思つくと、北齋そのまゝの竹に雀があり、南畫の面影の見える、「菊に鷓鴣」の中短冊などがある。数の多いのが、雀、雉、鶴、鷹、燕、鴛鴦、千鳥。花では、櫻、椿、紫陽花で雞など、時々それが随分皮肉な形にまで畫いて、自から脂下つてゐるやうなものもある。

成功してはゐないが、「虎耳草」のやうな變つたものを畫いてゐるものもあるし、珍らしい舶來の鷓鴣類などを扱つたものもある、題や、賛は時には畫としつくり合つてゐるものもあるが、時には無くもがなと思ふのである。朝顔の咲いてゐる處へ、蛇の目傘を乾し、その傍に雞のゐる繪に例の雞の歌を、漢字で、然も篆書で

鳴波古楚別於尾志女雞野音酒喜舉江奴里之曉茂加奈

と書いたなどは、餘りにアクが強過ぎる。繪が相當の出來であるのに、惜しいと思ふ。こんな風で、廣重の花鳥畫の中には、随分よいものもあり、くだらぬ作もある、その全生涯に、どの位作を公にしてゐるか知れぬが、相應な數に上るやうである。いま、松本喜八郎氏蒐集品につきその畫題を列記して見やう。

大短冊類

雪中の椿に雀

雞に朝顔(蛇の目傘)

海棠に五色鷓鴣

櫻に鸞

椿に四十雀

菊の花に雉子

松の上の鷹

燕子花に白鷺

雪中蘆雁圖

梅に壽帶鳥

桃の花に燕

水葵と鴛鴦

中短冊類

撫子に蝸牛

月下飛鷹

紅葉に孔雀

三日月に松と木兎

黃蜀葵に大瑠璃
 芦に都鳥
 梅に鸞
 躑躅に三光鳥
 椿に文鳥
 燕子花
 芙蓉に山翡翠
 蕨に山鳥
 間短冊類
 山鳥に竹
 雪中竹雀圖
 松上の鷹
 山茶花に雀
 梅に鶯(三圖あり)
 藤の花に小雀
 雉子と雪中の松
 枝垂桃と鶯
 木蘭に鶻
 紫陽花に鶻と目白
 太藺に白鶯
 柿の實に鶻
 水葵に翡翠
 月に杜鵑
 松に鸚哥
 鴛鴦に寒菊
 竹に雀(二圖)

文鳥に朝顔
 芥子に小鳥(不明)
 山藤に文鳥
 藤に日雀
 木撞に白頭翁
 蘆に都鳥
 菊に目白
 紅葉に白頭翁
 月下の松に杜鵑
 松に鷹に日の出
 細短冊類
 若楓に白頭翁
 石榴にカナリヤ
 紅葉の瀧に鶻
 桃に三光鳥
 藤に黄鳥
 燕子花に飛燕
 紫陽花に雞
 河蓬に翡翠
 秋海棠女郎花に翡翠
 山茶花に雀
 梅に文鳥
 紅葉に目白
 紅葉に三光鳥
 雨中の桃に燕
 竹に雀

月夜の梅
 藤に目白
 燕子花に蛙(墨刷)
 桔梗
 紅葉に目白
 野菊に翡翠
 燕に波
 中形横物
 雪中梅に鸚哥
 松に連雀
 鐵線花に蟹
 海棠に小雀
 木蘭連雀(藍刷)
 燕子花に雀
 松に鶴
 牡丹に蝶
 秋海棠に蝸牛
 蝶に撫子
 紅葉に白頭翁
 葛紅葉に雁
 梅に鶯
 萩に鮎
 鯉の圖
 松に鶉
 紫陽花に鶺鴒
 菊

紅梅に鶯
 竹に雀
 桃に鸞
 芥子に燕
 若楓に三光鳥
 秋海棠に雀
 桔梗に雀(地紙)
 月下の梅に鶯
 水葵に赤蛙
 三つ切型
 松に斑鳩
 薔薇に雀
 蝙蝠
 臘梅
 白梅文鳥
 木蘭に雀
 燕子花に杜鵑
 水葵に翡翠
 梅に鸞
 芙蓉に瑠璃(團扇形)
 海棠に鸞
 烏頭に尾花連雀
 風車に鸞
 翡翠に桔梗
 燕子花に蝶
 竹に孔雀
 石榴花に小瑠璃

- 梅に文鳥
 - 躑躅に文鳥
 - 鸚哥に竹
 - 月下雁
 - 翡翠に桔梗
 - 木樨にカナリヤ
 - 文鳥に椿
 - 竹に菊、鶴
 - 鴛鴦に水葵
 - 藤に駒鳥
 - 海棠四十雀
 - 鶉に桔梗
 - 斑鳩に紅葉
 - 鸚哥と梅
 - 鶉に燕子花
 - 橘に杜鵑
 - 桃に目白
 - 鶉に紅葉
 - 尾花に翡翠
 - 若竹に蝸牛
 - 緋桃に燕
 - 海棠に瑠璃
 - 水葵に鮎
 - 雀に燕子花
- なほ此の外、中村辰次郎氏遺愛品の中には、櫻の下に猿を繫いだ圖で
 人煙一穩秋村僻、猿叫三聲曉峽深

と題した大短冊を見たが、これなどは廣重の花鳥動物畫中でも傑作に屬すべく、風景畫と花鳥畫とを兼ねたやうな型式で、下に得意の山水を畫き、上に大きく花を畫いた作などもある。肉筆では松木氏藏の燕と雁の双幅など面白い。これは墨堤の櫻の上に大きく燕三羽を飛ばせ、高輪の夜色に雁の列を見せたりしてゐる。版畫では間の短冊によく見るが、東都名所の永代橋に、船の櫓を大きく見せて、その間に風景を畫き、上に杜鵑を飛ばせたり、綾瀬あたりの雨に大きく燕子花と燕を點出したり、或は洲崎百萬坪に滅法界大きく鳶を舞はせたり、此の技巧は將に廣重の獨壇場というてよい。彼の才も亦侮るべからざるものを持つてゐる。

奇異な花鳥動物畫

奇異な花鳥動物畫

狩野一溪の「後素集」などを見ると、花鳥畫や動物畫の畫題にも、随分變つたものが現はれてゐる。例へば「花竹獼犬圖」とか「梟に椿」とか「春波吟龍」などいふのがそれである。併しながら、大抵はその取材の範圍も定まつてゐるもので、單なる形や色の上の配合か、さうでなければ、名稱語義のお目出度いものを集めた洒落とか、所謂畫題なるものを見ても、大抵内容は極つてゐる。

近頃は花鳥畫の方でも、自然の研究といふことが盛になつて、山野の一角一隅に、いろ／＼の灌木や雜草の交錯してゐる處に趣味を求めたり、溪谷淵潭の一部を寫して見たり、その取材の範圍といふものが非常に擴大し、自然花鳥畫家の扱ふ植物や、動物の數も多くなつて來たわけであるが、かうした自然研究を主としたものゝ外に、構圖とか、色彩とか、筆致とかいふ方面に於いても、随分變つた作品がある。一つ二つ記憶に残つてゐるものを書いてみよう。

破天荒な象と鯨

その構圖の破天荒で、大膽な處では、若冲の作に往々驚嘆させられるものがある。帝室御物の三十幅對の大作を見るも、尋常一様でなく、殊に得意の雜などになると、一見グロテスクな形のものを書いてゐるが、扱て仔細にこれを見てみると、矢張り、何處かに自然の研究が現はれてゐる。實際若冲といふ人は素晴らしい腕を持つた人と思ふ。

その若冲の作の中で、最も印象深いのは、神戸の川崎男爵家舊藏であつた、象と鯨の六曲一双の大作である。象の如きは思ひ切つた太い線で、空を仰いで鼻を弄んでゐる處を畫いたものであるが、背景は狩野風に見るやうな極く粗い筆で、山裾と松葉のやうな草を畫き、その上に、突如大きな象を据ゑつけてゐる。その耳の表現の如きは、大膽とも放膽ともいひやうのない位思ひ切つたもの、とても凡手の企て及ぶべき圖ではない。

鯨の方は、一層思ひ切つたもので、屏風の殆んど全面は山の起伏するが如き大浪を畫き、前景僅かに波がしらを見せ、その波がしらの中から、眞黒な怪物、大鯨が背の一部を見せたばかり、恐らく背鰭の一部と、高く潮を吹いて天に沖してゐる狀を見なければ、これが鯨かと想ふばかりであらう。若冲が如何なる

動機で、こんな大きなものを扱ったか、兎も角も、餘程自信がなくては、こんな大膽なことは出来ない。
—拙著『動物と藝術』参照—

若冲には、まだ「枯木鷲猿」の大幅もある。これは藤田男爵家の舊藏で、一羽の大鷲が、樺の枯木の上にあつて何物かを狙つてゐる、するとその下に、一頭の猿が岩の間に隠えながら潜んでゐる圖で、殊更に珍らしい構圖といふのではないが、鷲が相當誇張されて畫かれてゐるので、物凄いやうな感じを懷かせる、そのともすれば怪奇に見える筆致は唯に動物の上ばかりでなく、植物にもそれが現はれてゐる、こんな強い表現法を用ゐるのは、並大抵のことではあるまいと思ふ。

天狗酒宴圖

變つた構圖のものとしては、吳春に「天狗酒宴圖」といふ珍畫がある。元濱松の中村藤吉氏の所藏であつた。一寸見たばかりでは、二本の大杉が藪々として雲衝くばかりに聳えてゐるだけで、下に「寫於湖南客舍月溪吳春」と記されてゐるばかり、處がよく見ると、その上方、幹の途中から左に差し出した大きな枝があつて、この枝の許に洞穴があり、此の洞穴の中には六個の烏天狗が酒宴を催してゐる處が畫かれてゐるのである、然も此の天狗どもは、杉の筆致とは打つて變つて精密な筆で描かれ、着色さへ施されて

ゐる、吳春が特にかうした構圖を考へ出したのか、それとも何人かの依頼に應じたのであるか、兎も角も珍らしく洒落れたものである。

猿で名高い狙仙などには、時に妙な構圖の作もあつて、得意の猿を竹竿の上にとめて見たり、石燈籠の火袋の中から顔を出させたり、いろ／＼と奇異な構圖のものを畫いてゐるが、こんな奇抜なものはありません。

聲の佛法僧、姿の佛法僧

狙仙の血を引いてゐる森一鳳には、珍らしい作がある。それは矢張り藤田家のものであり、松本双軒庵鑑賞品中にも同一構圖のものがあつたが、菩提樹に佛法僧を畫いたものである。佛法僧は近頃では研究がやかましくなり、その棲息地も珍らしくない程わかつて來たが、一鳳が此の作を畫いたころは餘程珍らしかつたに違ひない。處が最近、佛法僧と鳴くのは、此の美しい鳥でなく、木の葉木兎と知れて、弘法大師以來の有難味が立消えの有様となつたが、此の佛法僧と鳴くのが木の葉木兎であるといふことも、實は今日の發見でなく、昔の隨筆にも「嗚呼矣草」には、それが記してある、なほ古畫にも、松花堂は聲の佛法僧として、後ろ向きの木兎を畫いて、賛をした細物がある、これなども珍らしい方であらう。

蟲 の 行 列

同じ四條派の畫家で、西山芳園の作は、關西地方では今日でも相當な聲價を保つてゐるやうである。その作中に面白い蟲の行列といふのがある。堅一尺二寸七分、横二尺二寸ほどのもので、蟋蟀をはじめ、きりぎりす、松蟲、鈴蟲、蜂、蟻などの一群が長い行列を作つて行く奇抜なもので、先鋒を承るのが蟋蟀そのあとへ蜂が朝顔の蒼を捧げて續く、次ぎに機織蟲が、女郎花の花を槍に擬して續き、次に挾箱の代りにえんま蟋蟀が、朝顔の種子を擔いで行く、次に『ぼつた』が、これも槍の代りに吾亦紅の穂のついたのを捧げる、あとから、蟻螂が大鎌を振り立て、進む、次にまた『きりぎりす』が續き、次に草の實のお駕籠、次に野菊を擔ぐ蜂、觸吊草を高くさしあげる蝗、あとから蜂の巢を捧げてゆくもの、鬼灯を擔いで行くもの、その着想が如何にも面白く、これに香川景樹が

空をとぶかりがぬならぬ一つらの蟲は秋をや送るなるらむ

と贊してゐる。この作は、傳鳥羽僧正の『鳥獸戲畫卷』などいふ素晴らしいものに比較するほど問題にはならないが、兎に角、才人の才筆として中々面白い。

炎 庭 想 雪 圖

かうした種類のものとは、全然別だが、先年川端龍子氏が青龍社で發表した『炎庭想雪圖』なども、『奇異なる花鳥畫』には違ひない。その構圖の主要部分である『雪中芭蕉』は既に王維が筆にしたと傳へられ、それ以來、いろ／＼の人によつて描かれて居るが、實際あの南國氣分の芭蕉に雪が積つたら、かうもあらうかと想像した處に、此の構圖の妙味がある。季節違ひで、一時喧しかつた上村松篁氏の蓮花群鴛などと違つて、立派に意識の上から生れた構圖だけに肯かれる處が多い。

これは拵らへものであるが、拵らへものでなく、造化の奇工をそのまま筆にして、一種の怪奇的構圖を見せたものもある。速水御舟の遺作中に異彩を放つてゐる『樹木』の如きはその一例である。これは七葉樹の老樹を畫いたものであるが、樹木の持つ一つの畸形を忠實に寫し、熱心に凝視すると、かうした怪奇なものとなる。だが如何に形が怪奇でも、自然の一現象たるには違ひない、そこに迫力があるわけである。

自然の物象が、時に空氣や水の爲めに、いろ／＼と思ひもかけぬ形を構成したりすることは、想像の外である。たとへば東北の藏王山に見る、樹氷の怪奇の行列の如きは、將に宇宙の一奇觀であるが、これが果して繪畫に表現出来るかどうか、若し出来たら面白からうと思ふ。

色彩から見た果實と蔬菜

色彩から見た果實と蔬菜

セザンヌの畫集靜物篇を贈られたので、あの美しい、そして鋭い色調の感覺から、生れ出てゐる一作一作を眺めてみると、その中の林檎や、西洋梨や、オレンジが、それ／＼異つた形と色調とを以て、周圍の物象と極めてデリケートな關聯を保ちつゝ、一分一厘も動かすことの出來ぬ緊張さを以て、我々を別の藝術世界に導いてくれる。靜物畫の中で、セザンヌは特に我々に深い印象を與へてくれるのであるが、他の人々の畫くところ、またそれぞれに違つた材料を別々な配置により、巧みに色彩と形狀とを利用して、一つの美の世界を現出してゐる。

靜物畫が我々に與へてくれるかうした美しくい印象を憶ふ時、我々は常にその畫かれた物象、その中で特に果實や蔬菜のそれ／＼の持つ美しさ——色彩に於て——形狀に於て——に魅入られずには居られない。

「西京雜記」に記された李の種類、それは名を並べた丈けでも、その色彩の美しさが、目の前に現はれてくるのであるが、李ばかりではない、桃でも、林檎でも、柑橘類でも、石榴でも、葡萄でも、色調の上にも各々特長があつて、一個をじつと見て居ても、何ともいへぬ感興が湧いて来る。石榴の實などになると、それが笑み割れて、中から水晶の如き、紅玉の如き細かい珠玉を見せるなど、一寸他の果實類には求め得られない面白さがある、地球榴などといふ名のもがある。元より盆栽師が附けた名で、正しい學名でも何でもないがその名のわけを聞くと、石榴の大きい果實の種類の中で、殊に外皮の色彩の面白い點があり、具さに眺めてみると、恰も地球機を見るやうで、色分けにされた國々や、異つた色で現はされた海や山などが目のあたりに見えるやうな心地がするといふのである。地球機を例にしたのは俗っぽい見方ではあるが、その皮の美しさは、やゝ想像するに難くない。昭和七年の帝展に故片多徳郎氏が、此の石榴を枝のまゝ靜物として畫いてゐたが、矢張りかうした感興が手傳つたのであらう、と、私はひそかに考へたりした。

◇ 林檎の色彩も、果實の中では極めて美しい寧ろ美し過ぎる感じである、その鳥の來る頃色づくといふの

で、『來禽』と呼んだ支那の文人も氣が利いてゐるが、その來禽といふ文字から、『林檎』といふ文字を拵らへた人も面白い、頭のよい人だと思ふ。茶入に文琳と名がつくものがある、これは矢張り林檎から來てゐるので、色にも形にも縁が深い。

セザンヌの畫いてゐる林檎は、あの眼覺めるやうな紅色のもの、或は青い中に、ほんのりと紅を染めた色もある。林檎の眞の美しさは、ピリヂアンの上にレッドベリーオンを點じたやうなものに、林檎本然の美しさがある。これを卓上に置いて、他の物象を配すると好個の静物畫が現はれて來るが、枝のまゝにして鳥が來れば、東洋畫の畑のものとなる。かうして林檎の色調は、形のあまり變化ないのに比して、極めて印象的であり、特にそれが夕映の燃えるやうな空の色さへ聯想せしめることが出来る。

林檎が夕映の色を聯想せしめるやうに、桃は曙の色彩を思はせる。それも在來種の紅色の深いものでなく、クリーム色にほんのりと紅色を染める水蜜桃がそれである。更に一層これを鮮かに見せるのは、日本でも東北に産して初夏の頃、私達の前に現はれて來る櫻桃である。これこそ曙の色の美しい表現である。その地色のクリームに朱をさした處は、さしのぼる旭のそれにも譬へやうか、古い支那の黃玉か、瑪瑙でも見るやうな此の果實は、繪に畫くべく餘りにも華麗に過ぎる。

◇

故岸田劉生氏は、その静物畫の中に、好んで冬瓜を畫いた。淡緑に白のヴェールをかけたやうな色彩、その悠々迫らざる形は、果蔬類中極めて神祕的なもの、象徴的なものである。冬瓜はその風味に於てもかうした感じがあるが、色彩は全く特長がある。劉生氏は此の果蔬を卓上に置いて、じつとカンヴァスを凝視してゐたのであらう。昔の人は冬瓜に『かもり』の名を以て呼んだ、『かも』は氈、即ち毛氈のことである。その表皮が一面に白い色彩に包まれて、その中に緑を表はし、丁度毛氈のやうに見えるからであらう。日本畫でも竹内栖鳳氏は、此の色彩と形狀を愛して屢々繪にする。

淡緑といへば、私は葡萄の一種であるマスカット、アレキサンドリアなどを擧げたい。この種類は粒も大きく、非常に芳ばしい香氣を有つてゐるので、麝香葡萄と呼ばれてゐるが、漿果の粒が非常に大きく、その色も、エメラルドのやうな感じを味はせる。その房の大きいになると、八九十粒もつけて、瓔珞のそれにも似てゐる。その一房が既に立派な繪畫的要素を備へてゐるが、更に吳須の色美しい染付の皿にでも盛る時は、一層美しさを發揮する。甲州葡萄の紫の房も捨てられぬが、色彩のもつ美観は、到底此のエメラルドの瓔珞のそれに如かない。曾て山村耕花氏がこれを畫いた。

◇

つる荔枝がこの頃、時々繪畫に現はれて來る。果實の中では、形といひ、色彩といひ、全く著しい特長

をもつたものである。鮫肌のやうな粒立つた表皮は、これが裂けると中から朱色をした肉漿を露出する。黄と朱との調和である。何とはなしにエキゾチックな感じを味はせる。

つる荔枝は錦荔枝ともいふ。もと印度の原産であつたが、早くから九州地方に渡來して各地に栽培されるやうになつた。元來支那が中間的の栽培地になつてゐる關係上、支那人はよくこれを作つた。その裂けぬ前の形が、荔枝ライチに似てゐるし、蔓草であるから、蔓荔枝といはれて來たのであらうが、錦といふ文字は全くその色彩から來てゐるのである。

錦荔枝州第一奇、大如雞子壓枝重。

といつてゐるし、また作者は不明だが、

曉露初含翠、秋風忽破黃、寒漿淡忘苦、瓊蕊欲流香。

とある、『秋風忽破黃』は、如何にも東洋畫的興味であるが、油で書いても面白からう。朗世寧は曾て『竹陰西靈』といふ、靈犬を描いた作の背景に、これを扱つてゐるが、矢張り面白い。田能村竹田にも、これを畫いた『野餐』の横物がある。

◇

色彩の上から見て、逸することの出來ぬものに葱がある。葱はいま歐洲原産の玉葱が盛に使用され、シ

リヤ、パレスチナ方面の玉葱の如きもその味が美しいので、古來賞翫されてゐるのであるが、形の上や色彩の上では、東洋産の葱に及ばない。

殊に東洋人、日本人の好むところの「淺黄」といふ色彩は、此の葱から起つたもので、『安齋隨筆』にも延喜雜殿部に深黄、淺黄あり、共に刈安をもつて染之、黄色の淺きと、深きなり、されば淺黄は黄色のうすきなり。後代うす青色を淺黄といふて、淺黄の字を用ゐるは誤なり。雜殿式淺黄は、うす青を

さぎというて、淺黄には淺葱の字を用ふべく、葱字ひとよむ、葱の葉の淺きなり。

云々とある。葱の葉の青と、根際の白い處の間にある黄色を帯びた色彩の名稱である。かうした微妙な處にまで、色彩の美を見出してゐる古人の眼にも驚かるゝではないか。

◇

葱の中でも玉葱は、外皮の色と形とで、在來種の葱とは全然別の感じであるが、靜物畫として畫かれる場合には、一寸面白い。

色彩に於て葱とやゝ共通の點のあるのが白菜である。元來支那の産で、それが今日では山東菜といふ舊名などは忘れられてしまつて、白菜として呼ばれてゐる。形も枕のやうで面白く、相重なり、相抱く、葉片の脈が雪白で自からなる網状を呈し、下部の白色は上に向ふに従つて極めて淡い黄色を呈し、黄色はま

た幾分の緑を加へ來つて、白色の脈と極めて面白い對照を見せてゐる。かうした色と形との興味から、近頃よくこれが靜物として畫かれ、また日本畫にも畫かれてゐる。

同じ菜の中でも、甜菜になると、外部の緑が濃く幾分黒味を帯びて來てゐるので、色彩の美は到底白菜に及ばない。併し甜菜が園藝化した葉牡丹になると、葉の縮れ工合と、その中に秘められた紫の色の展開に依つて、また變つた味ひを感じしめる。但し繪畫的妙味は餘程減殺されてしまふ。

小さいもので慈姑は面白い。その外皮には、丁度波斯あたりの出土品に見るやうな、いみじき光澤と、奥行の深い濃緑を潜め、これに褐色の部分が巧みに彩りを加へてゐる。その芽先になる上部の角状の莖も面白いし、形から見ても特殊のものとして、東洋畫でも西洋畫でも好んでこれを畫く、一種飄逸な趣味に富んでゐるからである。

果實の中では、更に西瓜と南瓜とを擧げなければならない。何れも外部のみでなく、内部に別の色彩があるが、西瓜の紅色の肉漿はよく描かれるが、南瓜の内部はあまり描かれない。唯、川端龍子氏と奥村土牛氏がこれを畫いたことがある。

複雑な色彩と變化のある形状のものとして、鳳梨(パイナップル)は、近頃盛に畫材となる。あの鱗状をなした外部の色には、三彩釉中に見る綠や、古代の髹漆に現はれて來るやうな朱色さへ加はつて中々に



傳黃筌筆

蜴蜥

(繪畫と嫌はれざる參照)

變化がある。

此の外柿の美しさは忘れぬものであらう、まだ成熟せぬ青い中も面白ければ、朱果と呼ばれる位、成熟したものゝもつ、あの色澤、丁度陶器の珊瑚窯を思はしめる、故坪内逍遙博士が、熱海の双柿舎にこれを愛したり、去來が落柿舎にその思ひ出を書いたりしたのも、さこそと思はれる。唯に生果の時ばかりでなく、乾されてころ柿となり、黝黒色の上に白粉の化粧をしたのが、また俳味を唆らせられる。栗も面白い、毛毬のまゝでよし、裂けて厚皮のまゝのものも雅致がある。

果實と蔬菜のもつ色彩美、それはかうして擧げて來ると全く際限のない興味ある境地を展開して來るので、東洋の蔬菜畫、西洋の靜物畫の大部分が、これに依つて光彩を放ち來つてゐることも偶然ならざるを覺ゆるものである。

繪畫と嫌はれる蟲

繪畫と嫌はれる蟲

東洋の花鳥畫に畫かれる花卉翎毛の中には随分いろ／＼なものがある。小鳥類の如きものは皆優しい姿にして誰にも愛せられるのであるが、蟲類となるとさうは行かない。中にはぞつとするやうな氣味の悪いものさへある。併し、それが花に配せられて、畫人の筆にのぼると、その氣味の悪い、嫌はれものの蟲にまで藝術的な匂ひがついて来る。美化されて愛着の念をさへ萌させるから妙である。蟲といつても昆蟲類もあれば兩棲類もある。昆蟲類もあり、それ／＼趣味に活きて来るのが面白い。

蟲 曼 茶 羅

さうした一つの例を挙げると、京都の曼珠院に、有名な蟲の繪がある。筆者は趙昌と傳へられる。此の作は双幅で、一は錢葵の花を中心に畫き、これに蠶螂を配し、一に罌粟の艶麗な花に添へるのに、蜥蜴、

揚羽の蝶を以てしてゐる。その姿態は實に精密なる觀察眼に依つて描かれたもので、眞に迫るものがある。蜥蜴にせよ、蠶螂にせよ、あまり氣味のよい蟲ではない。あの蜥蜴の金屬性の色彩光澤、蠶螂の鎌に似た前肢を振り翳した形、決して愛すべきものではない。併し此の花に配せられると、何となく一種の寓意があるやうに思はれる。或は一つの曼茶羅の形式ではないかといはれてゐる。そこで私は、こゝに曼茶羅の文字を以て此の双幅を呼んでゐるのである。

錢葵の直線、その葉蔭に潜む蠶螂は何を意味するのであらう、眼覺むるばかりに美しい光彩を見せ、妖艶を誇る罌粟の花に、不氣味の蜥蜴を配したのは、それ丈で一つの象徴詩を讀むやうな感じがする。見かたに依つては現代の世相の一部をまざ／＼と見せられるやうな氣持もする。

黄 筌 の 蜥 蜴

蜥蜴といへば、黄筌には有名なる蜥蜴の作がある。瓜の葉であつたと思ふ、畫面一杯に描いた上に、蜥蜴を配したのであるが、これはまた一種の氣品を帯びて、忌み嫌ふやうな感じを起させない。かうなると筆の威力も素晴らしいものがある。

蜥蜴で思ひ出すのは、明治の小説家、廣津柳浪の作、「黒蜥蜴」である。これは「黒い蜥蜴に蠅取蜘蛛ま

ぜて——』といふ俗語からヒントを得たもので、無頼な舅を持つた嫁、鬼畜のやうな養父をもつた養子、かうした夫婦の愛情と、養父の残忍性を對照せしめ、嫁は虐げられる無念さに耐へず、遂にその舅を毒殺する、その毒が此の蝮蛇といふことになつてゐる。

蝮蛇に毒があるかどうか、これは専門家に任せて置くが、寺島良安の『和漢三才圖會』の中には

按、青蝮蛇、小者三四寸、大者七八寸、背青綠色而光有縱斑文、腹白口大、又有青綠光而無襟色、雌雄抱負、人捕之則鳴如日蝕、最有毒、猫食之嘔吐煩悶、人誤煮食、有中毒死者、今人恐不藥入用、其尾脆易斷。

とある。此の不氣味な蟲、毒有りといふ此の蟲を捉へて、人間の残忍性を描く文學と、此の嫌はるゝ蟲をも氣品の高い藝術にしてしまふ繪畫と、面白い對照である。

蠶螂の殘虐性

残忍性といへば、蠶螂の如きは少い、『かまきり』と謂ふ名、既に何となく嫌悪される音調を有してゐる。その三角形をなした頭、鋭い目、そして飽くまで發達した武器となつてゐる前肢、それはよく惡魔の象徴とまでなつてゐる。然るに繪畫に於ては、此の蟲が中々多く畫かれて居り、その例を擧げても五指を

屈するに違もない。

殊に此の蟲を多く畫いてゐるのは渡邊畢山である。畢山には有名る『草蟲帖』があつて、草と蟲とを畫いた名作があるが、此の蠶螂となると、またいろ／＼の姿を畫いて居る。中で最も殘虐な處を畫いたのは双軒庵舊藏の『蠶螂捕蟬圖』である。あの大きな蟬を捕へて餌にしてゐる圖である。それから構圖は違うが、故速水御舟の遺作の中にも『鬪蟲圖』と題した作があり、蟬を捕へた處を畫いてゐる。

畢山の外には、竹田も此の蟲を畫いてゐる、『蓬窓幽興帖』中の一圖の如きは、將にその一例である。道安の瓜蟲圖も蠶螂であり、李迪の瓜蟲圖も亦蠶螂が配されてゐる。

だがその残忍な蠶螂も、時には大敵に襲はれてあへなき最期を遂げる。艾宣の『群鵲啄蟲圖』では、數羽の鵲の爲めに、一匹の蠶螂が嘴の的となつてゐる。因果報應とでもいふのであらう。

蠅の名畫

同じ昆蟲類でも、蝶とか、蜻蛉とかいふものになると、いくらも作がある。蠅となると極く少い。併し蠅といふ忌むべき蟲も、ウキリアム・ブレークの『蒼蠅の歌』のやうな名作を殘さしめてゐるばかりでなく、中々捨てられぬ處がある。

私はその蒼蠅の金屬性を帯びた光澤ある金綠色に興味をもち、硝子の箱へ入れて毎日眺めてゐた。金光青緑に交り、殊に陽光に對すると、何ともいへぬ美しい色彩を見せる。よく中世紀の風俗に見る、騎士の鎧姿、あゝした聯想さへ起さしめるのである。

だが、これは繪にはなるまいと思つてゐると、渡邊華山には立派にその作がある。日本人では恐らく華山位なものであらう。處が支那には、グツと古く有名な蠅の名畫の傳説がある。

『槃礴詩話』の中に、三國の時、吳の曹不與、吳王孫權のために屏風を畫いた。その時、誤つて筆を落しそこに一點出來たのを蠅にして畫いてしまった。孫權これを見、眞の蠅であると思ひ、手で彈いて見たが去らず、初めてそれが畫であつたのを知つたとある。

かうした話は日本の雪舟の爪先鼠などにも遣り、傳説の上では、同一系統のもの、雪舟の爪先鼠は更に戯曲の「祇園祭禮信仰記」例の金關寺の雪姫の條りにも應用されてゐる。書には弘法の擲筆がある。蠅一匹から生ずる傳説や口碑もばかにならない。

蚊の畫贊

蚊も繪にはなりかねる蟲である。俳味はあつて、蚊柱など一寸面白い題材ではあるが、畫となると問題

である。ところが、抱一には蚊の畫贊といふ珍しいものがある。一匹の蚊を大きく畫いて、これに贊して曰く

草木繁茂の地に、その形蚊の如くにして大さ蜻蛉に異らず、蚊の親と稱するものあり、翼よわく、嘴利からずして人に近かず、鳥獸の血を吸はず、故に人も亦之を惡まず、塞翁が馬、麒麟、猫に類せるものなり、されどその聲のふん／＼たるは、文人の中にも入べきものよと打笑ひてやみぬ。

これを蚊とんぼとなすものもあるが、抱一の畫くところは全く蚊である。

近ごろ和田三造氏、服部普白氏の請に應じて全紙に蚊と蚤を書いて双幅とした。普白氏更に西澤笛畝氏に乞うて、これに虱の揮毫を得、三幅對としたいと申入れたが、流石に蟲通の笛畝氏もこれには閉口して、まだ畫が出来ない。

虱

虱といへば、虱の文學に現はれたものは少くない。古く『古今著聞集』の中の柱の虱のやうな氣味の悪い話もあり、芥川龍之介氏にも虱の一篇がある。半風子といふのは、虱の字を見ると、虱といふ字の半分だからといふ、その命名親は誰かしらぬが、餘程の洒落れものである。

歌では良寛和尚の虱の話が有名である。

のみしらみおとたてなくむしならばわかふところはむさしののほら

きぬくの東しらみにかくはしは我がふる布のしらみなりけり

此の前歌、のちに「おとたて」を『音になく秋の』と直してゐる。

虱を千手観音と呼ぶに、蝨げぢを梶原といへり、さるは梶原が異名なりや、げぢくが異名なるや

これは也有の「百蟲譜」の一節、俳畫にはなりさうであるが、まだ繪には畫かれたのを見ない。

かうして人に忌み嫌はるゝ蟲も、藝術の世界から見ると、立派に存在の意義がある。そこに藝術の有難

さ、貴さがある。科學と藝術の融合とか、調和とかいふことも、かうした方面から活々したものと成つて

行くのであらう。



筆帝皇宗徽 (照參鳥るたれば現に畫繪) 圖仙水鳥

雪中白鷺圖



(繪畫に現はれたる花鳥参照)

傳徐熙筆

繪畫に現はれた鳥

繪畫に現はれた小鳥といふお話を申上げるに先立ちまして、一言お断り申上げて置きたいことは、このお話が十分に此の問題を盡くしてゐないこと、一口にいへば、研究のほんの一部に過ぎないこと、それから繪畫と申しましても、西洋畫には觸れず、東洋畫に局限されたといふ事です、尤も西洋畫に於ては、鳥を主題として畫くといふやうなことは極めて稀れでありますし、畫かれても種類が少いので、自然花鳥畫といふものが、東洋畫に限られてゐるやうな次第だからであります。

さて花鳥畫と申しますものは、唯今も申上げました通り、東洋獨特のものであります、西洋では、東洋のやうに此の方面が發達してゐません。靜物畫に鳥が畫かれる場合があつても、それは靜物で、活ける姿を畫いては居らぬのであります。然らば花鳥畫といふものは何時頃から初まり、どんな經路で今日の花鳥畫といふ形式にまで發達したかと申しますと、これには學者の間にもいろいろと意見があり、議論もありません、俄かに斷定することも出来ません。併しその經路を稽へますのに、花鳥畫は始めから花鳥畫として存在したのではなく、山水の一部や、人物の背景として鳥や植物、小獸、蟲類などが描かれたのが、漸

次花鳥畫としての獨自性を帯ぶるに至つたものゝやうに思はれるのであります。一般に行はれてゐる説に従ひますと、六朝の宋に顧景秀、劉胤祖が蟬雀の圖を畫いたなどは最も古く、それから、北齊の高孝紇は蒼鳥を畫き劉殺鬼が鬪雀を描き、唐の時代になつてから劉孝師が雀の動作を畫き、それが活けるが如くであつたと傳へられてゐます。兎に角、かうして花鳥畫の極く古い處を見ますと、雀のやうな人家近くに棲息してゐるものがよく畫かれ、漸次他の鳥に移つて行つたといふやうな経路を知ることが出来ます。唐の時代にはいろ／＼名家も輩出してゐますが、眞に花鳥畫の名手といふやうな人は少く、五代から北宋へかけて、初めて黄筌、徐灝といふ二大明星が出て花鳥畫大に興り、徽宗皇帝に到つて一層光輝を放つたことになつたのであります。徽宗皇帝の作として傳へられてゐます作品の中には、山水もあり花鳥もあり、山水の中にはよく人物も畫かれてゐますが、その本領としては矢張り花鳥で、その作は神品と稱せられて居ります。殊に帝は、その地位から鳥などを集める便宜もあつた爲めでせう、いろ／＼と變つた鳥などを集め、美術院の院生に寫さしめたり、自からもこれを描き、日常鳥に親んでゐた爲めに、その描寫は眞に迫つてゐるのであります。井上侯爵家の有名な「挑鳩圖」や、淺野侯爵家の重寶となつてゐる「鶉水仙圖」の如き、全く驚くべき精緻なもので、描かれた鶉や鳩が活けるが如くであります。斯く花鳥畫は宋の時代を中心の後代に及んでゐるのでありますが、それからは徐灝の子の徐崇嗣だの趙昌だの名家が出るし、元

の時代になりますと、錢舜舉や王若水が現はれ、明になると邊文進や呂紀などが、盛に名作を出すやうになりました。此の時代になりますと、花鳥畫家の取材の範圍も餘程廣くなつて居ります。日本でも、花鳥畫といふものは初めからあつたのでなく、繪卷物の背景などには美しく描かれたものがあり、中には鳥羽僧正の鳥獸戲畫卷のやうな神品もありますが、花鳥を眞に花鳥として扱つたのは雪舟あたりでありませう。全盛になつたのは、矢張り徳川時代になつてからであります。さてかうして、上代から今日に至るまで、所謂花鳥畫として、畫かれた鳥の種類はどの位あるかと申しますと、私の調べた處では凡そ六十種位で、一つ鳥が幾度も繰り返されて畫かれてゐるのが多いのであります。

どんな鳥が一番多く畫かれてゐるかと申しますと、多いのは鶴で、それから雀、雉などでありませう。雀は花鳥畫の源流とでも申しませうか、六朝の宋の時代に、既に竹に雀を配した作が傳へられ、「鬪雀圖」も有ります。次で、鶯も相當描かれてゐますが、最も多いのは、小鶯中鶯等白鶯であります。雞や雀の多いのは畫家がこれに接する機會が多かつたことが一つの原因でせう。鳩に就いても同様のことが言はれます。これと反對に野鳥を自然の棲息状態のまま畫いたものは比較的少く、矢張り飼ひ鳥として寫したものと方の多いのは自然の數でありませう。鳥と花を一つの固定した畫題とし、これを多くの畫家が踏襲した例は少くありません。例へば、「梅妻鶴子」と申す畫題は、陶淵明が鶴を飼ひ、梅を愛してゐて、梅は妻

であり、鶴は子であるというたことから、之れが書題となつてゐるのであります。「雞群一鶴」と題して雞頭花に鶴を配したもの、又「海鶴蟠桃」というて、桃に鶴を配したものもあります。これは共に長壽を保つといふ目出度い意味を含めた書題であります。舊幕時代に狩野家の人々が、將軍家や各大名などから命ぜられたり、依頼されたりしたのは、多くかうした藝術よりは、目出度いものが多かつたのであります。松と鶴とは大變色の配合がよいのでよく畫かれ、松の常磐の色に丹頂を配したものゝ如き、蓬萊山の故事から出てゐるのでせうが、鶴の巢籠りと題したものなどは、將に鶴と鶴（つと）と見誤つて畫いたものであります。

日本美術院の木村武山氏が、曾て鶴の巢籠りといふ作を發表したことがありますが、同じ巢籠りでも、これは飼はれた鶴の巢籠りでありますから無難です。その代り鶯の巢も大體形が同じといふことになりました。その後北海道釧路の奥で、丹頂の棲息地が発見されたといふ報告が出ましたので、それを武山氏に送つたことがあります。鶴は明治の初半頃までは東京にも棲息してゐたといふ記録があり、相當多く日本内地にも棲息して居りましたので、書家は皆これを鶴と見誤り、その通りに畫いたのでせう。鶴で思ひ出しますのは、橋本雅邦は、鶴が非常に巧みで、その體型なども、實物に則つてよく均衡が取れて居り、殊に鶴の耳を畫いたと云ふことが話題に上つて居りました。耳であるかどうかは存じませんが、兎に角耳のある處に白い羽毛のある點まで克明に畫いてありました。

鶴に次いで鶯も多く畫題に上ります。西本願寺の趙仲穆筆と稱せられる「雪中柳鶯圖」の如きは、實に素晴らしいもので、雪中の柳の上に七羽の鶯が、各々異つた姿態を見せて巧みに畫かれて居ります。鶯の畫題としては、この外に、蓮鶯、柳鶯、蘆鶯、一路功名、一路富貴、それから柳の上に三羽の鶯を描いた疎柳三思などゝいふのがあります。鶯は御承知の通り、性質は貪婪な鳥ですが、畫題としては大に優待されてゐます。なほ雪中白鶯、白梅に雪と共に畫かれた三白圖、或は鶯娘のやうな北國の雪女郎の聯想から來た構圖もあり、これは舞踊で有名なものですし、鳥鶯合戦のやうな白と黒の争ひを畫いたものもあります。これは「白縫物語」の中などにも取入れられて居ります。雞の圖も随分澤山あり、羅窓の雞といふやうな名高いものもあります。伊藤若冲は自から雞を飼つて研究したといふので、雞の作が多く残り、應擧の雞の物語も昔は小學校の讀本の中にまで入れられてよく知られて居ります。軍雞が輸入されてからは其の美しい羽毛の色彩と、雄勁な姿態とが、多くの書家に依つて描かれて居ります。

雀も非常に多く畫かれます。畫題としては普通の雀が多く、入内雀はあまり畫かれませんが、稻穂に雀は豊穰のシンボルとして、畫家が常に好んで畫いたものであり、竹に雀もよく調和してゐますし、仙臺侯の定紋として一般に知られてゐます。將軍家の繪のお手本などにも竹にはよく畫かれて、今でも何代將軍御眞筆といつた竹に雀の繪が残つて居ります。

雉も繪畫に扱はれる鳥としては多い方でせう。これは支那の畫の影響もありますが、又文學上から、雉や山鳥は重要なものとなつてゐます關係上、その傳説などを畫題としたものも見られ、一方では桃太郎傳説などに従つて、勇敢な鳥として持囃され、或は母性愛の權化として燒野の雉などになります。羽毛の彩が美しいので春の鳥として櫻に配せられたり早蕨の萌える野を背景に畫かれたりしてゐます。單山に溪澗野雉といふ傑作のあることは御存知でありませう。山鳥は雉子に比較すると數も少いやうですが、それでも中々多く繪になつてゐます。錦雞は支那の鳥丈けに、支那の繪にはよく現はれます。牡丹や海棠を背景とした眼の覺めるやうなものがあつてゐます。銀雞もそのさゞ波形の斑が面白いので好畫題となつてゐますし、白鷗も、決して錦雞に劣らず畫の世界を賑はして居ります。

鳩は土鳩、銀鳩、珠數掛鳩などよく畫かれます。平和の鳥といふやうな意味では最近使はれ始めたものです。鶯は梅に附屬してゐる觀があります。併し支那では鶯と異つた例の黃鳥が鶯と同様吟嘆の對照となつて居りますが、鶯ほど文學的情趣は深くないやうです。

鶉は春も秋も、立派な畫題になつてゐますが、矢張り秋の方がよく調和します。粟穗に鶉、秋草に鶉など一點一劃も加除を許さぬ位、殊に土佐光起はよくこれを畫きました。叭々鳥も支那の鳥で、日本には棲んで居らぬのでありますが、飼ひ鳥としては傳へられてゐるので、南畫家などは好んで畫きます。牧谿の雨

中叭々鳥のやうな立派な作もあります。鶉は支那や朝鮮に多く、日本にはほんの北九州の一部丈けにしか棲息してゐませんので、矢張り支那畫のもので、喜鶉と呼ばれて目出度いものにされてゐますので、數は中々多く畫かれます。梅の老樹に此の鳥を配して、梅花喜鶉など上品でよい畫題です。尾長は桃林などによく來る鳥ですが、壽帶鳥の雅名で梅の花などに配されます。燕は柳と蓮に多く、波に燕の作は、光琳に素晴らしいものがあり、狩野派の人々もよくこれを畫きます。燕の巢も時に畫かれますが、吊り巢が面白と思ひます。杜鵑は昔から文學方面の鳥で、詩歌俳句には數限りなく現はれて來ます。爲めに異名や雅も二十幾つとある位ですが、繪の方になると單調で、雲間の月に杜鵑の啼いて行く處が畫かれたり、花に配せられる時は、卵の花垣位のもので、郭公と杜鵑とは昔から一つに思はれてゐた位ですから、これを畫き分けたものなどあるわけはありません。

七面鳥を畫くことは最近の一つの流行でした。古い波斯の繪にはこれがありますが兎も角珍物で、日本では故平福百穂氏がこれを畫いて名聲を博しました。雁は東洋畫では極めて重要な位置を占めて居りますし、既に宋の初期にもその作が現はれてゐます。蘆雁と申しまして蘆に配したのが一番多くあります。種類としては眞雁、菱喰、白雁などが多いやうです。鴨は古く埃及の壁畫などにも見られますが、これも數多く、鶯鳥は支那の繪に多く、我が國では單山が三宅侯の爲めに描いたといふ双幅が有名です。秋草の下

に鶯鳥の居る圖で非常に謹嚴な作です。

近頃やかましい佛法僧は、徹山の子の森一鳳が既に畫いて居りますし、鶉は狩野元信も疾うの昔に繪にして居ります。頬白は近ごろの展覽會にこそよく現はれますが、昔の繪には少いやうです。鶉は昔は「ひえどり」と呼び藤原時代からこれを飼ふことも行はれ、著聞集などには面白い挿話が出てゐますが、繪にもお馴染の深い鳥で、花鳥畫では人氣ものゝ一つであります。

鷹は昔から中々よい作があります。中でも徽宗皇帝にこれが多く、若し世に傳へらるゝ徽宗皇帝の鷹が皆眞蹟だとしますと、皇帝も大した精力家といはねばなりません。鶯も最近ではその作が三四點見えますが、古畫には割合に少く、木兎は愛嬌のある鳥なのでよく現はれます。鶉は獨立して畫かれる場合が少く千鳥は狩野派のものにも、四條派のものにも澤山あり、殊に光琳はよくこれを描き、光琳の千鳥として、一つの型を作るやうになりました。現代のものでは故百穂氏が、久邇宮家が御襖に畫かれたものや、勝田蕉琴氏にもこれを畫いた大作があります。昔のものでは有名な山雪の千鳥の屏風など、殆んど驚異的傑作といふてよいでせう。

鶯は最近展覽會などの出品によく現はれます。昔は廣重の風景版畫に出る位、此の外、小禽では、鶉がよく畫かれ、これも常編が第一です。それから大瑠璃、小瑠璃が、羽色の美しい處から盛に描かれます。

全くあの瑠璃色の美しさは、植物に配して特殊の美しさを見せます。この外、啄木鳥、鴉、四十雀、山雀、小雀、日雀、海の鳥で鷗などはよく繪に畫かれますし、椋鳥などは花鳥畫としてはあまり畫かれてゐませんが、山水畫の中には、その群飛してゐる處がよく現はれます。以上申述べましたのは、ほんの思ひ出したまゝで、細かく調べあげましたなら、定めし面白い結果が得らるゝことであらうと思ひます。昭和五年九月鳥の會にて。



春 菜 畫 趣

「來客一味」と題した古畫がある。大根が一株畫いてある。宋あたりから明人の畫にもよく見える。趙州の處へ一僧が來たので、趙州が大根一本投げ出した。鎮州の大根である。客が來たから、一本御馳走する意味であらう。鎮州は大根の名産地である。由來此の「來客一味」が、立派な畫題となつて今日まで傳へられてゐるのである。

大根ばかりでない、我々が膳に上するところの蔬菜類も、畫趣深いのがいくらかもある。殊に春の蔬菜類を見ると、色彩にしても、形にしても、それ〴〵特殊の面白味があつて、畫興を咬るに十分である。古來いろ〴〵の人々によつてこれが畫に纏められて來た所以である。

獨 活

春の蔬菜を大別すると、根菜、葉菜、芽菜の三種となる。ことに若い芽を賞美するものが多く、獨活はその代表的のもともいへる。三つ葉、防風、蕨、ぜんまい、桜、皆若い芽や葉を賞美するのであるが、

獨活には芳ばしい香氣があり、その莖の若い時には、細かい鹿の皮の斑のやうな肌が、ほんのりと朱鷺色とせいろに染まり、若い芽の緑を僅かに點じてゐる色彩の清々しさ、吳春は曾てその蔬菜繪卷の中に畫いてゐるが如何にも面白い。故森田恒友も好んでこれを畫いた。芭蕉は

雪間よりうす紫の芽獨活かな

と吟じてゐるが、また好個の繪だ。

香をもつて掘返さるゝ芽獨活哉

これは來山の句、來山には、來山の天地がある。更に

忙しなき身は瘦せにけり作り獨活

といふ嵐雪の句には、戲曲的の匂ひがする。

蕨

蕨を見ると、直ちに四條派あたりの達者な繪が目の前に浮ぶ。緑の一刷毛、さつと引いたその土坡の上に、すく〴〵と伸びた蕨の形の面白さ、如何にも春らしい。この蕨が食用に供せられたのは随分古いことで、伯夷叔齊が周の粟を食まずと、世にすねて首陽の山へ入り、口腹を辛うじて満たしてゐたのが、此の

蕨であつた。日本でも春の野山に分け入つて蕨を折るといふことは、王朝時代から春の行樂の一つとして數へられて來たもので、

蕨生ふるやたの廣野にうちむれて折りくらしつゝかへる里びと

曾根好忠

など見ると、その面影が偲ばれるし、その楽しさうな處を畫いたものは、大和繪などにも屢々見受ける處である。蒔繪にもよく蕨が畫かれ、蕨手といふ工藝美術の上の言葉まである。

蕨を味ふには、その上部の青い色を失はぬやうに調理しなければならぬ。椀に盛られた汁、その蓋を取ると、そこに蕨の緑が一寸點せられてゐるといふやうな趣味は、日本料理でなくては求め得られない。

春先き、蕨を萌えさせる爲め、田家では山燒きといふことをする。枯葉落葉を集めて山を燒く、煙は雜木林の間を夢のやうに縫うて消えてゆく。

それから間もなく、蕨が柔かい土を擽げて萌え出すのである。

防風

防風も濱の匂ひや酒ひとつ

巢光

早春の交、茅ヶ崎から鶴沼邊の海岸を散歩すると、細かい砂の間から、可愛らしい防風が顔を出してゐる。

一莖を摘んで、其の色彩を見る。光澤の美しい緑の葉は、細かいながらも鋭い鋸齒を刻み、その葉の

もとから莖へかけて、臘脂を溶いたやうな色彩がゆるくほんのりと流れ込んでゐる。摘んで匂ひを嗅ぐと磯の香が滲み込んでゐる、何となく嬉しい氣分になる。

海邊をそゞろ歩きして、これを摘むのもまた早春行樂の一つ、時には美しい貝など手に入り、興趣も一だんと深くなる。

防風擁る浪の下りや朝じめり

五明

その臘脂色をしてゐるところから、此の春菜一名を珊瑚菜といふ。その藝術的な名のつけ方がまた嬉しい。

茗荷

茗荷も面白い。江戸落語に「茗荷屋」といふ話がある。よくない宿屋の主人が、大金持た旅の客と見てその金包みを置忘れさせやうと、頻りに茗荷を食べさせる。すると客は忘れるものもあらうに、宿賃を支拂ふことを忘れて立つてしまつたといふ他愛のない筋。

茗荷を食べると物を忘れる、一寸これが面白い。その出所はかうである。昔、釋迦のお弟子に般特とい

ふ人があつた。物をよく忘れて、自分の名まで忘れてしまふ。ある人が氣の毒がつて、その名を書いた札を首にかけてやつた。すると今度はその札をかけてゐることを忘れてしまつた。その般特が死んだのち、墓から一種の草が萌え出した。大方その名を荷つて歩くのであらうと茗荷と名付けられたといふ。

春の蔬菜の中で、愛らしくもあり、趣味もある。殊に形がよいので、畫趣が極めて豊かであり、紋どころにまで應用されてゐる。抱き茗荷など、實にうまい。その色彩を見ても白色に曙色と利休茶をにじませたやうなのが食欲を唆らずには置かない。香氣も一しほである。香氣といへば、何故か蛇が此の香氣を嫌つて近付かぬといふ。蛇ばかりではない、小蟲は何によらず茗荷には近付かないと言ひ傳へられてゐる。但しこれは早春に限つた話ではない。

出る時はされどわすれず茗荷だけ

關 更

落 の た う

元舟の水汲むうらや落のたう

太 祇

落のたうも芳ばしい香氣で食欲を唆るが、見ても中々面白い。はじめは丸くむつくりと土をもたげ、だん／＼大きくなつて白い花をつける。その花が至つて清楚、これを傷けまいと幾重にも幾重にも苞で包んで土から出る。

早春、田圃みちなどを歩いて、思はずこれに出逢ふことがある、又なく嬉しいものである。よく隅田川から綾瀬の邊にかけ、流れに臨んだ農家の裏手などに、柳の猫が銀色の顔を出してゐる下に、むく／＼と落のたうが首をもたげて居り、その傍に舟が乗り捨てたまゝ繋いであるなど、太祇の句そつくりの情趣を味はせる。

雪の下の落のたうを掘るあか土の匂ひ高しもその雪の上に

ふきのたう鉢にうつして吾が室の明るみに置き見れば樂しも

これは平福百穂の歌、その繪をそのまゝ見る感じである。

落は葉が出てしまつても一寸面白いが、畫趣の豊かなのは、此の落のたうに限る。

嵐 雪

落のたうはほけて人の眺めかな

私はこれを南蠻の平鉢に植ゑたのを、机の前に並べ、一鉢の福壽草と共に朝な朝な眺めてゐる。

これを繪にする人も少くない。應擧には丹頂の下にこれを描いた面白い作のあつたことを記臆する。

いまの人でよく畫くのは川端龍子氏である。色紙位の大きさのものへ、瀟洒な筆で畫くと中々面白いものが出来る。

筍

八二

モンタヌスの『日本周遊記』を見ると、日本人は竹を食ふと驚いてゐる。筍を食べてゐるのを見て、肝を潰したのである。實際筍を賞美することの深い點で、日本人と支那人位のもは少いのであらう。日本人は殊に筍が好きである。

繪にもまたよく畫かれる。それは土を破つて出る勇ましい姿が、一種の快感を咬るからで、時に龍にたとへたりする。良寛の床板を剥ぐ話も有名だが、觀山の絶筆の筍を見ると、藝術家の生涯に敬虔な感じをも起させる。

筍に就ては、なほ二十四孝の孟宗の話を思ひ起させる。

だが早春の筍は、まだ土中にあるのを掘り出すので、皮の色も白い中である。筍の味は將に此の時にあるので、掘り出した筍を轉がしたまゝ無雜作に畫くのも興味がある。

白菜も美しい。葱も畫趣が深い。我々はこれを口にする前に、しみぐゝとこの形や色のもつ興味を頷へたいと思ふ。

蔬菜と果實の藝術

一

蔬菜と果實が、人の食物に擇ばれたのは、抑も何時の頃からであらう。更にこれを卓に盛り、盆に收め鉢に入れ、その自からなる色彩の交錯、形状の變化を藝術化したのは何人の創意であらう、『食物本草』や『古今醫統』や、『野菜傳録』や、『汝南圃史』や、その色を傳へ形を述べ、味を叙するに於ては遺憾なしとするも、誰がこれに不朽の藝術的價值を賦與し、審美的考察を加へたか。私は今年（大正十五年）の春陽會の展覽會に、此の果實や蔬菜を畫き、これから藝術的生命を捉へやうとした作品の意外に多いのを見て、不圖かうした感じが起つた。

有體にいへば、私は春陽會の一種の型となつたやうに見られて居る靜物畫の大部分は、あまりに同じ型のもので、聊か鼻についた感じを懷いてゐるものである。あの黛緒色のバック、極り切つた支那籠、これに盛られた各種の果實や蔬菜、時に花物、それは私達を迎へるのに餘りに多過ぎる。餘りに同型

八三

過ぎる。併しながら私一個の趣味や嗜好から、その選ばれた物象まで貶すやうな偏狭な考へは持ちたくない。そこで、かうした考へを少しでも抱いた罪亡ぼしに、蔬菜や果物の藝術的供養を營んで見たいと思ふ。

二

その作品の中で、最も多いと思はれたのは、石榴である。小穴隆一氏も描いてゐる。椿貞雄氏も盛り込んで居る。その他にも澤山あつた。小穴氏の作は殊に私の好きな繪の一つである。

畫かれた小穴氏の石榴は、普通に大實と稱せられるもの、椿氏のもやゝそれに近い、黄色の地に緑、紅、いろ／＼の色彩を滲ませて、これが割れると中にある幾百十の漿果は、水晶の如くルビーの如く、瑤の如くサファイアのやうである。露にもまがふ白色のものに水晶といふ名のつけられてゐるものもある。その水晶の上に、一點の紅をも潮したのは限りなく美しい。

井梧搖落一天秋、笑口初開玳瑁榴、玉睡隨風明月葉、瓠犀帶露水晶浮。

とはこれ翁榴庵が『花曆百詠』の中の一絶、前漢孝武帝の時、匈奴に使した張騫が、異境に留ること三年、歸途安石から齎らし歸つた榴花は、夏苑に焰を吐いて王安石の所謂『萬綠叢中紅一點』の妙句を捻出せしめ、秋、此の玉を綴つて更に美を加へて居る。此の展覽會の石榴畫中、何人の作がよく、這般の消息

を傳へ、此の畫境を傳へ得たであらうか。

三

山岸信一氏の『靜物』には、蓮根と慈姑が畫かれてゐた。蓮は古くからある東洋の植物で、その花は既に『淨友』として、繪畫に現はれてゐること幾百年といふを知らず、蓮根またよく南畫家によつて畫かるゝ處、その趣きは外形にもあるが、割つた中の形にもある。藤原豐成の女、中將姫は、その細い糸を取つて阿彌陀淨土の變相を織り込み、節無し竹を軸として淨土曼荼羅を作つたといふ。唯見れば平凡、決してその神祕を示さず、中に此の祕密を藏して象徴的氣分を漂はす、山岸氏は更に慈姑をこれに配してゐる。慈姑とは誰がつけた名であらう、その味甘くして乳の如く、子を慈む姑の如しといふ所から、此處に此の二字が擇まれた。上部の綠皮は、恰も波斯古陶の綠釉の如く、牙のやうな芽も上代の出土器などを思はせる。山岸氏がかうした方面に根據があつて、此の二物を配したかどうかは知らない。併し偶然としても二物の配合に言外の妙趣を感じるものである。

四

長谷川昇氏の美しい裸體畫の直ぐお隣りに、川端信一氏の『葡萄と柿』がある。葡萄は横ざまに房を見せ、柿は紅の頬を集めて、とまり木に押合ふ小鳥のやうに並んでゐる。

私は此の一房の葡萄を見ると、直ぐ島崎藤村氏の

こゝろなき歌のしらべは

一房の葡萄のごとし

なさけある手にも摘まれて

あたたかき酒となるらむ

の初句を思ふ。なさけある手に摘まれて、カンヴァスの上に畫かるゝ時、私の頭には不圖此の紫玉の房が、遠い遠いカスピ海の沿岸に野生してゐた當時を思ひ、これを搾つて葡萄酒を醸した二千年前のギリシヤ文明を偲び、更にこれを象徴する酒神バツカスを想ふ。

畫箋布帛の上に葡萄を畫いた人としては、僧日觀がある。カンヴァスの上にこれを畫いて、奈邊までその氣分を表はし得たか。王室の詩に曰く、

珍菓先知風味長、水精顆々染秋種、願支架引龍鬚得、翠帳成陰座既涼。

柿は朱果といふ。形には長さあり方なるあり圓きあり扁なるあり、味に甘きあり、澁きあり、然も光澤

美しく目覺むるばかりの紅を見せるのは、秋の果實として殊に興味を惹く。川端氏の作は、禪師丸といふ種類に近い。併しカンヴァスの上では明瞭にはわからない。

五

椿貞雄氏の作中で、面白いのは蓮根に添へて畫いてゐる冬瓜である。

食べて見れば、さのみ著しい特長もないが扱つて何處にか捨てられぬ味があり、これを生のまゝ眺めてみると、遠い六朝か五代ごろの古銅器に、青錆の紋を見るやうであり、更に手を觸れると、古い青磁か均窯の瓶でも、撫でるやうな感じがする。

曾て岸田劉生氏も好んでこれを畫き、葡萄を添へたと覺えてゐる。そのカンヴァスに畫いての面白味は全く此の色彩にある。此の形にある。悟つたやうな、悟り切れぬやうな處に無限の味があつて、これを眺めて居ると禪の問答でもするやうな氣分になるのである。

つむぢにも曾子のなりや大多瓜

これは沾涼の句である。かうした氣持は、油繪の俳畫だ。椿氏のこれを扱つた心持ちも、矢帳りこんなことであらう。

此の冬瓜、元は東印度の産で、葡萄や胡瓜とは違つて、支那の中部を経て日本に渡つて来た、『東瓜』『地芝』『小芝』『毛氈瓜』といふのは、皆この冬瓜のことである。毛氈を『かも』といふので、『かもうり』といふ古い名も残つて居る。

六

枇杷の靜物は横堀角次郎氏の作である。畫かれたのは、田中枇杷か、茂木枇杷か、はつきりしてゐない。田中枇杷は房州で田中芳男先生が栽培して工夫したもの、茂木枇杷は長崎の唐人部屋から傳來したといふ、一種の南蠻情緒が手傳つてゐる。

今から七八十年前のこと、長崎に出入する黒船の數々、それには通事が絶えず通つて物事を便じて居た、その通事が集まつて一つの部落をなしてゐたのが茂木村である。或る年の夏、通事の一人が、阿蘭陀の船から珍らしく大きな枇杷を貰つて来た。何處の枇杷だと聞くと、たゞ唐のものだといふ、肉漿を食べて無心にその種子を地に播いた。

播いた種には生命がある、やがて芽を出し葉を展べ、幾年かの後には立派に花を開き、實を結ぶやうになつた、果は矢張り大きかつた。此の枇杷は忽ち茂木村全部に分ち栽ゑられ、培はれ育てられて、今では

九州隨一の枇杷の本場となつてしまつた。横堀氏の作を見て、こんなエピソードを思ひ出した。見る人がたゞあのまゝで看過して行くと否とは私には關りがない。

私には何だか、横堀氏が此の茂木枇杷のやうに眼に残つてゐる。併し今からそれが田中か茂木か判断する由もない。

田中枇杷は圓い、茂木枇杷は長い。

枇杷といふ文字は、元來樂器の琵琶から來てゐる、それは實ではない、葉のことである、だが茂木枇杷を見ると實まで多少琵琶に似てゐる。

こんな事は元より作者に關係はない。

花鳥と意匠

毎年初春になると、お定まりの松竹梅や鶴龜が盛に意匠に現はれて来る。松上の鶴とか水邊の龜とか、それに日の出を配するのもあるれば、梅や竹を添へるものもある。お目出度づくめの意匠である。

だが東洋畫には、昔から花鳥畫といふ特別のものがあつて、植物に鳥とか、蟲とか小さい哺乳動物などを配して不即不離の關係にしてしまつてゐる。たとへば、松に鶴、梅に鶯、竹に雀、蘆に雁といふやうな類である。これは誠によい配合を見附けたもので、容易にこのコンビから離してしまうことが出来ない。だが、どうしてかうした對照が出来たか、これを自然の状態から見て、果して當つてゐるかどうかを調べて見ると、中々面白い問題が湧いて来る。先づ鶴の場合を見やう。

鶴に植物を配する場合は松が多いこと、既に一般の知る通りである。松上の鶴、松鶴遐齡、鶴の巢籠、いろ／＼ある。何故に鶴に松が配せられたか、これは古い蓬萊の構圖などに、松竹梅の歳寒三友に鶴や龜

が添へられて、目出度いものづくめにしたこと勿論であるが、一つには色彩の上から來てゐることも争はれない。鶴は主として丹頂で、その雪白的な羽毛翼の一部丈けが黒く、朱色の肉冠、淡綠色の嘴、黝黑色の脚、これが緑の松に配せられると、何ともいへぬ美しい配色となる。

だが、これを自然の状態から見ると大分違ふ。第一丹頂は決して松の梢などに巢を作つたりすることはない。従つて繪にあるやうに老松の幹の上に、雌雄の丹頂が、とまつてゐることなどあり得ない。庭園に飼はれた鶴なら、松の下あたりに晝かれても、大した誤りはないとしても、梢にとまつたりすることは決してない。これは丹頂によく似たこゝのと鶴が松の梢高く巢を營むので、これが誤り晝かれたわけで、但馬出石の鶴山などを見、あの鶴を鶴と思ひ込んで晝いたわけであらう。

松の外に蘆の間に鶴を晝く場合がある。これは極めて自然で、蘆出鶴といふ言葉がある位故間違ひはなく、流れを見せ、蘆を晝き、これに丹頂を配するとすれば、立派に繪になつてゐるし、『萬葉集』などを繙いても、かうした情景がよく歌はれて居り、實際の感じともびつたり合つてゐるわけである。

次には梅に鶴を配する場合である。これも同じやうに蓬萊山の一部を抜き出したやうにも思へるが、主として林和靖の故事などから來てゐる。即ち林和靖は、よく鶴を愛して之れを飼ひ、これを伴つて梅林を逍遙したりした。そして人に語つていふには、梅は妻であり鶴は子であると。晝題の「梅妻鶴子」はこれ

から出てゐる。實際、梅に鶴を配したのは、面白いもので、故平福百穂氏の絶筆は、實に此の梅と鶴であつた。また、竹林に鶴を畫く場合もある「竹林白鶴」の題である。曾て荒木十畝氏がこれを畫いて出品したことがある。これは松の場合と同じやうに、竹の緑に鶴の雪白を對照せしめたもの、矢張自然の寫生でなく、庭園などに飼養せられた時と見るべきである。

變つた對照配合としては『海鶴蟠桃』の如きものがある。これは海の波に旭日を配し、岩上に桃が根を張り、枝には既に實が熟してゐるし、そこへ鶴が飛んでゐる。これは旭日と海で勢ひの盛なことを現はしその上に三千年の齡を延ぶる桃と、千年の壽を保つといふ鶴を配した慾の深いもの、拵らへもので一向面白くないが、それでも昔は大名などがよく繪師にこれを畫かせたものである。

二

早春の鳥としては、鶯が直ぐに胸に浮かぶ。鶯には矢張り梅が付きもので、これこそ誠に車の兩輪の如き關係である。實際、野梅や紅梅が咲いてゐる頃、鶯が訪れて来て、枝から枝へ飛び交ふ姿を見ると、全く繪畫的感興に浸らさせられる。此の梅に鶯ばかりは繪そらごとではなく、全く自然のままを繪にしたものである。即ち鶯は夏は深山にあつて繁殖を営み、冬から早春にかけて、丁度梅の花の咲くころ人里近く

に出て来る。それはその頃になると、深山に餌が乏しくなるから、人里近くに来るので、鶯は殊に梅の幹の間に潜む蟲の蛹など喜んで食べるし、その大好きな梅の蟲は人里でないと求め得られないからである。

それ故、一方では、梅の木に取つては大害を爲す蟲類を早春の季節で食べてくれるので此の上もない梅の保護者である。近來、鶯の保護が嚴重になつて、飼ひ鳥でも届出するやうになつたのは、鳥類保護上から見て嬉しいことである。處で面白いのは、此の鶯が繪にかゝれる場合である。それは自然のものよりグツと形を細く粹な形に描かれ、色彩も淡墨の中に緑を流したやうな、所謂鶯色に畫かれるのである。併し、自然の鶯は、決して繪のやうに美しいものではない。尤も近頃は鶯の畫き方も、餘程寫生的になつて自然に近い色や姿を畫くものもあるが、昔の四條圓山あたりの畫を見ると、鶯よりは目白に近い色彩になつてゐる。それは丁度、鶯が梅の木にやつて来る頃、目白も現はれて、梅の木にもとまれば、赤松の幹の薄い皮などを鋭い嘴で剥がしながら、中に潜む蟲を啄んだりするので、自然目白の色が鶯にまで滲み込んだのではあるまいかと思はれる。

文學的方面から見ると、例の鶯宿梅の故事などが、如何にも美しい畫題となつてゐるので爲恭や光起をはじめ、いろ／＼の人に依つて畫かれるのである。

梅の外に鶯に添へられる植物は笹である。鶯は、その啼きはじめを「さゝなき」といふ位で、鶯が里へ

やつて来る頃、笹の葉は周囲が黄色く枯れかゝつて来る、さうした時分、枝から枝へ飛びかひ、或はその笹の間などに分け入つて冬籠りしかけてゐる蟲を漁つたりする、その有様をそのまま「早春」などといふ書題にして描かれる。そのころはまた、野薔薇の實が眞赤に色付いて、枝を飾つたり、さるとりいはら莢の實が珊瑚のやうに色付いたりしてゐる。かうした中に鶯を點出した作に、横山大觀氏の「早春」があり、川合玉堂氏の「四つ目垣」がある。

それから抱一あたりの作には、時々柳の枝に鶯をとまらせたのがある。正月の床の間に、よく松柳梅を松竹梅にかへて生けることがあるので、その縁喜を狙つて柳に鶯を配したのである。

飼ひ鳥としての鶯の畫かれることも多い。鶯の飼養家は、籠桶に非常に金をかける、外側を素晴らしい高蒔繪にしたりすることもある。その調度の美しさ、これに梅の枝を二三配したりした洒落れた作を眞に見たことがある。是眞といへば、よほどの洒落れもので、誰の所藏であつたか、大きな伊勢蝦の鬚の上に鶯をとまらせたのがあつた。飛んだ洒落である。

三

鶯もよく繪畫や模様には現はれて来る。鶯には澤山の種類があるが、普通白鶯と呼ばれてゐるのは、大鶯

中鶯、小鶯で、その中でも小鶯が一番多く畫かれ、次いで中鶯、大鶯である。白鶯の外では、五位鶯、青鶯などが現れる。白鶯の三種の區別は、専門的にいへば細くなるが、大鶯はその名の通り、白鶯の中で一番本形であり、中鶯はそれに次ぎ、小鶯が一番小さく、そして小鶯に限り頭に二本の冠毛があり、冬でも見られ、足も黒と黄の部分がある。大鶯や中鶯は冬は見られない。日比谷公園前のお濠や、赤坂見附の辨慶橋附近によく見かけるのは小鶯で、小鶯は前にも記した通り、脚にも特徴がある。即ち脚は黒く、指丈けが黄色であり、中鶯の脚は全部が黒い。それから、白鶯には義毛といつて美しい飾毛があるが、これも小鶯が一番綺麗である。

さて鶯の繪にかかれる場合は、柳か蓮に配せられるのが一番多い。柳鶯圖、蓮鶯圖などといふ、殊に雪中柳鶯は美しい圖で、これには西本願寺に傳趙仲穆の傑作があつて有名である。これはいふまでもなく小鶯で、雪中に大鶯や中鶯を畫くと嘘になる。何故かといへば、中鶯や大鶯は冬になると、南洋方面へ渡つてゐるからである。柳鶯の場合は雪中が多く、これに對し、夏は蓮鶯が主に畫かれる。

畫題にはまた「一路功名」といふのがある。鶯は路に通ずる處からして、かうした畫題が出来たわけである。狩野家あたりの鶯の描き方は、絹や紙の地の白いのを利用し、その周囲丈けを淡墨で隈取る、即ち片刷毛隈描きといふのがそれで、これに破墨で蓮の葉などを描く、秋から冬にかけては、蘆鶯がある。蘆

の葉が風に戦ぎ、花が穂となつて揺れる處、白鷺が飛んでゐる。郊外などによく見る風情で、調和もよい。雪舟にもかうした作があるし、探幽や常信にもある。光琳派の鷺の描き方は中々線をよく利かせて面白く、白鷺の外では五位鷺が面白く、これは第一、色彩に特色があるのであるが、東洋畫の特長として、墨色を見せ、筆力を現はすには五位鷺が適してゐるから、南畫にも、北畫にもよくこれが現はれて来る。

五位鷺の名は、その昔、醍醐天皇の御宇、帝、神泉苑に行幸あらせられた時、勅命によつて鷺が御前にとまつたので、五位を賜はつたといふ傳説があり、大和繪には面白い題材である。五位鷺の中にも、葎五位、みぞ五位、さんかの五位など、いろいろあるが、普通の五位鷺が一番面白く、昔から傑作と稱せられるものも少くない。近衛公爵家にある黙庵の五位鷺は殊に有名で、黙庵は牧谿の再來とまでいはれる人であるが、その作はあまり多くない。それは中年にして支那に行つてしまひ、作をあまり残さなかつたのであるが、此の作は實に素晴らしい。即ち五位鷺が樹に倚つて、流れの魚を狙つてゐるのであるが、樹は柳らしく、同じ柳にしても白鷺の場合は冬の葉のない柳が多く、五位鷺の場合は葉のある夏の柳で、これもよく季節を現はしてゐる。青鷺は夏の料理の尤物、鷺料理に使はれる鷺は青鷺であるから、植物を配せられる場合などより、儀式などに畫かれることが多い。

四

霞立つ陽春の候となると、雲雀が先づ大空に名乗りをあげる。その頃となると、青麥が畑の上に緑の線を描き、その間に菜の花が黄金色に咲き出す。青空と雲雀、これは一面春を代表する最も美しい對照である。そこで雲雀にはよく青麥などが畫かれ、菜の花にもよく添へられたりする。住吉内記の筆に、この青麥の穂の出かかつた處に、雲雀の鳴いてゐる作があるが如何にも長閑であり、川端龍子氏には、クローバーの咲く中に雲雀の降りてゐる、『雲雀野』といふよい作のあつたことを記憶する。

雲雀のことを一名告天子と呼ぶ。告天子は雲雀ではないといふ説もあるが、支那人は告天子と呼んで、丈けの高い籠で飼ひならす。雲雀を飼ふ技術は、日本人より支那人の方が巧みであつたやうである。春の鳥では、又燕も逸することは出来ない。燕に對してよく畫かれる植物は柳である。柳と燕は、誠によい對照で、昔から切つても切れぬ縁が繋がれてゐる。時に春雨が糸を引いたりする。

さて燕はいふまでもなく、春先に南洋の常夏の國から遙々と日本の方へ渡つて来て一夏を過ごし、繁殖を営み、秋になると雛を伴つて再び暖かい南洋へ旅立つてしまふ。その飛ぶ速力は素晴らしいものであるが決して全速力を出すものでなく、僅か一時間に三十六哩位しか出さない。けれども飛翔力は一時間優に百

六十哩も飛ぶ丈けの力があるのである。

九八

夏も盛りとなると、畫題には蓮燕が出て来る。柳燕蓮燕と双幅にしたものなどよく見る處、更に波の上にも燕を飛ばせるのもよく見る。これは渡り鳥といふことを象徴する意味から見ても面白い。

連雀は松の實を好むので、松と連雀は昔からよく畫かれてゐる。次は桃に尾長鳥である。大和鵲とも呼ばれて、白と青と黒の三色が程よく羽毛を彩つてゐるのが甚だ美しい。關東地方には殊に此の鳥が多いので、關東尾長の名さへある。そして桃の花の咲くころ、此の鳥が群がつて來るので、それが中々面白い。桃の花の蕊を啄むので、桃の栽培に對しては非常な害鳥で、埼玉縣の越ヶ谷附近では、桃林を荒されるので、特に許可を受けてこれを驅逐してゐる位であるが、桃の花との對照は美しいので、繪にはもつて來いである。尾長鳥の種類で、羽毛の一層美しいのは壽帶鳥と呼ばれてゐるし、壽帶鳥は木蘭や、玉蘭にとまらせて畫かれたりする。これも自然の寫生から來てゐるのである。

櫻の咲く頃は、小禽では小瑠璃が來る。小瑠璃のあの美しい羽毛の色は、枝垂櫻などにはよく調和する。雉子や山鳥もどちらかといへば春が一番よく調和し、山櫻咲く下に雌雄の雉子など畫いた作は非常に多い。阜山の「溪澗野雉」は山藤の咲いてゐる下に、雉子を畫いてゐるが、これは植物と動物との色と形との調和が、何ともいへぬ美しさを感じしめる。山鳥の「おろのはつ尾」は古い文學上の傳説だが、繪に

しても面白い。

五

水禽では雁も鴨も、鴛鴦もよく繪畫に現はれる。殊に雁は蘆と共に畫いたものが大部分である。所謂「蘆雁」で、雁がシベリヤ方面から列を爲して渡つて來る頃は、丁度晩秋で、蘆が既に穂に出て、綿のやうに白くなり、葉も半ば枯れかけてゐる。これを水墨で畫くと如何にもよく筆の勢ひを現はすことが出来るので、東洋畫としては、蘭竹梅菊の四君子に次いで多く畫かれるものである。形から見ても雁は面白く頭の邊から、細い首、雨覆から翼にかけてあの斑點が、また此の鳥を面白く見せてゐる。

此の蘆雁を畫くもの、南畫北畫を論ぜず、その數も算へ盡せぬ程である。中でも支那の惠崇は蘆雁をよくし、「君臺觀左右帳記」にも特に蘆雁を得意とするやうに記してゐる。牧谿にも蘆雁の名作があり、呂紀や林良にも素晴らしいものがある。日本の人では、雪舟がこれを得意とする。水邊にある雁でも、飛んでゐる處でも、あの雄勁な筆でよく寫してゐる。それから細川侯爵家にある宮本二天の蘆雁の屏風一雙が素敵である。これは半双が白雁、半双が眞雁で、蘆の筆致の優れてゐるのは勿論のこと、雁が十數羽、皆よく躍動してゐる。唯に蘆と雁のみ畫たものばかりでなく、更に月を畫いたものも少くない。「月下飛雁」だの

九九

『月下蘆雁』だのといろ／＼の書題をつけてゐる。

風景的に蘆雁を扱つたものに瀟湘入景の中の『平沙落雁』がある。これは昔から玉潤と牧谿のものか聞えてゐるが、殊に牧谿の平沙落雁は東山御物というて、足利義政の愛玩したものである。人物を配したもので、蘇武の雁信がよく道釋人物として扱はれる。蘇武匈奴に使い、歸らざること十九年、鬢髮悉く霜を頂き、肉衰え骨枯れ、然もなほ故國を忘れず雁の足に書信を託すといふ有名な故事、俗にいふ『雁のたより』の起りである。日本のものでは、源義家の雁行の亂るゝを見て、伏兵を知つたといふ史實、雁行を見て身の不幸を喩つ曾我物語の一節など好個の書題である。

その種類から見ると、眞雁が一番多く、それから菱喰ひと俗にいふ鴻雁、さかつら雁、それから白雁がある。白雁は動物學上からいへば病的のものだが、昔は珍らしいものとせられ、王晋卿には白雁を畫いた有名な『三白』の作もある。

昔は東京の空にも、雁の列を爲して飛んだのが見られたものだが、今は少くなつて、四十里も離れないと見ることが出来ない。時に埼玉縣の二合半あたりで見られることもあるが、昔のやうに多くはない。入景を選べば、必らず落雁が入るほど畫趣の多いものであるのに東京附近では廣重の名所繪にその面影を偲ぶ位である。そこへ行くと、鴨の方は到る處で見られるし、東京でも少し大きな池やお濠には必らず鴨が浮い

てゐる。蘆雁のやうに定まつた植物の添景が無い丈けに、取材も自由である。

鴛鴦は鴨の一種で、羽色の美しい處から盛に畫かれるが、冬の鳥として植物の配せられる種類も極つてゐる。有名な作としては若沖の雪中鴛鴦圖があり、これには紅梅を配してある。

番ひ離れぬといふ傳説から、結婚の祝ひなどにこの鳥の畫かれる事の多いのは、既に人の知る處であらう。あの紅を帯びた嘴の美しさ、公孫樹形した思ひ羽の雅みやかさ、雄の冠毛の優しさ、その陰には必らず雌が居て、決して離れることがない。雄が死んだため、雌が歎き悲しんで、直ぐにあとを逐つて死んだといふやうな傳説は諸國に残つてゐる。さうしたことが、自然男女相愛のシンボルとなつたりして、文學の上に異彩を放つたり、繪畫の上で美しさを増してゐたりするのである。

畫梅雜筆

墨梅

畫梅に就いては、古來いろ／＼の書にあらはれてゐるが、中でもよく引用されるのは、中山高陽の『畫譚雜助』の一節である。曰く、

畫梅も、唐の比までは、さいしきなり、墨梅の祖は花光和尚なり、衡州花光山に住し禪意識學ともに深き人なり、方丈のかたはしに梅を多くうゑ、花の時は牀をうつし吟哦す、ある夕、月下の疎影をみてはじめて墨梅をゑがく、うす墨にて花を點せるはかげなればなり、世に花光梅とてたからとす。楊補之は、圈法とて花を一筆にまるくゑがく、氣條も補之妙をつくす、此時墨梅名家六人ありしが、花光補之の二人を宗とす。湯叔雅は倒暈とて、地をくまどり、花を白からしむ。僧惠洪は、早子膠にて生絹扇面へ畫き、月前燈下に映じ、宛然たる梅影なりとぞ。

と月下の疎影を見て墨梅を畫いたといふ説は、たとへ『明月や疊にうつる松の影』式の拵らへごとか知れぬが面白い。花光和尚の畫に對しては、まだ眞蹟といふものに接したことはないが、楊補之と傳へられる

ものは、これまで二三回見たことがある。

その第一には、仙臺侯伊達家の舊藏であつた、嵯呀たる老幹を横たへ、前方更に一幹直立して雄勁なる枝を射出す。黙々として苔衣をつけてゐる、蓋し梅の作中逸すべからざるものである。

楊補之の作では、これが深い肝銘の作でもあるが、劉雪湖となると作も相應にある。私の記憶してゐるものでは、同じ伊達家の舊藏で中に月澗が達磨を描き、左右に雪湖が梅を畫いた三福對、殊に左の墨梅が素暗しく、これを比較して見ると、雪湖の方に餘程寫實味が加はつて來てゐる。それから、前田侯爵家にあつた墨梅、柳澤伯爵家にあつたもの、なほ島津家にも一幅あつた。何れも墨梅として中々味のあるものであつた。

畫かれた梅

かうした人々に依つて畫かれた梅は、品種からいふと野梅が多い。野梅の特長は、幹が古色を帯び、枝の出方が如何にも雄勁で、若い枝など天を衝くかと思はれるばかりの鋭さをもつてゐる。そこに雪白の花を點ずる處が面白いので、如何に老樹でも、櫻では梅ほどの鋭さがない。

それから花はいふまでもなく雪白の單瓣、萼は褐色、香氣は極めて高いのを最上とする。だが野梅の特

性として、若い枝は何處までも直線であるが、老幹となると曲線が勝つて来る。臥龍梅といふやうな一つの型が出来て来るのも此の種で、老幹が龍の如く地を這ふ、そして白緑の苔の衣に蔽はれる。兆殿司の墨梅は老幹を空洞にしてその前に若い枝を一本豪膽に直立させてゐるが、一つの觀かたである。

日本では、此の野梅は何處でも見られるが、甲州野梅と稱せられるものが一番雅致がある。羅浮仙など畫く場合、妖艶なる仙女に配する老梅としては、此の種を措いて他に求められない。

紅梅の趣き

花の氣品からいふと、趣味から見て、梅は將に雪白に限り、單瓣に越すものはないが、紅梅となると、また趣きが變つて来る。面白いのは、日本獨特の技法ともいふべき大和繪には比較的紅梅が多く畫かれてゐることである。その代表的のものは『松ヶ崎天神縁起』の第二卷、菅公が配所に送られる刹那、紅梅殿の庭を眺めて、今しも咲き競ふ紅梅と別れを惜しむ場景の如き、その設色の美しさ、構圖の巧緻さ、珍らしい位整つたものであり、圖中には、櫻と柳と紅梅とが取交せて畫かれてゐるのであるが、紅梅の描法、肌の線を極めて強く畫きながらも、枝を配り花を點するに従つて柔か味を増して來るところは流石といはねばならない。やゝ誇張されて大きく畫かれた花が、少しも不自然を感じさせないのは筆の力である。

東京美術學校にある『雪中御幸繪卷』の中にも美しい紅梅が畫かれてゐる。これは『古今著聞集』などで有名な、白河院、雪中に小野の太后宮を訪はせ給ふ處を畫いたのであるが、この中には、紅梅が極めて美しく畫かれ、鴛鴦など配せられて情趣を深めてゐる。

光琳派の梅も面白い。この技法も支那の繪には見られない一種の特徴をもつ。國寶の津輕家の紅梅白梅の屏風などよい例である。

かうして同じ梅でも、白梅、殊に野梅は、墨梅などゝなつて雄勁な姿態を寫され、紅梅は大和繪や琳派の方に根強く移されて艶麗なる場面を描き出さしめてゐる。梅の兩極面が見えて中々に興趣が深い。

綠 萼 梅

野梅は萼が褐色であるが、中に綠萼梅といふのがある。名詮自稱、萼が綠色であり、花の輪も大きく、正しい五瓣である。飽くまで潔い雪白の五瓣、それを正面から見たのが紋どころの梅鉢で、加賀家前田侯は祖先が此の梅を以て定紋としたので、加賀白の名がある綠萼といふ處から、茶青梅の名もある。

元來、野梅から出てゐるものであるが、輪の大きいのと、形の端正な處から、繪に畫かれることも多い。時に八重の茶青もある。品種の變りを好む園藝家などの拵らへたものだけに原種よりは遙かに氣品が

劣つてしまふ。

紅筆青軸

光琳派の作などには、嗟呀たる老幹から、若い枝の直線的にすく／＼と伸びるのを緑で畫く、それは決して單なる技巧の末ではなく、立派な自然の寫生から來てゐる。梅の方では此の綠色にすく／＼と伸びるのを青軸といふ、大方は白花で、寧ろ白に多少青味がかゝつたそれさへある。處が種類によると、若い枝が褐色になるのがある、これを紅筆といふ。紅梅に屬するものは大抵それである。但し紅梅性のものが、人工的に淡紅になつたり、爪紅になつたり、底紅になつたりするので、それがたとへ白味勝ちになつても、若い枝の中心は褐色である。繪などに畫く場合、注意を要することと思ふ。

梅は花咲いてのち葉が出る。葉の形は正楕圓形で、周圍に鋸齒を刻んでゐるが、時に葉の細目な種類がある。摩耶紅性と呼んで紅梅に多い。杏性といふのがある、杏と梅の間のやうで、作りものとしては面白いが、自然からは遠くなつてゐる。

梅に來る鳥

花鳥畫となると、梅に鶯が昔から人口に膾炙されてゐる。梅の咲くころになると、今まで山地にあつた鶯が、餌を求めて人里近く來るので、自然梅の木などに來ることになる。併し梅咲く頃に來る鳥は、決して鶯ばかりでない。目白も來る、鶯も來る、紅梅には鶉もとまる。鶯は梅の幹の皮の間に潜む小蟲などを啄むのであるが、目白とてもその通りである。唯鶉だけは、白梅にはあまりとまらず、紅梅にだけ來る。それは此の鳥、紅い實や紅い花を好むといふ特殊の習性から來てゐるのである。椿の花を好み、南天の紅果に集まり、時に紅梅の花を啄む、憎んではならない、愛すべきである。

古人はかうした自然の一現象すら、決してなほざりに見てはゐない、紅梅の花びらを鶉が啄んでゐる處は、既に元信がこれを畫いてゐる。そしてその觀察が少しも過まつてゐないのである。われらはかうした作に接することに、たとへ極り切つたやうに扱はれて來た梅の花にさへ、まだ／＼多くの畫かれざる境地あるを思ふのである。

雜草と藝術

一〇八

一

雜草とは、その名の通り原野路傍に自生する植物、草本類の總稱であり、凡そ人工に依つて栽培され耕作され、人工に依つて繁殖法を圖られてゐない草木は、皆此の雜草といふ中に含まれてよいかと思ひます。尤も今日食糧に供せられ、藥用に用ゐられ、或は染色紡織等に使はれてゐる植物だとして、元は一雜草に過ぎず、それが永い間の人工的栽培により、今日のやうな有用植物になつたわけでもあります。そして、拾へるもの丈けは拾ひ、採るべきものは採り、そして今残つてゐるのが、雜草として、ともすれば田園の厄介物となつてゐる種類であります。併しその雜草の中には、まだ形の面白いものもあり、色彩の美しいものもあり、食用になるものも、幾多雜草に残れてもゐれば、一寸口にしたばかりで命を取られるやうな毒草もあり、染色の原料となるものも、相應に雜草中に残つてゐるのであります。たとへば、年中行事の中で、よく知られてゐる春の七種です。

芹なづな、お行、はこべら、佛の座、すゞ菜、すゞしろこれや七草といふ。此の中で、今栽培植物となつてゐるのは、すゞ菜、すゞ代、即ち菜と大根ばかりで、他は皆雜草であります。

それから雜草と申しますと、一寸小さな草ばかりのやうにも感じられますが、中には五尺にも、七尺にも高く伸びるものもあり、さうかと思へば、全く五六分位しかないものもあり、形も實に千態萬狀を極めてゐるのであります。

二

さて此の雜草といふものを、藝術の上から眺めて見ませう。一體花鳥畫と申しますと、昔は一二種、若しくは數種の植物に、禽獸蟲魚などを配して構圖を纏めたものが多いのですから、自然撰はるべき植物も形が面白いとか、色彩が美しいとか、さうでなければ特殊の故事や傳説によつて聞えてゐるとか、先づ多く人に知られてゐる植物に限られてゐました。然るに最近では、日本畫の取材も非常に擴大されて來てゐますし、畫人の視野そのものが今までとは違つて非常に廣くなつて來ました。殊に最近の傾向として、自然の一部を、そのままに畫材とすることが行はれてゐます。山林なり野原なり、その一角を取つて極めて

一〇九

忠實に寫すのです。かうしてその有のままの自然を寫すといふことになると、その中に描かれるものは、自然雑草が多きを占めるといふ風になり、畫いて見れば、名稱も知つて置く必要があり、形態の大體も知つて置かぬと困るといふので、自然雑草に關する知識の必要が叫ばれて來ます。

さて我々はいま、戶外へ出て自然界の現象を眺めて見ます。そしていま、日常どんな草が一番多く眼に映るか、どんな草が一番印象を深めてその觀賞眼を刺戟してゐるかを觀察させよう。

三

こゝに面白いことは、東京附近はいふに及ばず、全國に亘つて、普通原野の雑草類を眺めて見ますと、日本固有の植物より、外來の植物が非常に多く眼につくことです。姫女苑、姫むかしよもぎ、野幌菊、荒地野菊、鬼のげし、待宵草、阿蘭陀れんげ、即ちクローバー、紫かたばみ、鬼なづな、軍配なづな、この外枚舉に遑ありません。それが屋根の上、溝土の上、石垣の間、橋の袂、空地といふ空地、野といふ野、荷もそこに土といふものがあれば、忽ち根を托し、葉を擴げ、莖を伸ばしてぐんぐんと勢ひを伸ばして行きます。たとへ少しの空地でも、若し一年もそのままにして置けば、忽ち雑草に占領されてしまひませう。そしてこれを占領する雑草の大部分が外來植物なのであります。

それならば、かうした雑草に占有されぬ前には、どんな草が、このやうな空地も占領してゐたでせうか。今から百年前の空地の有様を想像して見た場合、われわれの眼に映るのは、あかざ、ひゆ、めひじはゑのころ草、のびえ、をひじは、かやつり草、杉菜、こんな植物では無かつたでせうか。

併し外來植物の勢ひは、かうした雑草より更に根強いもので、丁度猶太人が、世界中到處で排斥されながらも、その勢力を伸ばしてゆくやうに、また山東邊から世界中に送り出されて行く苦力のやうに、これらは、我が家、故郷、そんなものには何の執着もなく未練もたず、一握りのパンさへあれば、一杯の水さへあれば、飢を凌ぎ渴を潤して、世界中を我が家として生活するやうに、外來の雑草は、唯一握りの土に生を托して、どんな塵埃の中に染れても、どんな烈しい雨や風に虐れても、炎天に照りつけられても、毫も勢ひの衰えるといふことなく蔓延し繁茂するのであります。

四

かうした外來植物は、如何なる経路を以て日本に渡來したのでありませうか。その進入の支關口は矢張り開港場であります。外國からいろ／＼荷物が着きます、その中に植物の種子が附着し、それが風などで飛んで根を地に卸すといふ経路です。農具の輸入に伴れて入つて來た植物もあれば、牧草の中に交つて來

たのもあります。クローバーの如き其の一つで、つめ草といふ名は、荷物につめた草の意味でありました。また外來の雜草の中でも、もとは立派な花園の栽培植物であつたものが、花園を脱走して雜草となつたものもあります。布袋葵や、待宵草の如きはその適例であります。

外來雜草の中で、姫むかしよもぎと姫女苑は最も多く眼に觸れます。従つて此の植物は見方に依つては外來雜草の代表のやうでもあり、殊に姫女苑が夏の候、丈けが四尺位に伸び、すく／＼と立つて雪のやうな白い花を開く處は、一種の趣きがありますので、繪に畫いた人も澤山あります。雜草園など畫けば、必ず此の草が大立ものとなります。姫むかしよもぎは明治草ともいひ、御維新草とも稱へ、鐵道草の名もあります。もと紀州藩で米人カツトリング氏を聘して開拓事業を興してから俄かに此の草が見え出したといふので、明治草、御維新草といひ、鐵道の敷設と共に傳播したので、鐵道草の名がある所以であります。此の外、荒地野菊は北米合衆國の原産で、フロリダ州から輸入され、野げしは北米にも歐洲にも自生してゐます。面白いのはかまど返しで、此の草が生へると忽ち宅地も畑も荒して財産を無くしてしまふといふので籠返しといひ、貧乏草とも呼ばれてゐます。待宵草は今日では夏の夕の情趣を見せる草として、藝術との因縁もだん／＼深くなつて來ました。布袋葵も、ウオーターヒヤシンスの名で呼ばれた美しい花これも繁殖力が強く、池や沼に植ゑますと、水を冷くして魚類の繁殖を妨げたりします。併し見ては綺麗

なので、鶴など配したりして花鳥畫の好畫材となつてゐます。

五

今度は日本固有の雜草に入ります。日本の雜草の中には、弟切草のやうな面白い傳説を有し、大和繪の好畫材となつたり、戯曲に脚色されたりしてゐるものもあります。花山院の御宇、鷹飼の晴頼が、家の技を傳へ、若し鷹に依つて傷など負ひますと、直ぐに家傳の草を取つて傷につけ治療したのを、弟某が慾に眼が眩んで、その秘法を人に漏らしたので晴頼が怒つて弟を切つたので、弟切草の名を得たわけです。

鴨趾草は、月草と書き、露草と呼ばれ、俗に螢草とも呼ばれてゐます。形も優しく色も美しく、雜草の中の優品です。繪に畫かれることも多く、よく人口に膾炙されてゐます。古歌に

つき草に衣はすらん朝露にぬれてのちはうつろひぬとも

とあるのがそれで、昔は此の花弁を摘み取つて衣に模様を摺りつけたもので、染料植物としては古くから用ゐられたものであり、近江には紺屋太郎の名も残つてゐます。支那には古くからありますので、明あたりの花鳥畫にはよく此の草が現はれてゐます。

茜は赤根であり此の草を地から引ぬきますと、根が赤く見えます。ざら／＼した莖で感じのよくない草

ですが、染料としては昔は中々重要なものでありました。紫草はいふまでもなく武蔵野の名草でむらさきのひともとゆゑに武蔵野の花はみながらあはれとぞおもふの歌で聞えてゐます。

茜の莖のざら／＼してゐるのを考へますと八重律などの纏繞性草木のことが眼に浮びます。八重律には二種あります。古歌にいふ八重むぐらといふのは、俗に「かなむぐら」と呼び、夏路傍などを蔽ひつくす位盛に繁殖するもの、その葉は掌状を呈して居ります。此のかなむぐらの巻き方は右巻で、あさがほの左巻と共に巻き方の例によく引かれます。

此の八重むぐらによく似てゐるのが、藪枯しで、俗に「こんこんごま」と呼ばれ、四郎五郎とも呼ばれてゐます。藪まで枯らしてしまふといふ位に繁殖力の強い草で、田園の厄介ものですが、見ては一寸風情があります。「さるとりいばら」は、鋭い刺があつて痛い植物ですが、葉の形も面白ければ、その實が秋になつて眞赤に色づき、更に葉が霜がれて落ちてしまつても、蔓のさきに珊瑚のやうになつて残る風情など如何にも畫趣があり藝術的に見ても興趣があります。

盛夏の野を這ふ畫顔には、鼓子花の名があります。朱鷺色の鼓を散らしたやうな此の草の下を、金屬性の光澤を帯びた蜥蜴が走つてゐる處などは、黄筌の繪にでもありさうではありませんか。

名の妙なのでは、へくそかづら、まゝこのしりぬぐひ、犬のふぐりなど、まゝこのしくぬぐひの種類である。みぞそばは時に繪にも現はれて來ます。

まだ此の外、路傍の草には、「いらくさ」「いのこづち」のやうな、勢力旺盛のものもあれば踏んでも蹴ても、ピクともしない「をひじは」のやうなものもあります。

かうして見ますと、同じ雜草でも、葦、蒲公英などは餘程優しいもの、土筆は愛らしく食用にしても美味であります、これが田園荒しの杉菜の花かと思ひますと、一寸意想外であります。更に小さい草で、鷺苔などは瑠璃色した花の中に、豹の毛皮でも見るやうな美しい斑があり廓大鏡でも眺めれば、造化の巧みが、こんな微細な處にも及んでゐるかと思ひます。俳味のある狗兒草、かやつり草、水の中に生ずる澤瀉、水車前草、赤い莖を伸ばす猿猴草こゝにも立派な藝術の資料が潜んでゐるのであります。まだ雜草につきましては、いろ／＼お話しすべき畫材があります、今回はこれとよめて置きます。(昭和十年九月、讀畫會研究會席上講演大要)

服飾と藝術

日本に機業といふことが行はれたのは、随分古いことでありまして、既に神代の頃それがあつたらしく『古事記』を見ますと、天照大神が機をお織りになつてゐる處へ、素盞鳴命が馬を投げ込んでお騒がせをし、そこで天照大神が御怒り遊ばし、天岩戸に匿れさせ給うたと載せられて居ります。

兎も角も、植物の纖維や、動物の毛や皮で衣服を作るといふ起源の如何に古いことであるかは殆んど想像もつき兼ねる位であります。然らば、上古に於いては、どんな服裝をして居たか、これは精しくはわかりませんが、私共は諸所から發掘される土偶類を見て、大凡その形が想像出来るのであります。

先づ一番早く感じるのは袖の狭いことです。成るほど上代は衣食住といふことに十分の満足が得られません。いはゞ食糧の蒐集の如き男も女も全力を盡さねばならぬやうな有様でしたから、袖の如きも筒袖で男は鐵に、女は耕作に機織に、立働きの便利な形にしてあつたのだと思はれます。處が應神天皇の御宇に

なつて、弓月の王が染織の法を傳へ、初めて漢衣が輸入されました。すると今までの衣裳が如何にも殺風景で面白くない、色も單調だし模様らしい模様もない。人々は初めて衣服に對する美の慾求が出て來たのであります。

その第一が袖でした。袖は元來「外手」であり、「受手」であります。身體の外へ出る部分故、外出、外手であり、手が出るとそれを受けるから受手で、立居振舞の度毎にこれが動く、それが恰も魚の水を泳ぐ時、微妙に働く鰓を思ひ起させます、そこで衣服改良の第一が袖となつたわけであります。古い言葉に「袖ふる」といふのがあります。この言葉は、始めは悲しみの時に用ひたのですが、袖が大きくなり、美しくなると同時に意味も變つて來て、後は嬉しい時にも「袖ふる」やうになつて來ました。有名な「萬葉集」の

茜さすむらさき野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

は雄略天皇の御狩に出でます雄々しい御姿をたゞへた歌であります、よくその消息がわかります。

その袖の更に大きくなつたのが袂で、袂は「手元」で手の入るもといふ意味であり、また袴は佩裳の轉化で、下から佩き、實用と裝飾とを兼ねた一つの服飾物でありました。かうして漢衣の影響は益々深くなりまして、更に推古天皇の御宇になりますと、蜀紅錦だの間道織などといふ立派なものが續々輸入されそこで、益々衣服の上に於ける美の慾求が増して來たわけです。併し、これは僅かに上流に限つた丈けの

もので、中流以下のものは矢張り單調な極めて簡易なもので我慢してゐたのであります。

二

既に形の改良は企てられました。次ぎに来るものは色彩です。當時既に色のついてゐるものも用ゐられては居ましたが、それは決して精巧なものではありません。それが妙なことが動機になつて、此の機運を助長せしめ、染色上の一進歩を見るやうになりました。それは『仁徳紀』に載せられた、一挿話です。

仁徳天皇の御宇、是日子臣これくちのわのそみといふものがありません。ある大雨の日、庭の水溜にころげ落ちました。此の男、青い袴の上に紅の紐を締めて居ましたが、その紅の紐が雨水の爲めに落ちて滲み青い袴の色を染めてしまひ、こゝに青と紅のぼかしが出来てしまひました。人々は奇異の眼を墮つてこれを眺めました。今から見れば何でもない事ですが、これがさも大事件のやうに歴史の上に記されてゐるほど、大事件であつたのです。さうでせう、これが動機となつて、染色上に「ぼかし」が工夫されたとしたならば、大事件には違ひありません。

當時のことですから、染料というた處で、大したものではなく、衣裳にも鴨趾草つぎくさで摺つた模様位が精々であつたのでせう。鴨趾草は、つゆ草とも呼び、東京附近では「ほたるぐさ」と呼んでゐる雑草の一つで

一寸笹に似た葉を有し、半圓形の苞の上に、丸い瑠璃色した花瓣が二枚出て居ます。この花瓣を集めて模様を摺りつけるので、その衣が青摺衣です。その爲め「あをくさ」とも呼ばれ、古代に於ては餘程重んぜられて居たらしく、現に近江では此の草を「紺屋太郎」と呼んでゐます。柿本人麿の歌に

つき草に衣はすらむ朝つゆにぬれてのちはうつろひぬとも
とあります。

東北地方では、葱草が使はれました。所謂「しのぶ文字摺」がそれです。當時木の葉や、草の葉で、かうした事に用ひたものはいろいろあつたであらうが、だん／＼に判らなくなつて、主なものだけが傳へられて居るのです。

染料としては、次ぎに藍のことを申し上げねばなりません。藍(アキ)は元來、(アヲ)の轉訛で、此の草を染料に用ゐることは、奈良朝時代より以前らしく考へられます。當時既に阿波の國や攝津の國の如きは藍が盛に栽培され、重要な産地となつてゐたやうでありますし、その需要も多かつた所から、大藏省には織部司といふものがあり、その下に藍のことを司る役人も居りました。

鎌倉時代になると更に盛になりまして、四條天皇の御宇には、坂上明定の子、左兵衛尉明胤が藍作手奉行となり、代々その職を襲がせたことも記録に明かであります。藍には深藍だの中藍だの白藍だの、色々

ありまして、畏くも、天皇皇后春秋二期の御召服も藍で染められたと申します。此の草で染めたものは色として美しいのみでなく、衣服の地を丈夫にするといふことも手傳つてゐたやうです。それ故、藍の栽培は益々盛になり、その事を司どらしめる爲め、諸國に染殿を置き、その下に働く人々の住む所が、紺屋町だの、染屋町だのといふ名で残つてゐます。

藍の外に、紅色のものは茜、紅草、『かりやす』又は蘇枋があり、黄は『くちなし』『きはだ』を用ゐ、紫は紫草、その他、澁木の皮だの、紅殻だの、いろ／＼の植物が染料として行はれて來たのであります。

三

紅の染料の茜は、赤根であります。茜といふ草は、東京附近の山野を歩きましたが、よく自生のものが見られます。細かい白い毛の生へたザラ／＼した莖が四角ばつた粗末な草で、引ぬくと根が赤いので赤根と呼ばれたわけです。

義太夫の『艶姿女舞衣』の茜屋半七の家などは、矢張り染色原料を商つて居たのでせう。半七の家は、大和の五條ですが、大和の國には昔から茜が多かつたのです。根が赤いので地血ともいひます。紅は蒲公英に似た形で、花は薊に似て、それが樺色です。今は岩手縣方面で盛んに作つて居ります。此の草を蔭乾に

して、その汁を絞るのです。山形縣の最上紅も有名であります。紅のことを『くれなゐ』とも申します。呉の藍といふ意味ですが、呉の藍は、紅とは直接の意味がなく、藍といふのは染料の總稱であり、會々呉の國から渡來した藍、即ち染料が赤い色であつたので、赤を呉の染料、即ち呉の藍といひ、それが『クレナキ』となつてしまつたのです。此外に蘇枋があります。これは荳科の植物で、暹羅邊の原産であります。

紫は、昔から武藏野の産が有名であり、例の

むらさきのひと本ゆゑに武藏野は花は見ながらあはれとぞおもふ

の名歌もあり、よく知られてゐますが、今はアニリン染料萬能時代ですから、その草さへ忘れ勝ちです。併し色に依ると天然染料でなくてはならぬものもあります。

畏くも、天皇陛下の召させ給ふ黄櫨染の御袍は、黄櫨の木くわじゆせんの幹から取つた染料に依つて染るので、黄色の中で、最上のものであります。また天然染料のお話は澤山ありますが、この位にとゞめ、次に模様のお話に移りませう。

四

既に人々は織物に染色する術を知りました。併し、單一なる色丈けでは、中々満足出來ません。その美

的慾求はつひに模様を服飾の上にもまで表はすに至つたのであります。

然らば、その模様とは、どんなものが選ばれたのでありませう。よく古代の壁畫や彫刻を見ますと、その生活を中心とした動植物などが一番多く扱はれてゐます。いま一つ日本には、雲とか、霞とか、かうした天象の意匠化されたもの、圖案化されたものなどが非常に多いやうに思はれます。

それは何故かと申しますと、日本位濕氣の多い國は少く、従つて水蒸氣がいろ／＼に地上を彩ります。春霞、夏の朝霧、秋の狭霧、冬の霧、みな日常見る處水蒸氣の變化で、それが知らず、知らずの中に模様となつて現はれて來るのであります。染色の方でいふ『ボカシ』の如きも、その著しい例でせう。草葉に置く露、軒の點滴、矢張りその一つです。

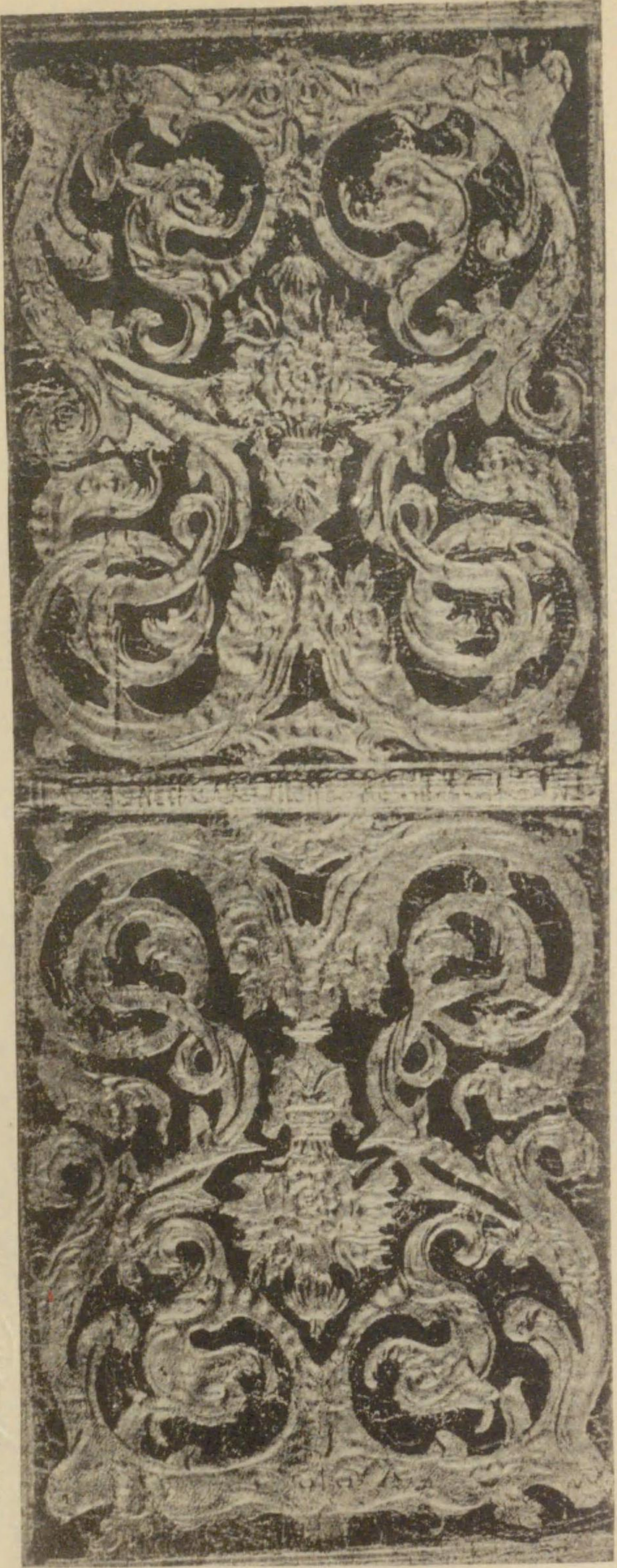
それから身邊を廻る動植物、それにも亦特別の意味のあるものがあります。大和繪などによく畫かれ、平安朝時代の意匠の一つになつてゐる浮線綾の如きは、蛾の交尾してゐる形から脱化したもので、『番ひはなれぬ』といふ處から用ゐられる比翼の鳥や、鳥禪などとともに、よく私共の目に觸れます。單純から複雑へ——かうした變遷は、意匠の上にも模様の上にも現はれ、それが最高潮に達したのが桃山時代で、豊太閣の豪華の現はれは、醍醐の花見の衣裳となつて居り、小袖幕にもそれが偲ばれ、絢爛眼を奪ふ時代を現出したのですが、いづれも細かく見ますと、中々に面白い問題が、いくらかも提供されて來ます。

百合花手金唐革



(金唐革の話参照)

綠地巢草手鏡袋



(金唐草の話参照)

模様範囲は、またいろ／＼の方面に亘ります。唯一本の糸で出来る絞りから、蠟纈の如き面白い方法刺繍のやうな手の込んだものもあります。蠟纈の如きは、推古天皇の時代、既に多くの立派なものが出来て居ます。織の方でも、唐織が盛に輸入されましたので、唯々經と緯と糸が交叉するといふばかりでなくいろ／＼美しい模様を織り出すやうになりました。

鎌倉時代には聖一國師が齎らした宋の織物から、博多織が案出され、豊太閤は泉州界に多くの織工を集めて、織物を奨励し、その結果紋紗、金紋紗、縮緬、大和錦などが出来たり、徳川時代になつてからは、綴錦や繻珍などが渡來して、織の方にもだん／＼精巧なものが現はれ、唐織の如きは、猿樂の衣裳としてなくてはならぬものとなりました。

再び模様のお話に歸りますが、桃山時代の大きな波は、一時低くなりました——が、再び元祿に至つて高潮に達しました。元祿以後の模様は、大體、今浮世繪などによつて偲ぶことが出来ます。その間には、俳優の名に依つて擴められた市松模様、小太夫染、千彌染、傳九郎染などといふものも出て來ました。今でも羽左衛門の渦巻とか、菊五郎格子とかが一部に騒がれるやうに、當時の名優の案出したもの、それに因んだものなどが、如何に持て囃されたかわかります。

それから新奇を競ふことにも注目すべきものがあります。江島生島問題に關係深い懷月堂がよく用ゐる

鐵線花などは、當時輸入のはや／＼のものでありました。此の外、判じ繪模様、例へば波に鐘を置き總模様に「金がわく」と讀ませたり、大きな鎌に輪と「ぬ」の字を書いて「かまはぬ」を利かせ、斧に琴に菊を配して「よきこときく」などは今にも傳へられて居ります。

市松模様は、名優佐野川市松によつて、その模様は不朽の價値がありますし、小太夫染は伊藤小太夫が案出した紫の絞ですが、小太夫が女形で狂亂をよくし、果ては發狂して自殺したことなど、當時の流行界に少からぬシヨツクを與へてゐます。かうして模様の變遷を見ることがありますが、何も古いものばかりを倣ふ必要はありません。電線にとまつた燕や雀でも、蝸牛の這つたあとの線でも、用ゐる方に依つては、立派に模様として生きて來ます。既に圖案の範圍は題微鏡裡に現はるゝミクロ模様や、リズム模様まで進んで居ります。新しいかうした模様等に、どの位生命があるか、それは中々に豫斷を許しませんが少しく宇宙の森羅萬象に向つて細かに注意を拂へば、織方でも染色でも、乃至は模様の方面でも、まだ開拓されぬ新しい世界がいくらかもあると信じます。(八王子織物組合に於ての講演筆記)

金 唐 革 の 話

一

袋物といふものが發達して、藝術的價値を高めるやうになつたのは、徳川時代も中期以後である。その代表的なのが煙草入や、紙入などである。殊に煙草入は袋と緒締と、筒と袋とは更に金具と、かう四つものゝ綜合藝術である丈けに、研究の趣味も深いわけである。此の金具といふものは、全く日本獨特の藝術ともいふべきもので、刀の目貫などに腕を揮つた名家が少くなかつた。それが一方煙草入の金具などで氣を吐いてゐた。

所が明治の初年、廢刀令が出て、刀劍の方の用途がなくなつてからは、多く煙草入の金具などで餘憤を漏らしてゐたわけで、加納夏雄などゝいふ近代の名人は、全く此の過渡期の人である。處が最近では、この煙草入といふものも、巻煙草の爲めに壓倒されて、此の方面の用途も少くなり、今では女の帶留位になつて、辛うじて餘喘を保つ有様である。

袋の方もだん／＼姿をかへて、紙入になつたり、ハンドバックに化けたり、巻煙草入に造られたり、時には女の鏡入になどなつて、昔のまゝの煙草入といふものは、珍らしい位になつてしまつた。筒となると更に需要が少くなつてしまつたが、これも工夫のしやうによつては、ペン入、矢立の代用位にはなるであらう、緒締も簪、その他婦人の装身具と姿をかへ行くやうである。

さて此の中で袋の問題であるが、これは歴史も極く新しく、初めは油紙位であつたのが、だん／＼と贅澤になり、遂には一寸四方幾何といふ高價なものを有るやうになつた。その代表的のものが、古渡更紗と金唐草である。古渡更紗の趣味は近頃熱心に研究する人も出来て、その價値を増してゐるが、金唐草の方は、その價値は認められてゐながら、今日まであまり研究されてゐなかつた。古い隨筆類にも見當らぬし、近頃の百科辭典のやうなものにもあまり書かれてゐない。唐草細工として載せてゐるのを見ると、元龜天正頃に渡來して、馬の鞍に作られた下等の革位にとどまり、立派な金唐草などになると、徴すべき文獻すらない。

然し、金唐草といふものは。見れば見るほど美しいもので、金色燦爛たる色彩のものもあれば、變化極りなき面白い模様のものもある。こんな風であるから、一部には随分好き者があつて、早くからこれに目をつけ、蒐集してゐたので、煙草入も今日では、立派に藝術品として扱はるゝに至つた。丸草というてま

だ細工に使はぬ一枚完全なものになると、上等のものは、一枚で一萬圓から二萬圓もしたものがあつた。岡大盡や、新川の鹿島家のコレクションなどは、時々今でも噂に上るが先年東京の美術俱樂部に陳列された。近江の淺見家の藏品の中にも、素晴らしい品が揃つてゐた。殊に鏡入となつてゐる菓草の如きは、その模様も完全で、その金色の唐草は見るからに美しさを極めたものであり、人形手や百合手の品にも、面白いものが澤山あつた。一體此の金唐草は、どうしてそれほど藝術的價値があるのか、どうしてこれが製作されたか、一わたり研究して見やう。

二

金唐草といふのは、その文字通り、金色をした舶來の草といふことである。此の草といふものは、随分古くから、いろ／＼の方面に用ひられ、中には藝術的價値の高いものも少くないのであるが、金唐草のやうに美しいものは少い。金箔金泥を自由に使ひこなしして、金屬版で型を打込む、その上から彩色をする、此の資料や、金箔類が、如何なるものを使ふか、化學的研究をしたら、定めし面白いものがあらう。一部の工藝家の間には、既にこれに着手してゐる人もあるといふ。そのやかましい問題の方は専門の學者に譲るとして、模様の種類から調べて見やう。

金唐草の模様といへば、先づ第一が巢草、これは一定の輪廓があり、その中に大小の唐草が總模様になつて配されてゐるもの、第二が人形手で、此の「手」といふのは「出」といふ意味であり、草の中に人形の模様の出で居るものをいふのである。此の人形といふものも多く金髪美しい洋婦人で、美人の大きさにも大中小とあり、中で、「銀天人」と稱するのが一番の上等としてある。「銀天人」とは、銀色で現はした天女のことであり、人形の大きさは、なるべく小さいのがよい。「小天人」と稱へるのは、エンゼルのことで、ちやんと翹を一双もつて居る。此の天女の周圍には、矢張り、華やかな花や、唐草模様で填められて、銀色の上には或は臙脂がかけられ、或は瑠璃色に塗られ、非常に美しい。

次に猿手といふのがある。これは全面の一部に猿が頭現はしてある。此の猿手に限つて地が黒色であり、黒の上には雲母が見える、濛い上品なものである。此の黒地に雲母といふのは猿手の特長で、外には見えない。

次が百合手で、名の通り百合の花らしい植物が大きく又小さくいろ／＼な形式で現はれてゐる。紅、紫金、茶、緑ときま／＼な色彩で飾られてゐるのが「五色百合手」と稱へられてゐる。いま一つ、「人參百合手」又は「人參手」といふのがある。日本の人參に似た植物が現はれてゐるのであるが、今少し何とか名のつけやうがありさうなもの、餘り模様にそぐはないやうである。

大體右のやうにわけてあるが、此の外に現はれて來る動物には、狐、蛇、いろ／＼の鳥類などがある。それが唐草の曲線の中に巧みに取入れてある。

色からいふと臙脂、金地、緑地、丹地、黄地があり、時には色の變つたものもあるが、金と臙脂だけは少しも褪色した形跡なく全く目ざめるやうな美しさである。だから袋にしても、紙入れにしても、その模様の取入れ方には相應に苦心を要するので、その主要の模様を取入れたものは、一番價が高く、その周圍などは、グツと値が落ちるわけである。淺見家の鏡入の巢草の如きは、五六寸に三四寸のものが、二つ折となつて、その模様が完全に残つてゐるから、此の方面の研究には極めて便利であらう。それから、草には必らず裏に木目形の紙の貼つてあるのが、金唐草の特徴である。何故に此の木目形の紙の貼つてあるのが特徴かといふことであるが、これが金唐草が如何なる方面に用ゐられてゐたかを探究する唯一の手がかりとなるのである。

三

金唐草の歐洲に於ける用途の何であつたかを説く前に、此の藝術品が何處で出來たかといふことを調べなければならぬ。いま金唐草を扱つてゐる人々の話を綜合すると、その製造の大部分は、西班牙といふ

ことに落ちつく。一説には葡萄牙説がある、併しこれはどうも西班牙の方が正しいらしい。西班牙に於いては、中古、その藝術が相應に盛であつて同國の主要なる輸出品であつたといふ。處がその模様から推して、どうも西班牙在來のものでないといふ説もある。そこで彼の地でいろ／＼と研究すると、古代ローマに類似したものがあつて、更に絲を繰つてその元を探ると西班牙は元來、天産には恵まれぬ國で、どうしても製造工業を盛にしなければならなかつた。そこで若い出稼人は盛に伊太利邊へ出かけ、ローマ邊りでの金唐革の型の古く残つてゐるのを知り、その製法を研究して歸り、西班牙の國內に於て盛にこれが製造を開始するやうになつた。西班牙に於ける金唐革の製造は寔にこゝに端を發するので、時代からいふと、十三四世紀頃らしい。西班牙や葡萄牙からは、當時屢々東洋方面へ貿易の手を伸ばさうとしてゐたので、そんな機會から日本にも渡來したわけである。

古い處では、日本でも此の猿手の金唐革を鎧の胴卷に使つた例がある。その製作年代は應永年間といふから今から五百三十四年前、足利時代である。鎧の胴卷であるから、革は二枚使はねばならぬ、その残りを鎧の袖に用ひたといふ。それからだん／＼金唐革の輸入も盛になつて、徳川時代には、いろ／＼の種類が舶來し、數も相應に多きに上つたらしい。

傳説によると、此の金唐革の輸入に、最も早く目を注いだのは、加賀の錢屋五兵衛で、彼は多くの大船

を建造し、盛に南洋方面まで出かけては、西班牙人や、葡萄牙人と交易した。その中には多くの金唐革があつた。金澤の前田家には、此の贅澤な猿手の金唐革丈で、格天井を作つた室があるといふ。私はそれを見たわけでないから、眞偽は知らぬが、その金唐革は、後に錢屋五兵衛が海外貿易のことが發覺し捕はれて獄門となり、家財全部波收されたが、その時、五兵衛の集めた金唐革が此の格天井になつたといふのである。事實の有無は別問題としても、金唐革が錢屋五兵衛の手に依つて輸入されたといふのは、面白い話柄ではないか。

機を見るに敏なる江戸の商人は、わざ／＼金澤に出かけては、五兵衛の手から金唐革を購ひ、これをいろ／＼の細工物として賣出し巨利を收め、又、五兵衛が捕はれてからも、何處をどう傳はつて來たか、贅澤な金唐革は、相應に江戸や大阪で捌けて、煙草入のやうな小さいものばかりでなく、亂れ箱、化粧簞笥鏡入などにまで製作されたといふ。

今日現はれて來るのは、大半はその當時のもので、錢屋五兵衛の刑死は嘉永五年のことであるから、その手で盛にこれが輸入されたのは、文化文政から、天保へかけての事と思はれる。そして新しくなればなる程、輸入された品も下つて來たやうである。

四

時代が新しくなると共に、金唐革の模様もだん／＼と變つたものが出来るやうになつた。人間も、昔の人形手のやうに天女や、エンゼルなどばかりでなく、騎士や獵人風のもを現はしたものが出来て來たり俗に黒船手といつてゐる。船舶を現はしたものなども生れて來た。これは巢革のやうに輪廓があつて、その中央に船を大きく現はし、澤山の水手が櫓をこいでゐる。下には波が象徴的に表現され、上には雲が浮き、鳥が飛ぶ。櫓には旗が翻つてゐる。こんな模様のもが、ポツ／＼現はれて來た時代に、日本の天地は黒船渡來で國內が上へ下へと沸き返つてゐたわけである。

通人や洒落れた人は、直ぐそれを手に入れて胴籠にしたり、一つ提などに拵らへたりして新奇を誇つた。しかしその藝術的價值からいへば、人形手の古いものや、猿手などには及びもつかぬものである。かくて金唐革が、袋物にいろ／＼と趣向を凝らされて用ゐられて來たのは少くとも天保前後かららしい。日本に於ける金唐革は、大抵右のやうな経路で渡來し、以上のやうに流布したのである。

さて遡つて、歐洲に於ける金唐革の本來の用途は何にあつたのであらうか。單なる壁紙に使つたり、椅子や卓子の裝飾に使ふのには餘りに贅澤過ぎる。そこでいろ／＼と研究すると、革の裏に貼られた木目の

ついた紙に問題が残される。此の木目の紙は、よく明治の初年あたりの洋書の見返しなどに使はれたものと同種で、これから推して行くと、先づ古い書籍の裝幀に用ゐられたことが一つ、併しそれとても一般の書物ではなく、聖書などのやうな式典に用ゐるものゝ外装である。

それから婦人の鏡入である。此の鏡入として用ゐられた例は一番多く、種類は巢革である。大中小と三種あるが、大きいのは一尺四寸に及ぶものがあり、二つ折にして巧みに模様が二分されるやう、特殊の型が出来てゐる、革本來の性質や、模様的一般を見るのは、此の巢革の鏡入が一番である。

次ぎは寺院の調度裝飾で、矢張り式典に用ひる卓子の上へ貼り込んだり、壁畫の周圍の裝飾に使つたりした例である。だん／＼少くなるし、あとから出来るものは、遙かに藝術的價值が少いといふので、歐洲でも今更ながら驚いてその蒐集に着手した人があるといふ。

更に面白いのは、歐洲大戦後、英國から少しばかり輸入された金唐革があつて、これが西蔵ものらしいといふことである。傳説に依ると、淀屋辰五郎も、その豪華を盡した時代には、天井も猿手の金唐革で貼つてゐたといふ。錢屋五兵衛の話と對照して面白い。

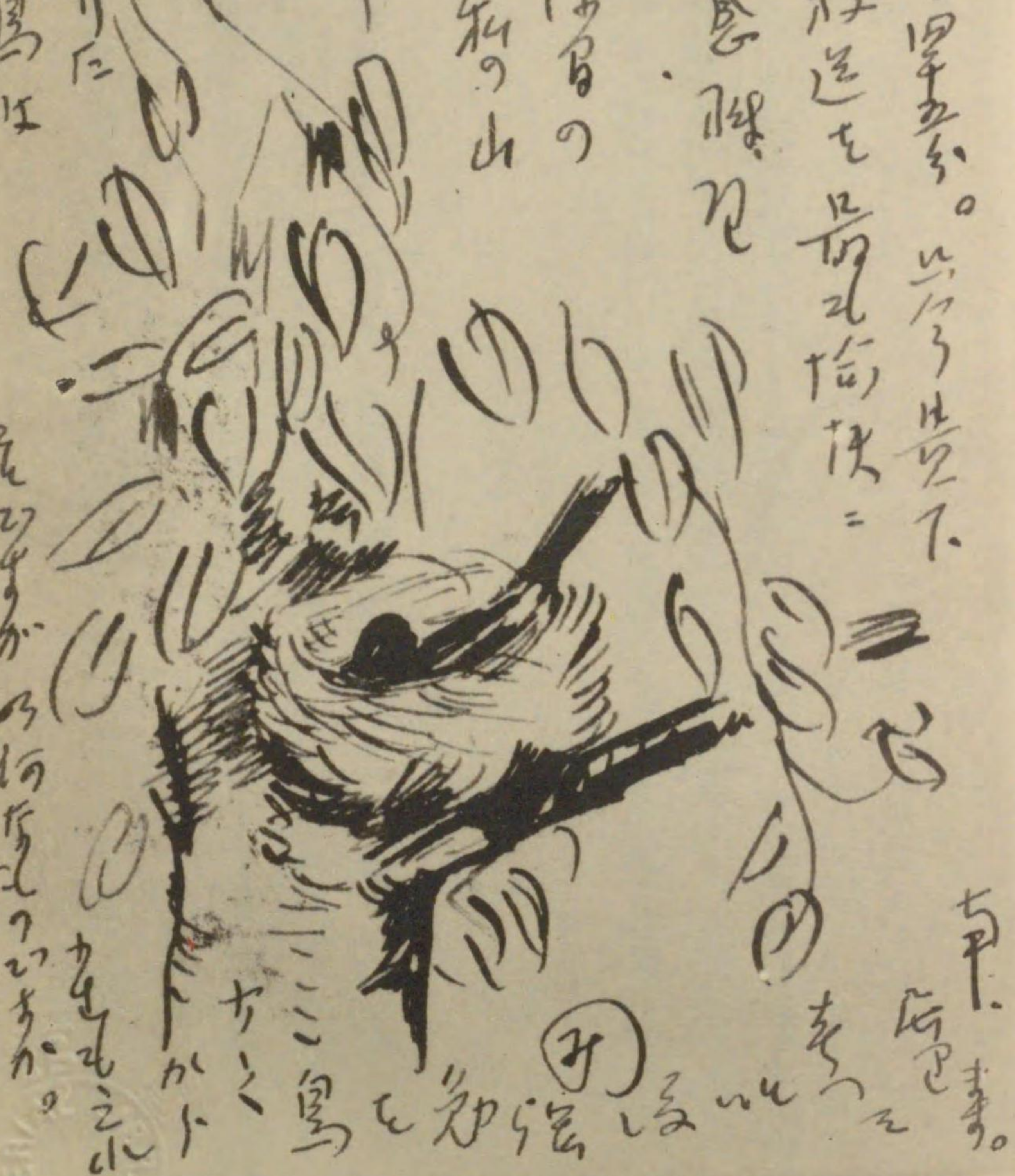
それから支那では、西太后の寢臺の飾りに黒地と臘脂の人形手の金唐革が用ゐてあつたといふことも傳へられてゐる。だが例の兵士亂入事件から此の方、それが完全に残つてゐるかどうかは明かでない。なほ

今日まで世に傳はつてゐる巢草の中で、最も優等と稱せられてゐるのは、郷男爵家の手にある巢草だといふ。なほ、此の金唐草と、日本の天正草や正平草と比較研究するも面白いが、これは他日を期することとする。(昭和四年四月)

春の小鳥放送を聞いて 南熏造氏から

二月十日午前十一時五分。此の鳥は下
の十鳥の注の如く放送を最上愉快に
お聴きなさい。感謝の
まこと。

さあ、北風は春の
旅で、あまの山
か余の
空から、おん
しを、まことの
鳥か、果て
さる、近見、雁、に
峰の、空、生、ひ、鳥、は
赤腹を、申す、つ、り、ま、を、あ、い、ま、す、の、赤、腹、は、透、り、鳥、の、た、り、お



ちりま

春の小鳥

春の小鳥のお話をいたします。小鳥の研究もいろいろな方面がありまして、或は學術的に習性や生態を調べるもの、或は飼ひ方仕立方に没頭するもの、或は藝術的、趣味的の探求などですが、學術的の方面や飼ひ方仕立方に就きましては、その方の専門家の方々に譲り、私は趣味の方面からお話を進めて行きたいと存じます。

鶯

春の小鳥といへば、先づ鶯が第一に數へられます。この頃、少し廣い庭などへは、時々やつて來ては、庭木の小枝をあちこち渡り歩いたり、幹の皮の間の小蟲の卵などを探したりしてゐます。ホーホケキョーと啼くまでには、まだ間がありますが、チチチと小さな聲で鳴きながら、飛び歩く風情は誠に愛らしいものであります。

さて此のは鶯、鳥學上では燕雀目の鶯科に屬し、あの灰色がかつた緑の羽毛や、細く鋭い嘴、可愛い